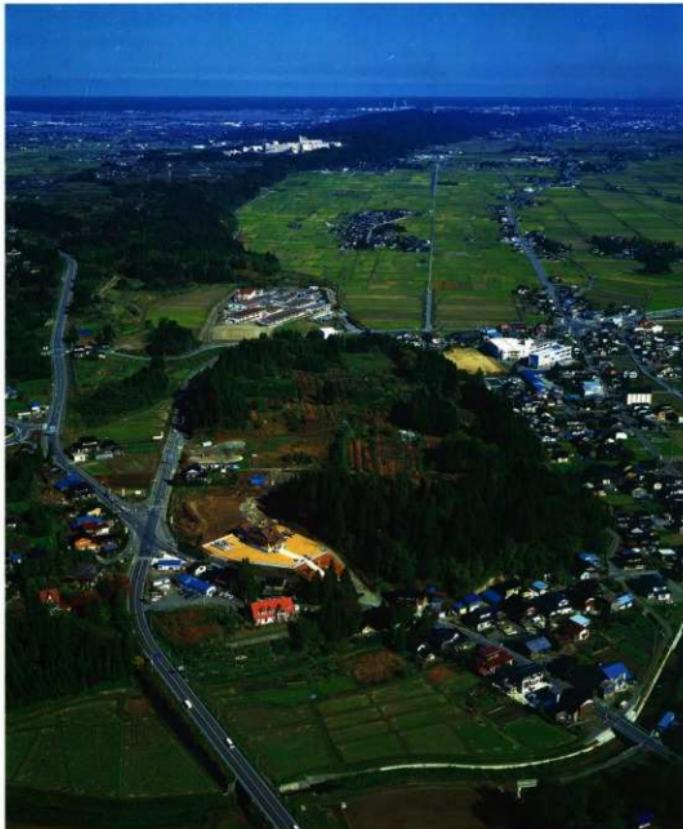


「立山あおぐ特等席。富山市」

史跡王塚・千坊山遺跡群
保存管理計画策定報告書



千坊山遺跡(手前丘陵)を望む（南から）

2008年3月
富山市教育委員会

おうつか せんぼうやま

史跡王塚・千坊山遺跡群

保存管理計画策定報告書

2008年3月
富山市教育委員会

序

富山市は、東に立山連峰を臨み、神通川、常願寺川などの河川が流れる自然豊かな地であります。古くは旧石器時代からの遺跡が多数現存し、先史・古代から独自の文化を育んできました。

史跡王塚・千坊山遺跡群は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての7カ所の集落・墳墓の遺跡で構成され、北陸を代表する遺跡として、平成17年3月2日に国の史跡に指定されました。

史跡には、山陰との関係がうかがえる四隅突出型墳丘墓や、富山県を代表する大型前方後方墳の王塚古墳などが含まれ、他地域との交流関係や墳墓の変遷過程を知ることができます。また、弥生時代から古墳時代にかけて地域社会がまとまっていく様子が具体的に分かり、北陸における古代の地域国家の成立を考える上で重要な遺跡群として高く評価されております。

このような貴重な文化財を保存し、末永く後世に残し、広く市民や県民に公開していくことは、私どもの大きな務めであると考えております。

そこで富山市では、文化庁、富山県教育委員会の指導のもと、広大な史跡における適切な保存・管理を行うための指針を作成することといたしました。このため、平成18年度と19年度の2年間にわたり、王塚・千坊山遺跡群保存管理計画策定委員会を設置し検討を行ってきたところです。

本報告書が、史跡指定地の現状変更などに際しての指針はもとより、地域の皆様が文化財としてその土地への意識を深めるのに役立てば、幸いります。

終わりに、本報告書の計画策定にご尽力いただきました委員各位、文化庁、富山県教育委員会、ならびに史跡の保護についてご理解とご協力賜りました土地所有者の皆様をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成20年3月31日

富山市教育委員会

教育長 吉川 實

例　言

1. 本書は、富山市婦中町羽根・長沢・新町・富崎・千里地内に所在する史跡王塚・千坊山遺跡群の保存管理計画策定報告書である。
2. 保存管理計画策定事業は、富山市教育委員会が国庫補助及び県費補助金の交付を受けて、平成18～19年度に実施した。
3. 本事業は、王塚・千坊山遺跡群保存管理計画策定委員会を設置して行った。なお、委員会の設置にあたり、文化庁文化財部記念物課、富山県教育委員会生涯学習・文化財室の指導・助言を得た。
4. 本報告書の作成は、下記の方々の指導・助言・協力を得た。記して深く謝意を表したい。(順不同、敬称略)

史跡指定地の土地所有者及び管理者各位、羽根地区・長沢地区・新町地区・富崎地区・千里地区、青山哲澄(各願寺住職)、山田稔(富山県農業技術センター畜産試験場)、竹内久(富山県富山農地林務事務所)、鈴木陽一・大閑逸子(泉佐野市教育委員会)

5. 本書の執筆分担は、次のとおりである。

第1章～第2章第3節1(2)ア 細辻嘉門(富山市教育委員会埋蔵文化財センター 主任学芸員)

第2章第3節1(2)イ 大野英子編 2002「富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告書」に依拠

第2章第3節1(2) 細辻嘉門

第2章第3節2(4) 根来尚(富山市科学博物館 学芸課長)

第2章第3節2(5) 南部久男(富山市科学博物館 主幹学芸員)

第2章第3節2(6) 布村昇(富山市科学博物館 館長)

第2章第3節2(7) 吉村博儀(富山市科学博物館 主幹学芸員)

第2章第3節3(2)～第4章 細辻嘉門

なお、第2章第3節2(3)古植生調査をパリノ・サーヴェイ株式会社、第2章第3節2(1)地形・地質調査・(2)植生調査・3(1)土地利用の現況を㈱日本海コンサルタントに委託した。

6. 本報告書の編集は、堀沢祐一(富山市教育委員会埋蔵文化財センター 主査学芸員)と細辻が行った。

目 次

第1章 沿革と目的

第1節 計画策定の沿革 1

第2節 計画の目的 1

第3節 委員会の設置

 1. オブザーバー及び委員名簿 2

 2. 委員会要綱 3

 3. 委員会経過 4

第2章 史跡王塚・千坊山遺跡群の概要

第1節 指定に至る経緯 5

第2節 指定地の状況

 1. 指定説明とその範囲 5

 2. 史跡の特色 6

 3. 史跡王塚・千坊山遺跡群の構成 7

第3節 史跡の現況

 1. 歴史的調査の結果

 (1) 史跡周辺の遺跡 10

 (2) 史跡に関する試掘確認調査など 11

 (3) 総括 史跡王塚・千坊山遺跡群における在地勢力の推移 35

 (4) 伝承と古絵図 37

 2. 自然的調査の結果

 (1) 地形・地質調査 38

 (2) 植生調査 49

 (3) 古植牛調査 65

 (4) 昆虫類調査 70

 (5) 動物調査 76

 (6) 土壤動物調査 79

 (7) 気象調査 80

 3. 社会的調査の結果

 (1) 土地利用の現状 81

 (2) 土地所有の現状 89

 (3) 史跡にかかる法的規制 96

 (4) 史跡周辺の環境 97

第3章 保存・管理

第1節 基本方針 117

第2節 構成要素 117

第3節 保存・管理の方策 131

第4節 現状変更等の取扱方針及び取扱基準 134

第5節 史跡指定地以外の周辺環境を構成する要素の保存管理 146

第4章 整備・活用及び運営・体制整備

第1節 史跡整備の方針 148

第2節 運営・体制整備 148

第3節 今後の進め方 148

参考文献 150

第1章 沿革と目的

第1節 計画策定の沿革

史跡王塚・千坊山遺跡群は、平成17年3月2日に、すでに史跡に指定されていた王塚古墳(昭和23年1月14日指定)に勅使塚古墳・千坊山遺跡・六治古塚墳墓・向野塚墳墓・富崎墳墓群・富崎千里占墳群の6遺跡が追加指定され、名称変更された。

富山市では、史跡の適切な保存管理の指針を具体化するために保存管理計画を策定することとし、王塚・千坊山遺跡群保存管理計画策定委員会を設置し、国庫補助金、県費補助金の交付をうけて、平成18~19年度の2ヶ年間にわたり検討を行った。

なお、史跡王塚・千坊山遺跡群整備事業は、「富山市総合計画2007~2016」(平成19年3月)に位置付けている。

1. 各年度の事業内容

(1) 平成18年度

王塚・千坊山遺跡群保存管理策定委員会の開催(2回)

環境基本調査の実施(地形地質・植生・古植生・昆虫・動物・土壤動物・気象・土地利用の現況)

(2) 平成19年度

王塚・千坊山遺跡群保存管理策定委員会の開催(2回)

環境基本調査の実施(古植生)

都市計画図・境界測量図・調査平面図の合成図作成。

保存管理計画策定報告書の刊行。

第2節 計画の目的

史跡王塚・千坊山遺跡群は、北陸における弥生時代後期から古墳時代前期までの地域社会の変遷を物語る重要な文化遺産である。

本史跡は指定面積が広大なうえ(指定面積110,878m²、地権者数130名、315筆)、7カ所に分散しており、それぞれ異なる現状や問題点を抱えている。また、史跡を取り巻く環境は、世代交代による土地管理の悪化や、周辺での土地開発など、近年著しい変化がみられる。

このため、本計画の策定は史跡王塚・千坊山遺跡群を将来にわたって良好な状態で確実に保存し、市民、特に子どもたちが活用しやすいように環境を整えることを目指す。

今後、保存管理計画に基づき、史跡を保存・活用するため、整備計画について十分な検討を行うものとする。

第3節 委員会の設置

王塚・千坊山遺跡群保存管理計画策定委員会は、平成18年7月7日に設置した。オブザーバー2名を委嘱し、委員は学識経験者7名、関係機関3名、地元関係者3名で構成される。オブザーバー及び委員名簿は2ページ、委員会要綱は3ページのとおりである。

1. オブザーバー及び委員名簿

オブザーバー

	氏名	分野	所属
1	山下 信一郎 (やました しんいちろう)	関係機関 (行政)	文化庁文化財部記念物課文化財調査官
2	中西 彰(平18) (なかにし あきら) 藤繩 太郎(平19) (ふじなむ たろう)	関係機関 (行政)	富山県教育委員会生涯学習・文化財室長 平成18年度は中西彰氏、平成19年度は 藤繩太郎氏

委員

	氏名	分野	所属
1	黒崎 直 (くろさき ただし)	学識経験 (史跡整備)	国立大学法人富山大学人文学部教授 富山市文化財調査審議会委員
2	佐古 和枝 (さこ かずえ)	学識経験 (史跡活用)	関西外国语大学国際言語学部教授
3	高瀬 要一 (たかせ よういち)	学識経験 (史跡整備)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 文化遺産部長
4	西井 雄儀 (にしい たつよし)	学識経験 (考古)	富山県文化財保護審議会委員 元婦中町文化財保護審議会委員
5	舟崎 久雄 (ふなさき ひさお)	学識経験 (教育・考古)	富山県立富山東高等学校教諭 富山考古学会事務局長
6	麻柄 幸子 (まがら さちこ)	学識経験 (文化)	富山市日本海文化研究所研究員 元婦中町史編纂執筆協力委員
7	湯浅 純孝 (ゆあさ すみたか)	学識経験 (自然・動物)	富山県自然博物園ねいの里館長 富山市文化財調査審議会委員
8	関 清 (せき きよし)	関係機関 (考古)	富山県埋蔵文化財センター所長
9	木本 秀樹 (きもと ひでき)	関係機関 (教育)	富山市立南部中学校校長
10	西向 利美 (にしむこう としみ)	関係機関 (教育)	富山市立櫻尾小学校校長
11	谷波 良尚 (たんば よしなお)	地元関係者	地域有識者
12	藤井 武弘 (ふじい たけひろ)	地元関係者	神保地区自治振興会会长
13	増山 樽三 (ますやま じょうぞう)	地元関係者	古里地区自治振興会会长

(順不同)

2. 委員会要綱

王塚・千坊山遺跡群保存管理計画策定委員会要綱

(設置)

第1条 王塚・千坊山遺跡群の保存・管理について検討するため、王塚・千坊山遺跡群保存管理計画策定委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(任務)

第2条 委員会は、富山市が行う王塚・千坊山遺跡群の保存・管理計画の策定に関し、必要な指導助言を行うものとする。

(構成)

第3条 委員会の委員は、学識経験者、関係機関、地元関係者のうちから富山市教育委員会（以下「教育委員会」という。）が委嘱する。

2 委員長は、必要と認めるときにオブザーバー若干名をおくことができる。

(委員の数)

第4条 委員会の委員の定数は、13名以内とする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により定める。

2 委員長は会務を総理し、会議の議長となる。

3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長の指名した委員がその職務を代理する。

(任期)

第6条 委員の任期は、委嘱した日から保存管理計画の策定が終了した日までとする。

(会議)

第7条 委員会の会議は、委員長が招集する。

2 委員会の会議は、委員の過半数が出席しなければ開くことができない。

(事務局)

第8条 事務局を教育委員会埋蔵文化財センター内に置く。

2 事務局に事務局長を置き、埋蔵文化財センター所長をもって充てる。

(その他)

第9条 この要綱に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は、委員長が別に定める。

付 則

この要綱は、平成18年7月7日から施行する。

3. 委員会経過

委員会は平成 18 年度に 2 回と平成 19 年度に 2 回、計 4 回開催した。経過は以下のとおりである。

回 数	日 時	会 場	議 事
第 1 回王塚・千坊山遺跡群保存管理計画策定委員会	平成 18 年 7 月 7 日 (金) 午後 1 時から 午後 4 時まで	富山市役所 第 4 委員会室	①委員会の設置及び委員の委嘱。 ②史跡の概要とこれまでの経過説明。 ③保存管理計画の目的と基本方針説明。 ④現状と課題の説明。 ⑤現地視察。 (王塚古墳、勅使塚古墳、六治古塚墳墓、富崎墳墓群、富崎千里古墳群)
第 2 回王塚・千坊山遺跡群保存管理計画委員会	平成 19 年 2 月 16 日 (金) 午後 1 時 30 分から 午後 3 時 45 分まで	富山市婦中埋蔵文化財資料館	①王塚・千坊山遺跡群出土資料の視察。 ②環境基本調査の結果報告。 ③ゾーニング案について審議。
第 3 回王塚・千坊山遺跡群保存管理計画策定委員会	平成 19 年 7 月 6 日 (金) 午後 2 時から 午後 4 時まで	富山市役所 第 2 委員会室	①前回委員会の意見について説明。 (古植生調査について。地区分けの添付図面について) ②保存管理の基準について審議。
第 4 回王塚・千坊山遺跡群保存管理計画策定委員会	平成 20 年 1 月 23 日 (水) 午後 2 時から 午後 4 時まで	富山市役所 第 4 委員会室	①保存管理計画策定報告書(案)の検討、確認。

第2章 史跡王塚・千坊山遺跡群の概要

第1節 指定に至る経緯

- 昭和 23 年 1 月 14 日 王塚古墳 国史跡指定（官報告示）
昭和 40 年 10 月 1 日 勅使塚古墳 県史跡指定
平成 6 年～12 年度 千坊山遺跡ほか 試掘確認調査等実施（P12 参照）
平成 15 年度 土地境界測量実施
平成 16 年 7 月 国指定申請書提出
平成 17 年 3 月 2 日 王塚・千坊山遺跡群 追加指定及び名称変更（官報告示）
平成 17 年 4 月 1 日 （富山市合併）
平成 17 年度 土地境界測量実施（王塚古墳）

史跡を構成する遺跡 および指定面積	①王塚古墳 2,452 m ² 、②勅使塚古墳 22,617 m ² 、③千坊山遺跡 45,654 m ² 、④六治古塚墳墓 2,490 m ² 、⑤向野塚墳墓 1,896 m ² 、 ⑥富崎墳墓群 8,118 m ² 、⑦富崎千里古墳群 27,651 m ² <u>計 7ヶ所 110,878 m²</u>
地 権 者 数	130 名
筆 数	315 笔

第2節 指定地の状況

1. 指定説明とその範囲 (P9 図 1)

(1) 指定説明

（以下、出典『月刊文化財』平成 17 年 3 月号 第一法規株式会社）

（新名称） 王塚・千坊山遺跡群

（旧名称） 王塚古墳

王塚古墳は、富山県のほぼ中央に位置する全長 58 メートルの古墳時代前期の前方後方墳であり、越中を代表する古墳として史跡に指定されている。古墳は富山平野を東西に面す呉羽丘陵南端にあり、東側に広がる平野に面した尾根上に立地する。周辺には勅使塚古墳や千坊山遺跡などの、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての代表的な古墳や集落が所在することが知られていた。婦中町教育委員会では、平成 6 年度以降、千坊山遺跡をはじめとする周辺地域の分布調査と確認のための発掘調査を継続して実施してきた。その結果、弥生時代末から古墳時代前期に有力な墳墓・古墳や集落が継続して営まれたことが明らかとなった。

これらの遺跡は、富山平野に流れ出る山田川の北側の丘陵と南側の丘陵に分かれて展開する。周辺では弥生時代後期後半以降、それまで確認できなかった遺跡が数多く成立する。北側の丘陵では、集落の千坊山遺跡、四隅突出型墳丘墓の六治古塚墳墓、前方後方形墳丘墓の向野塚墳墓など、南側の丘陵では、集落の富崎赤坂遺跡、四隅突出型墳丘墓 3 基からなる富崎墳墓群などが確認される。

千坊山遺跡は、丘陵上の標高 35～50 メートルの東向きの緩斜面に 24 基の堅穴住居が確認されている。立地からみていわゆる高地性集落の一種であり、富崎赤坂遺跡も同様である。高地性集落はこの時期、北陸地方でも認められ、古墳成立前後の社会的な動向との関連が示唆される。また、弥生時代中期から後期に山陰地方で発達した四隅突出型墳丘墓は、北陸地方には後期後半に波及する。本遺跡群が北陸地方の分布の東限であり、最も集中する地域として注目される。本遺跡群のものは一辺 20～

25 メートル、高さ 3~5 メートルほどの方丘部をもち周溝を伴う。

古墳時代に入ると、いくつかの古墳が成立する。北側の丘陵では標高約 130 メートルの地点に王塚古墳があり、その南方約 400 メートルには、全長 66 メートルの前方後方墳である勅使塚古墳が位置する。王塚古墳と同じく墳丘は前方部を北に向かって二段築成で、後方部に大型の長方形の墓坑が確認されている。時期は出土土器からみて古墳時代前期初頭である。南側の丘陵では富崎千里古墳群が成立する。この古墳群は 17 基の古墳からなり、全長約 34 メートルの前方後方墳 1 基、円墳 1 基のほかは方墳である。

このように、この地域では弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての連続した時期に、有力な墳墓・古墳と集落が相次いで成立、展開している。弥生時代の集落と墳墓は相互に関連すると考えられ、なかでも四隅突出型墳丘墓が出現することは、この時期における北陸地方と山陰地方との関係が示唆される。その後、この地域は越中を代表する王塚古墳と勅使塚古墳が維持して成立、発展することから、本遺跡群は北陸地方における弥生時代から古墳時代にかけての動向を示す良好な事例といえる。よって、重要かつ保存状況が良好な勅使塚古墳、千坊山遺跡、六治古塚墳墓、向野塚墳墓、富崎墳墓群、富崎千里古墳群を史跡に追加するとともに、「王塚・千坊山遺跡群」に名称を変更しようとするものである。

(2) 指定範囲

史跡は計 7ヶ所 (110,878 m²) に及ぶ。その範囲概略図は図 1 (P9) に、範囲詳細図（土地所有区分図）は図 41 (P90) ~ 図 46 (P95) に記した。

2. 史跡の特色

- (1) 六治古塚墳墓・富崎墳墓群は、四隅突出型墳丘墓であり、この形の墳墓は山陰地方と北陸地方にしか分布せず、県内でも他地域では全く見つかっていない。しかも北陸において、6基（うち 2 基は指定地外）も集中して築かれているのは、史跡「王塚・千坊山遺跡群」において他にない。
- (2) 千坊山遺跡は、四隅突出型墳丘墓を築いた勢力の中核となる集落であり、24棟の住居跡が見つかっている。集落と墓地という生活圏が明らかになっている点に特色を有する。
- (3) 向野塚墳墓は、定型化した前方後方墳成立以前の形態であり、墳丘墓から古墳への過程をつなぐ墳墓の特色を有する。
- (4) 王塚古墳・勅使塚古墳・富崎千里古墳群は前方後方墳であり、四隅突出型墳丘墓から新しい時代へと変遷したことを物語る。墳形の違いは、墳墓を造る際の思想の違いを意味する。このため婦負一帯を支配する勢力が転換したことを見ている。

以上のように、史跡には、日本海沿岸交流を物語る四隅突出型墳丘墓の六治古塚墳墓・富崎墳墓群や、前方後方墳丘墓の向野塚墳墓、県内有数の大型前方後方墳である王塚古墳・勅使塚古墳、多様な形態の古墳で構成された富崎千里古墳群などが含まれ、他地域との交流関係や婦負地域を統括した首長が誕生するまでの過程を知ることができる。また、墓域と集落跡の対応関係もつかめることから、弥生時代から古墳時代にかけて地域社会がまとまっていく様子が具体的に分かる。本史跡群はこのような事例の典型であり、北陸における古代の地域国家の成立を考える上で重要な資料である。

3. 史跡王塚・千坊山遺跡群の構成

平成 17 年 3 月 2 日名称変更・追加指定 官報告示をもとに作成

遺跡名	種別	所在地	面積	所有者数
王塚古墳	古墳 (前方後方墳)	婦負郡婦中町羽根字下平 3番1、3番2、3番3、3番4、3番5、3番6、5718番	2,452 m ²	1名
勅使塚古墳	古墳 (前方後方墳)	婦負郡婦中町羽根字上前割 22番9、23番7、23番8、23番9、23番10、23番11、23番12、25番、26番、27番 婦負郡婦中町新町字南花水谷 2703番、2710番 婦負郡婦中町新町字南花水 2704番、2705番、2706番、2707番、2708番、 2709番、2711番、2712番 婦負郡婦中町羽根字上平 5803番、5804番、5805番、5806番、5807番、 5808番、5809番	22,617 m ²	22名
千坊山遺跡	集落遺跡	婦負郡婦中町新町字千保山 141番、142番、143番、144番、145番、146番、 147番、148番、149番、150番、151番、152番、 153番、154番、155番、156番、157番、158番、 159番、160番、161番1、162番、163番、164番、 165番、166番、167番、168番、169番1、 171番1、172番、173番、174番、175番、176番1、 177番1、179番1、180番1、181番、182番、 183番1、184番1、186番1、187番1、188番1、 189番1、190番1、191番1 婦負郡婦中町羽根字千坊平 5467番1、5467番2、5467番3、5467番4、5467番5、5467番6、5467番7、5467番8、5467番10、5467番11、5467番12、5467番13、5467番14、5467番15、5467番16、5467番17、5467番18、5467番19、5467番20、5467番21、5467番22、5467番23、5467番24、5467番25、5467番26、5467番27、5468番1、5468番2、5468番3、 5468番4、5468番5、5468番6、5469番1、5469番2、5469番3、5469番4、5469番5、5469番6、 5470番、5471番、5472番、5473番、5474番、 5475番、5476番、5477番、5478番、5480番、 5482番、5483番、5484番、5485番、5486番、 5487番、5488番、5489番、5490番 婦負郡婦中町長沢字千坊 5851番、5852番、5853番、5854番、5855番1、 5855番2、5856番、5857番、5858番、5859番、 5860番、5861番、5862番、5863番、5864番、 5865番、5866番2、5867番、5879番、5880番、 5881番、5882番、5883番、5884番、5885番、 5886番、5887番、5888番、5889番、5890番、	45,654 m ²	83名

		5891 番、5892 番、5893 番、5894 番、5895 番、 5896 番、5897 番、5898 番、5899 番、5900 番、 5901 番、5902 番、5903 番、5904 番、5906 番、 5907 番、5908 番、5909 番、5910 番、5911 番、 5912 番、5913 番、5914 番、5915 番、5916 番、 5917 番、5918 番、5919 番、5920 番、5921 番、 5922 番、5823 番、5924 番、5925 番、5926 番 1、 5926 番 2、5926 番 3、5927 番、5928 番、5929 番、 5930 番、5931 番、5932 番、5933 番、5934 番、 5935 番、5936 番、5937 番、5938 番、5939 番、 5940 番、5941 番 1、5942 番、5943 番、5944 番、 5945 番、5946 番 1、5947 番 1、5948 番、5949 番 1、5950 番、5951 番、5952 番、5953 番、5954 番、 5956 番、5957 番 1		
六治古墳 墳墓	四隅突出型 墳丘墓	婦負郡婦中町長沢字向野 4番、7番、8番、9番、5732番、5733番、5734 番、5735番、5736番、5737番、5738番、5739 番、5741番 1、5765番 1、5767番 2	2,490 m ²	27名
向野塚墳墓	前方後方形 墳丘墓	婦負郡婦中町長沢字向野 5768番、5772番、5774番、5775番、5776番、 5790番、5791番、5792番、5793番、5794番 3、 5795番 1、5799番、5800番、5801番、5802番、 5803番 1、5803番 2、5804番、5805番、5806番、 5807番、5825番	1,896 m ²	11名
富崎墳墓群	墳墓群 (四隅突出型 墳丘墓 3基)	婦負郡婦中町長沢字滝山 4番 婦負郡婦中町富崎字館ノ内 4931番、4949番、4953番、4959番、4963番、 4987番、4994番、4995番、4997番 婦負郡婦中町富崎字北平 9番、21番 2、22番 1、22番 2、28番 1、28番 2 婦負郡婦中町富崎字家ノ高 5149番	8,118 m ²	4名
富崎千里 古墳群	古墳群 (前方後方墳1 基、円墳1基、 方墳12基)	婦負郡婦中町千里字前山 1番、16番、17番、22番 1、32番 1、34番 2、 34番 3、38番 1 婦負郡婦中町富崎字河原谷 6157番 1、6157番 3、6172番 3 婦負郡婦中町千里字田ノ高 6812番、6821番、6825番、6831番、6835番、 6838番、6838番 2、6846番 1、6865番、6869番、 6899番 1、6899番 2、6905番、6906番	27,651 m ²	3名
計7ヶ所	弥生時代後期 後半～古墳時 代前期の集落 及び墳墓	婦負郡婦中町羽根、新町、長沢、富崎、千里 (現富山市)	110,878 m ² (315筆)	151名 ※(130名)

※所有者の合計は複数の遺跡に重複があるため、130名が実際の所有者数である。

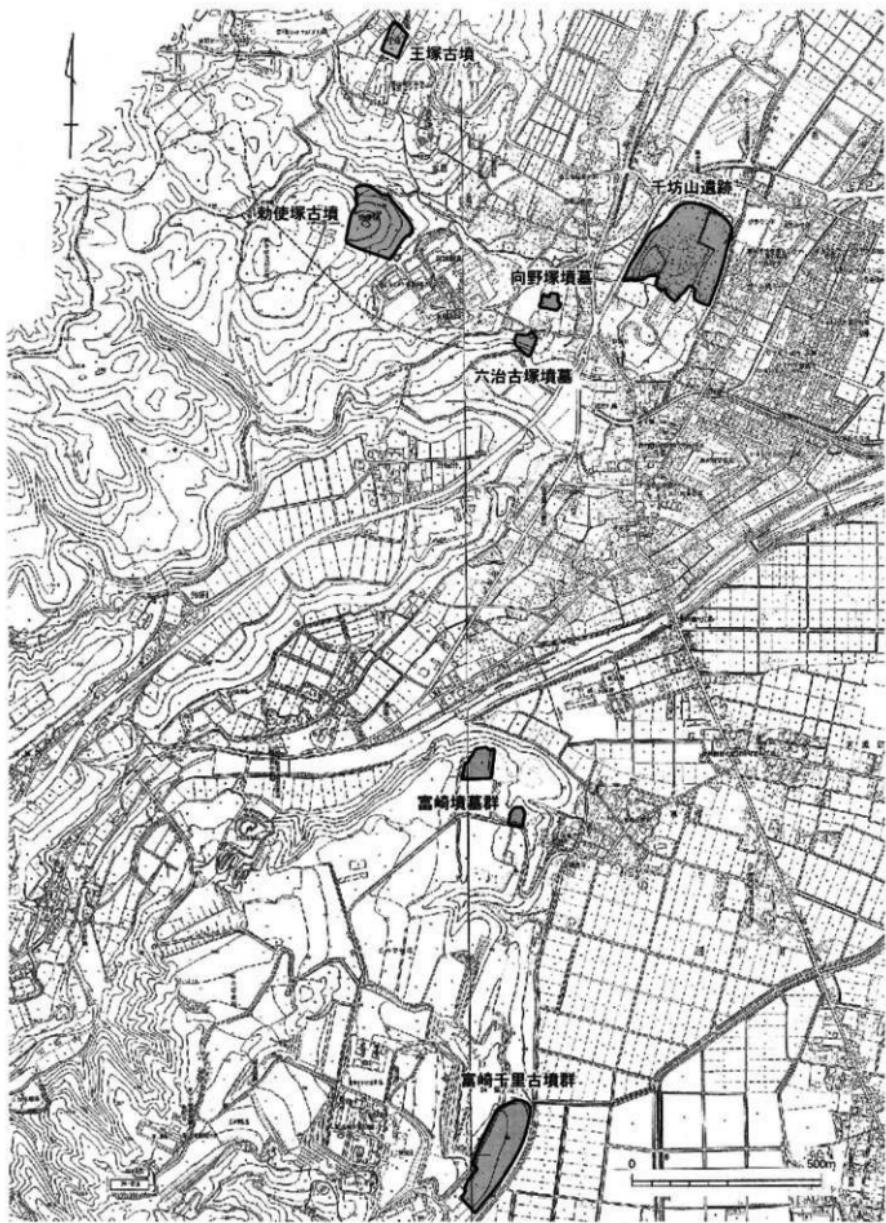


図1 史跡王塚・千坊山遺跡群史跡指定範囲概略図 (1:12,500)

第3節 指定地の現況

1. 歴史的調査の結果

(1) 史跡周辺の遺跡

史跡王塚・千坊山遺跡群は、富山平野西部の呉羽山丘陵から南に続く婦負丘陵（羽根丘陵、富崎丘陵）や井田川・山田川が形成した河岸段丘上に分布する。この周辺には旧石器時代から古代まで多くの文化遺産が残され、連続と続く歴史の流れを知ることができる。

旧石器時代の遺跡には、外輪野I遺跡、鏡坂I遺跡、平岡遺跡などがあり、これらの遺跡からは、旧石器時代のナイフ形石器などが出土している。

縄文時代では、外輪野I遺跡、鏡坂I遺跡が発掘調査されており、縄文時代中期中葉の竪穴住居、土器捨て場などが確認され、縄文土器、石錐などが出土している。

平岡遺跡は、縄文時代前期の竪穴住居などがあり、縄文土器、けつ状耳飾、磨製石斧などが出土している。この他、石鏃が1000点以上表面採集されている。

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡には、鍛冶町遺跡、富崎遺跡、翠尾I・南部I遺跡などの集落遺跡がある。丘陵と井田川に挟まれた低位の河岸段丘上に立地している。北方3kmにある杉谷古墳群などは、本史跡と関連がある遺跡である。

奈良・平安時代の遺跡には、柄谷南遺跡、向野池遺跡などがある。

柄谷南遺跡（市指定文化財）は、奈良時代の瓦や土器を焼いた窯跡が2基確認されている。古代越中の窯業生産体制や、仏教文化の浸透を解明する上で重要な遺跡である。

向野池遺跡では、平安時代前期の瓦塔が発掘されている。

また、奈良時代には大伴家持が鶴坂神社を訪れたり、各願寺や常楽寺などの古刹が創建されている。

中世には、富崎城や長沢城など多くの城や砦が築かれた。史跡周辺は交通の要衝として、重要視されていたと考えられている。

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	上原古墳	前方後方墳	古墳	22	小浜沢遺跡	散布地	縄文・古代・中世・近世	45	富崎西御跡	散布地	縄文
2	新倉古墳	前方後方墳	古墳(鉢)	24	二木腹鍬跡	集落・散在地・墓	縄文(李)・古代・中世?	46	高崎南御跡	集落・散在地	縄文・古代(奈良・平成)・中世(鎌倉・室町)
3	千坊山遺跡	集落・散在地・窯・遺跡	古代(須・城・火・物生)(鉢)・古代・中世・近世	25	二木樺日遺跡	集落・散在地	縄文・古代(奈良・平安)・中世?	47	上吉川I遺跡	集落・散在地	縄文(火)・古代(前)・中代(奈良・平成)・中世(鎌倉・室町)・近世
4	八造山遺跡	石器・陶器・骨器	古代(火)・古代	26	御所山遺跡・二木櫛	散在地・窯・古代(須・城・火・物生)	縄文・古代(奈良・平成)・中世?	48	下皿丘遺跡	中世(須・室町?)	
5	向野池遺跡	前方後方・横長丘陵	古代(鉢)・古代	27	藤原I遺跡	散在地	縄文・古代(奈良・平安)・中世?	49	ゴダイ波	堆	中世?
6	高崎環状跡	石器・陶器・骨器	古代(須・城)・古代(火)・古代・中世?	28	玉保六義遺跡	散布地	縄文	50	南跡II遺跡	散在地	中世
7	富崎千吉古窯跡	石器・陶器・骨器・瓦・井戸	古代(須・城)・古代(火)・古代	29	御所北遺跡	散布地	不明	51	小木中畠II遺跡	散在地・散在地	中世(鎌倉・室町)・近世
8	弘ノ谷古墳群	古墳	古墳	30	新町丘遺跡	散布地	縄文・古代(奈良・平安)	52	千里丘遺跡	集落・散在地	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
9	御所南古墳	円墳・古墳・古墳・古墳	古代(鉢)・古代	31	新町大畠古墳	古墳	縄文・古墳	53	千里丘遺跡	集落・散在地	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
10	鍛冶町遺跡	古窯・散布地	古代(須・城)・古窯(火)・古代(奈良・平安)・中世・近世	32	御所II遺跡	集落・散在地	縄文(火)・古代(奈良・平安)・中世(須・城)・古窯(火)・近世	54	千早山跡	散布地	古代・中世(鎌倉・室町)・近世
11	摩川I古窯跡	集落・散在地	古代(須・城)・古代	33	御所横六窓	六窓(櫛穴)	古墳	55	千里山I遺跡	集落・散在地	古代(火)・中世・近世
12	笠置水谷遺跡	古窯・散在地	古代(須・城)・古代	34	御所I城跡	城跡	中世(須・城)	56	千里II遺跡	散布地	古代
13	下原I・上原II古窯跡	古窯	古窯(火)	35	下原遺跡	散在地	縄文・古代(奈良・平安)・中世(須・城)	57	大根城跡	城跡(山城)・小寺院?	中世(須・城)
14	富崎城跡	聚落・散在地・城跡(火・須・城)	古代(須・城)・古代(火)・古代(奈良・平安)・中世(須・城)	36	各側寺跡遺跡	集落・散在地・寺跡(寺・寺跡)	縄文(火・少・中・後)・古代(奈良・平安)・中世(須・城)	58	福丸少寺跡	城跡(山城)・小寺院?	中世(須・城)
15	笠置城跡	散在地・墓	古代(須・城)・古代(火)・古代(奈良・平安)	37	下呂東遺跡	高森・散在地	古代(須・城・奈良・平安)・中世(須・城)	59	御所山遺跡	集落・古代・散在地	縄文・奈良・平安・近世
16	御所I・南野I遺跡	古窯	古代(須・城)・古代(火)・中世(須・城)	38	吉添保留遺跡	散布地	縄文	60	御所新跡	集落	古代(須・城)・中世・近世
17	御所II・御所III遺跡	古窯	不明	39	御所野原城跡	城跡(火)	御所(須・城)・古代(須・城)	61	砂引古窯跡	散布地・古窯	縄文・御所(須・城)・古代(須・城)
18	小浜古窯跡	古窯	不明	40	御所II遺跡	散布地	中世(須・城)	62	押川川遺跡	高森・中世・近世	縄文(火)・奈良・平安・中世(須・城)
19	小豆古窯跡	古窯	縄文・古代(須・城)・古代	41	御所III遺跡	散在地・古窯	縄文(火)	63	押川川II遺跡	高森・古窯	縄文(火)・奈良・平安・中世(須・城)
20	御所遺跡	古窯	古窯	42	御所I・老窯	高森・散在地	古代(須・城)・古代(火)・古代(須・城)	64	御所II遺跡	集落・生糞	旧石器・縄文(火・須・城)・古代(須・城)・中世(須・城)
21	小豆古窯跡群	古窯・炉	古窯・古窯	43	高森寺跡	寺跡(寺)	古代(須・城)	65	御所I遺跡	集落・生糞	古代(須・城)・縄文(火・須・城)・中世(須・城)
22	御所II・御所III遺跡	古窯	縄文・古窯	44	御所野原遺跡	集落・散在地	古代(須・城)・古代(火)・古代(須・城)	66	御所II遺跡	集落・生糞	古代(須・城)・縄文(火・須・城)・中世(須・城)

表1 周辺の遺跡一覧



図2 周辺の遺跡分布図 (1:30,000)

(2) 史跡に関する試掘確認調査など

ア. これまでの調査

王塚・千坊山遺跡群における過去の調査は以下のとおりである。

	遺跡名	調査年	調査内容	調査原因	調査主体	報告書
1	王塚古墳	1989～90	測量調査	学術調査	富山大学考古学研究室	『越中王塚・勅使塚古墳測量調査報告』1990
2	勅使塚古墳	1989～90	測量調査	学術調査	富山大学考古学研究室	『越中王塚・勅使塚古墳測量調査報告』1990
		1998	発掘調査	富山県ボランティア埋蔵文化財保護活動事業	財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所	『富山県ボランティア埋蔵文化財保護活動事業発掘体験講座』2003
3	千坊山遺跡	1994	試掘確認調査	遺跡発掘事前総合調査事業	婦中町教育委員会	『千坊山遺跡(1)』1995
		1995	試掘確認調査	遺跡範囲確認調査		『千坊山遺跡(2)』1997
		1996	試掘確認調査	埋蔵文化財緊急調査事業		『千坊山遺跡(3)』1998
		1997	試掘確認調査	埋蔵文化財緊急調査事業		『千坊山遺跡(3)』1998
4	六治古墳 墳墓	1998	踏査・測量調査	千坊山遺跡群に 関わる事前調査	婦中町教育委員会	『富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告書』2002
		1999	試掘確認調査	埋蔵文化財緊急調査事業		
5	向野塚墳墓	1998	踏査・測量調査	千坊山遺跡群に 関わる事前調査	婦中町教育委員会	『富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告書』2002
		1999	試掘確認調査	埋蔵文化財緊急調査事業		
6	富崎墳墓群	1998	踏査・測量調査	千坊山遺跡群に 関わる事前調査	婦中町教育委員会	『富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告書』2002
		2000	試掘確認調査	埋蔵文化財緊急調査事業		
7	富崎千里 古墳群	1985	踏査・測量調査	公社営畜産基地建設事業	婦中町教育委員会	『富山県婦中町富崎千里地区埋蔵文化財予備調査概要』1986
		1999	測量調査	千坊山遺跡群に 関わる事前調査		『富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告書』2002
		2000	試掘確認調査	埋蔵文化財緊急調査事業		

イ. 各遺跡の調査

(7) 王塚古墳 (P13 図 3)

a. 所在地 富山市婦中町羽根地内

b. 立地 標高 130m の羽根丘陵東縁辺部尾根上に立地する。南方は谷を挟んで 400m 地点にある勅使塚古墳が立地する尾根へとつながり、東方には婦負平野が広がる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は 101.2m（標高 30.0～131.2m）である。

c. 調査 平成 2～3 年に富山大学人文学部考古学研究室による測量調査が行われており、奈良県桜井市箸墓古墳（前方後円墳）の 5 分の 1 規模相似墳と復元された（富山大学人文学部考古学研究室 1990）。

d. 形態と規模 前方後方墳。墳丘規模は現状で、全長 58m、後方部長 31m、前方部長 27m、後方部幅 33m、前方部幅 26m、くびれ部幅 15m、墳丘裾部と後方部頂部の比高差約 7.6m（標高 131.2～138.8m）である。県下 4 位の規模の前方後方墳である。前方部は後方部に比べ小さく、くびれ部から先端部にかけて傾斜して高まりながら細く開き、くびれ部と後方部頂部の比高差は約 5m と大きいなど、出現期古墳の様相を呈する。墳丘西側には周溝らしき幅の広く浅い窪みが認められる。墳丘の主軸は真北から 41° 東に振る。

e. 埋葬主体部・出土遺物 未調査の為不明。

f. 小結 国指定史跡（昭和 23 年 1 月 14 日）。未調査のため詳細は不明だが、勅使塚古墳と類似する形態であることから、古墳時代前期の築造と考えられる。市道を挟んで北側には長辺約 13m、短辺約 10m、高さ約 2m の方墳（王塚古墳陪塚）がある。

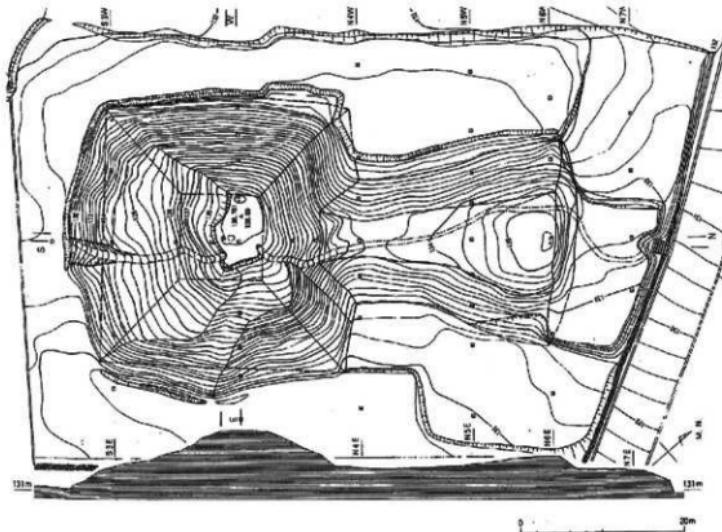


図3 王塚古墳 (1:600)
富山大学考古学研究室1990より転載

(4) 勅使塚古墳 (P14 図 4・P15 図 5)

a. 所在地 富山市婦中町羽根・新町地内

b. 立地 標高 130m の羽根丘陵北東縁辺部尾根上に立地する。北方は谷を挟んで王塚古墳が造られる尾根へとつながり、東方には平野が広がる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は 97.8m (標高 30.0~127.8m) である。

c. 調査 平成 10 年度に財富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所による試掘確認調査が行なわれている。(財富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2003)

d. 形態と規模 前方後方墳。墳丘規模は、全長 66m、後方部長 35m、前方部長 31m、後方部幅 37m、前方部幅 24m、くびれ部幅 11m、墳丘裾部と後方部頂部の比高差は約 8.8m (標高 127.8~136.6m) である。前方部は後方部に比べ小さく、くびれ部から先端部にかけて傾斜して高まりながら細く開くもので、くびれ部と後方部頂部の比高差は約 6m (標高 130.0~136.0m) と大きいなど、出現期古墳の様相を呈する。墳丘の造成方法は、丘陵側には浅い周溝を巡らせ、平野側にはテラスを作り盛土を施す。主軸は真北から 60° 東に振る。

e. 埋葬主体部 後方部中央に、長軸に並行した長さ 6.2m 以上幅 6.1m の長方形の墓壙が検出されている。また、地表面から約 2m 下層で櫛の痕跡が確認され、木棺が安置されていると推測されている。

f. 出土遺物 土師器 (壺、高杯、蓋) が墳頂部及び周溝内から出土している。

g. 小結 県内最古の定型化した大型前方後方墳であり、県下第 2 位の規模を誇る。古墳時代初頭 (古府クルビ式期) に比定される。

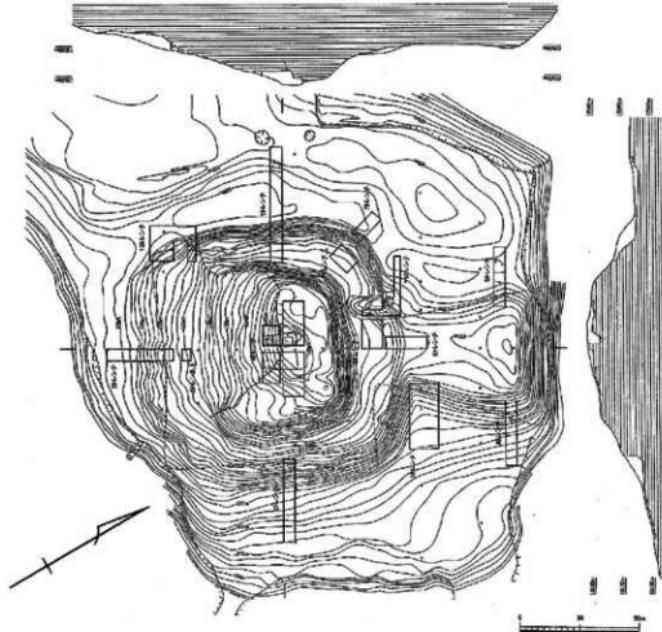


図4 勅使塚古墳 (1:800)
(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2003より転載

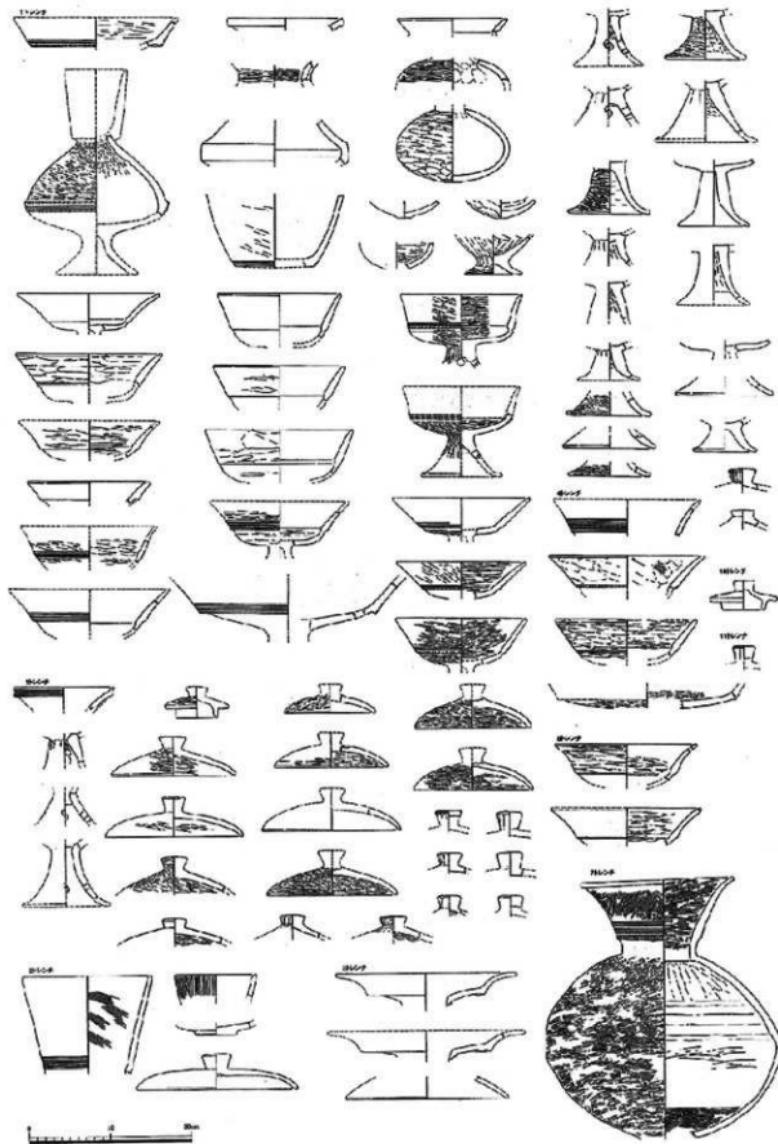


図5 勅使塚古墳出土遺物（1:6）
(財)富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所2003より転載

(f) 千坊山遺跡 (P16 図6・P17 図7)

a. 所在地 富山市婦中町羽根・新町・長沢地内

b. 立地 標高 34.7~52.0mの独立した河岸段丘上に立地し、北、西側は谷を挟んで河岸段丘となり、更に西側は丘陵へと続いて王塚・勅使塚古墳へとつながる。南、東側には井田川とその支流である辺呂川が流れ、婦負平野が広がる。段丘裾部と遺跡との比高差は 8.7~26.0m（標高 26.0m~標高 34.7~52.0m）である。

c. 性格 弥生時代終末期の集落跡。遺跡全体の規模は約 14.4ha で、うち現在までに竪穴住居の分布を確認した面積は約 4.1ha である。

d. 遺構 竪穴住居、柱穴、土坑、溝などを検出した。竪穴住居は段丘北半部に 24棟が確認されており、直径 8~11.5m の円形の大型住居、一辺 7、8m の（長）方形の中型住居、一辺 4、5m の（長）方形の小型住居の 3種に分類できる。分布状況から、大小の竪穴住居がセットになって構成される世帯が、3箇所に想定できる。試掘確認調査のみの実施の為、詳細は不明である。

e. 出土遺物 弥生土器の甕、壺、高杯、器台、蓋、鉢、匙が、竪穴住居から主に出土した。

f. 小結 県内有数規模の弥生集落であり、帰属年代は弥生時代終末期（月影 I・II式期）に比定される。墓地として考えられるのは、350m南西にある六治古塚墳墓（四隅突出型墳丘墓）や 270m南西にある向野塚墳墓（前方後方形墳丘墓）がある。

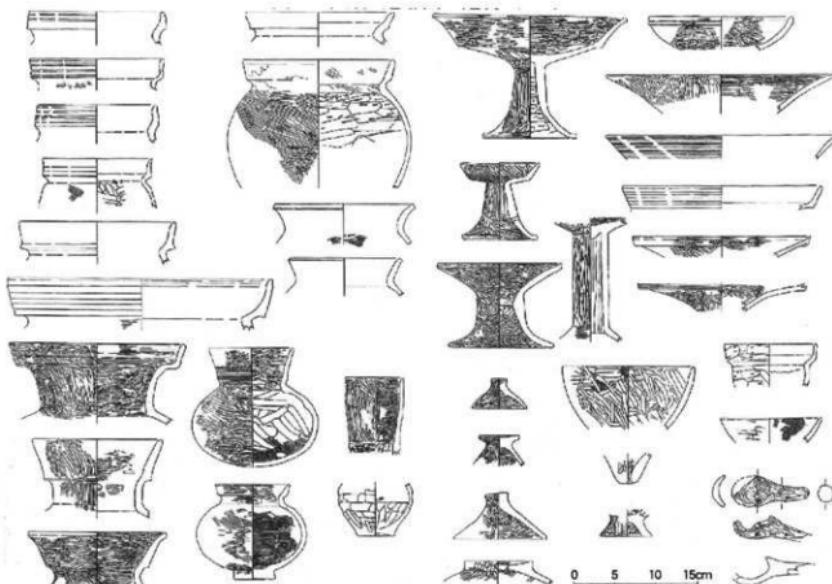


図6 千坊山遺跡出土遺物 (1:6)

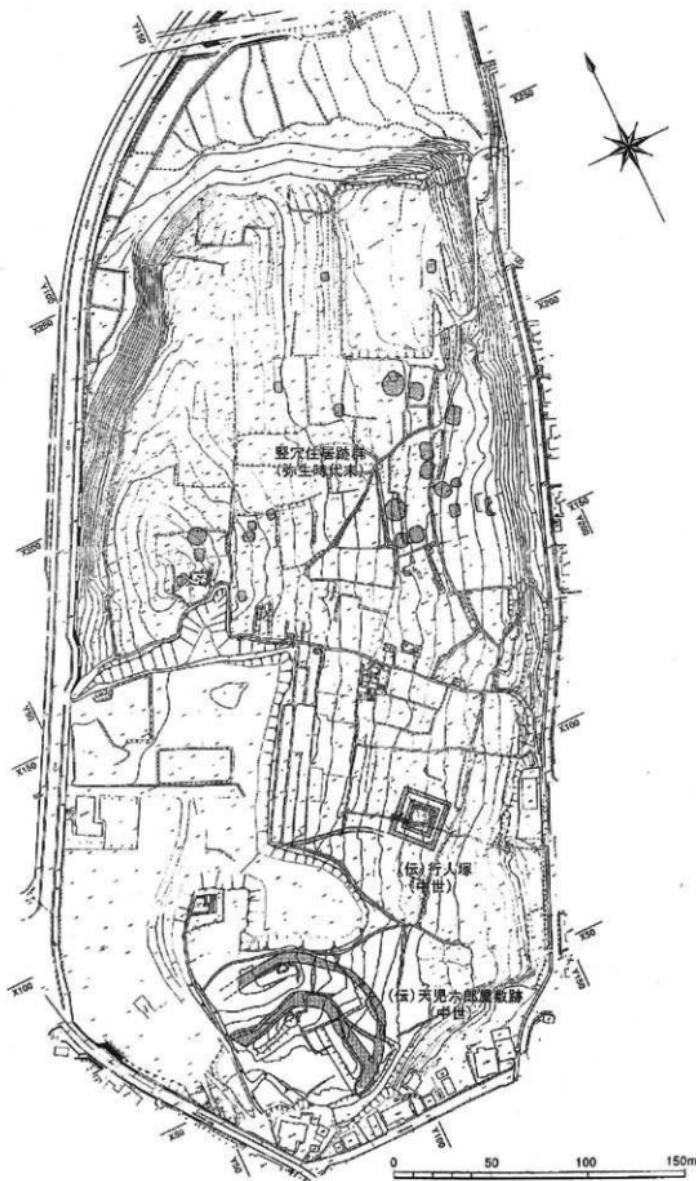


図7 千坊山遺跡概要図 (1:2,500)

(1) 六治古墳墳墓 (P19 図 8)

a. 所在地 富山市婦中町長沢地内

b. 立地 標高 57m の河岸段丘南縁辺部に立地し、南側は谷となって辺呂川が流れ、東側は千坊山独立段丘に突き当たった後、婦負平野に出る。北西は、緩やかな斜面が続いた後丘陵の急傾斜となり、頂部にある勅使塚古墳へとつながる。段丘裾部と墳丘裾部との比高差は 24.2m (標高 30.0~54.2m) である。

c. 形態と規模 四隅突出型墳丘墓。西南の崖側は土砂崩落の為消失している。墳丘は、規模が北東・南西側辺部裾で一辺 24.5m で、台状部はほぼ方形を呈すると推測される。突出部は、平均で長さ 7.2 m、最大幅 (推定) 10.6m、基部幅 (推定) 6.7m で、平面形が橿円形を呈する。墳丘裾部と頂部の比高差は最大 5.1m (標高 54.2~59.3m) で、墳頂部と遺存状況の良好な南突出部の比高差は約 4.1m、南突出部と墳丘裾部の比高差は約 1m である。台状部及び突出部の造成方法は、丘陵側を中心に周溝を巡らせ、平野側は地山を削り出し、盛土を施して整形する。台状部には最大 3.8m の厚い盛土を施す。墳丘北西側斜面は頂部付近で傾斜が急になる特徴があるが、北東では傾斜の変化はなく、南東は後世の植林によって削平されて旧状は分からず。周溝の規模は、地山掘削ライン両端で測ると、側辺部側では最大幅 10.5m、深さ 110cm と広くて深く、突出部側では最大幅 4.1m、深さ 30cm と狭くて浅くなる。周溝の立ち上がりは墳丘側の方が急傾斜となる。墳丘の主軸は真北から 24° 東に振っている。

d. 埋葬主体部 墳丘頂部中央に墓壙を検出した。向野塚墳墓を参考に推測すると、北東・南西方向を長軸とした長方形を呈し、主軸は真北から 30° 東に振るものと考えられる。確認した規模は、北東・南西幅 2.9m、北西・南東幅 1.3m 以上である。内部構造は未調査の為不明である。墓壙上部には弥生土器 (壺・高杯・器台・蓋) が集中して出土した。

e. その他の遺構 SK01 は、北突出部上にある隅丸四角形の土坑で、長軸 115cm、短軸 90 cm である。出土遺物は無く時期は不明だが、墳丘墓築造以前の土坑か。SK02 は、南突出部北東にある不定形の土坑で、南北幅 7m、東西幅 7m、深さ 45cm である。覆土より須恵器杯が出土しており、古代に帰属すると考えられる。

f. 出土遺物 墳丘に伴う遺物としては、弥生土器の壺、甕、高杯、器台、蓋が出土した。ほとんどが祭祀用の器種である。出土状況は、墳頂部埋葬主体部上部に集中するものや周溝に転落した状態のもの他、周溝の外側斜面に出土するものがあった。土器様相は、X 状に開く器台や屈曲が強く伸展する有段口縁の甕、屈曲が弱く伸展する有段口縁の甕、丸い胴部をもつ小型装飾壺など、月影式でも新相を示すものが多い。特筆すべき土器には、箆で唐草のような文様を描いた器種不明の破片がある。おそらくは壺胴部破片で、文様は竜などを意味するのか。他時代のものには、繩文土器深鉢、須恵器杯、中世土師器皿、珠洲焼甕などがあり、本墳丘墓が古代・中世の段階で何らかに転用されたと考えられる。

g. 築造時期 弥生時代終末期 (月影 II 式期) に比定される。

h. 小結 土器の出土状況から、墳頂部での祭祀儀礼が推測される。極端に肥大化した突出部が特徴的であり、本遺跡群にある大型の四隅突出型墳丘墓のなかでは、唯一突出部先端に周溝が巡るタイプである。基盤集落としては、北北東 110m 地点にある向野塚墳墓とともに、350m 北東の独立河岸段丘上にある千坊山遺跡が考えられる。千坊山遺跡は、南西・北東突出部を結んだ方角にあり、北東突出部を集落に向けて築造した可能性がある。

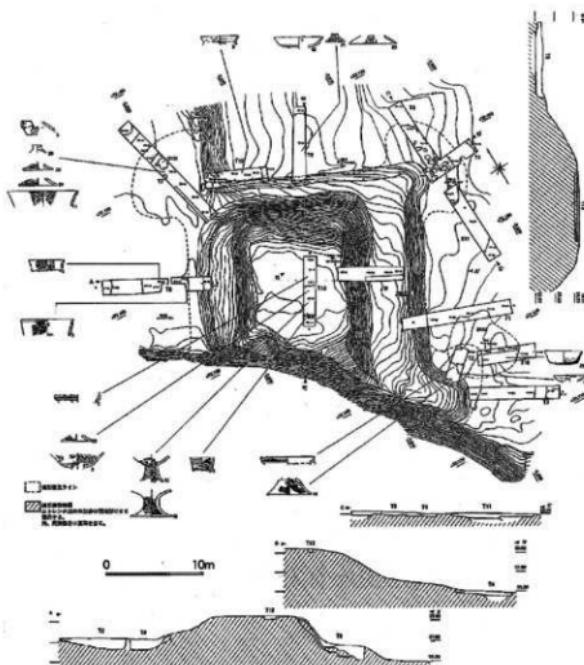


図8 六治古墳墳墓 (1:500)

(才)向野塚墳墓 (P20 図9)

- 所在地** 富山市婦中町長沢地内
- 立地** 標高 52m の河岸段丘に立地する。北側は小さな谷となり、南側は辺呂川が流れる谷となって、西側は緩やかな斜面が続いた後丘陵の急傾斜となり、頂部にある勅使塚古墳へとつながる。東側は千坊山独立段丘に突き当たった後、婦負平野に出る。段丘裾部と墳丘裾部との比高差は 21.3m (標高 30.0~51.3m) である。
- 形態と規模** 前方後方形墳丘墓。墳丘規模は、全長 25.2m、後方部長 15.2m、前方部長 10.2m、後方部幅 16.5m、前方部幅 8.1m、くびれ部幅 5.1m である。後方部はやや横長の長方形を呈し、前方部は後方部に比べ未発達で先端部があまり開かず細い。墳丘裾部と後方部頂部の比高差は最大 1.74 m (標高 51.30~53.04m) である。後方部頂部と前方部頂部の比高差は、前方部が 26cm 高い (標高 53.04~53.30m)。墳丘の造成方法は、前方部は周溝で区画するだけで盛土は施さず、後方部は北側に周溝を巡らせ南側は削り出し、墳頂部が少なくとも前方部と同じレベルになるまで盛土を施したと考えられる。しかし、墳丘は後世の開墾によってかなりの削平を受け、盛土の旧状は現在では分からぬ。周溝の規模は、地山掘削ライン両端で測ると、前方部・後方部の側辺部では幅 3.7m、深さ 48cm と広くて深く、後方先端側では幅 1.5m、深さ 35cm、前方部先端側では幅 1.3m、深さ 20cm と狭くて浅くなる。周溝の立ち上がりは墳丘側が急傾斜となる。墳丘の主軸は真北から 60° 東に振っている。
- 埋葬主体部** 後方部墳頂部中央に墓壙を検出した。北東・南西方向を長軸とした長方形を呈し、

規模は、北東・南西幅 3.5m 以上、北西・南東幅 1.7m である。埋葬主体部上では遺物は出土しなかつたが、裾部での遺物出土状況や、近隣の六治古塚では埋葬主体部上に土器の集中的出土があった状況などから考えると、上層は削平を受けた可能性が高い。内部構造は未調査のため不明である。

e. その他の遺構 SK01 は、後方部北西側にある円形の焼壁土坑で、直径 100 cm である。出土遺物は無く時期は不明だが、層序的にみると墳丘墓と同時期もしくはそれ以前である。SK02 は、後方部北西側にある隅丸四角形の土坑で、北西・南東幅 190 cm、深さ 30cm を測る。出土遺物は無く時期は不明だが、層序的にみると墳丘墓と同時期もしくはそれ以前である。

f. 出土遺物 墳丘に伴う遺物は弥生土器のみで、壺、甕、蓋、鉢が後方部墳頂部及び後方部裾部を中心として出土した。出土量は少なく、器種構成の半数近くは甕が占める。出土状況は、周溝に転落した状態のものがほとんどで、特にくびれ部付近で多く出土する。土器様相は、屈曲が強く伸展する有段口縁の甕、屈曲が弱く伸展する有段口縁の甕など、月影式でも新相を示す土器が多い。他時代の遺物には、須恵器杯、中世土師器皿などがあり、本墳丘墓が古代・中世の段階で何らかに転用されたと考えられる。

g. 築造時期 弥生時代終末期（月影II式期）に比定される。

h. 小結 千坊山遺跡群で唯一の前方後方形墳丘墓であり、この形態の墳丘墓としては県内で最も古く位置づけられている。土器の出土状況から、墳頂部での祭祀儀礼が推測される。南南西 110m 地点にある六治古塚墳墓とともに、基盤集落としては、270m 北東の独立河岸段丘上にある千坊山遺跡が考えられる。主軸方向には千坊山遺跡があり、前方部から後方部側を押したときに集落に向かうように築造した可能性もある。なお、すぐ北西には台状の地形があり、墳丘墓の可能性もある。

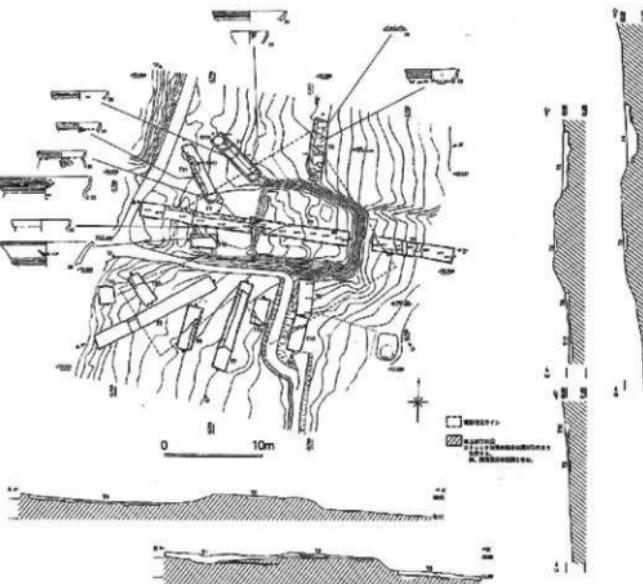


図9 向野塚墳墓 (1:500)

六治古塚墳墓と向野塚墳墓は同じ集落を基盤としているが、墳形の違いだけでなく、出土土器に關して前者が多様な器種構成である（特に祭祀用の器種が多い）のに対し、後者は甕が半数を占めるといった土器様相の違いなど、いくつかの相違点がある。しかし、一方で周溝の在り方（傾斜の状況や、突出部側・前方部先端と後方部先端が狭くて浅く、側辺部側が広くて深い）や主軸・対角線の方向を集落方向に向けるなどの共通点もあり、継続性がある。

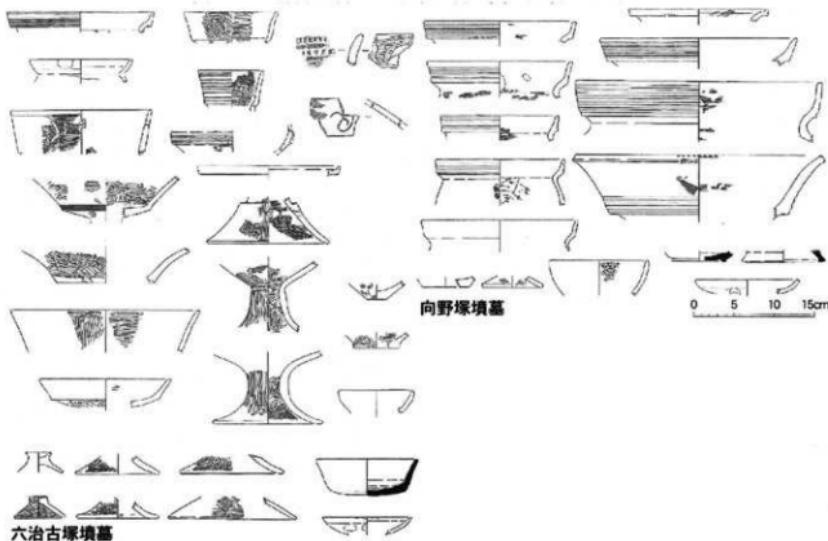


図10 六治古塚墳墓・向野塚墳墓出土遺物 (1:6)

(1) 富崎墳墓群 (P25 図12)

本墳墓群は、3基の四隅突出型墳丘墓で構成される。1・2号墓と3号墓は、小さな谷を挟んで形成される。現在、遺跡範囲のほとんどが富山県農業センター畜産試験場の敷地内にある。以下、それぞれに記述する。

●1号墓

a. 所在地 富山市婦中町富崎地内

b. 立地 標高 70mの山田川右岸、富崎丘陵北東縁辺部に立地する。北方が谷となり、東方には婦負平野が広がる。南西方は、緩やかな傾斜となり尾根へとつながる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は38.4m（標高31.3～69.7m）である。

c. 形態と規模 四隅突出型墳丘墓。以下、今回の調査と平成元年度に実施した試掘調査の結果を合わせて考える。台状部は、側辺部裾で一边約21.7mの方形である。突出部は、長さ約6m、最大幅約9m、基部幅約6mで、平面形が梢円形である。墳丘裾部と頂部の比高差は最大3m（標高69.7～72.7mm）で、墳頂部と突出部の比高差は2m、突出部と墳丘裾部の比高差は1mである。造成方法は、周

溝を全周させ台状部に盛土を施して整形する。突出部の盛土の有無は不明である。周溝の規模は、突出部側で最大幅約1.5m、深さ約22cmと狭くて浅く、側辺部側は最大幅7.5m、深さ110cmと広い。周溝の立ち上がりは墳丘側が急傾斜となる。墳丘の主軸は真北から8°東に振っている。

d. 埋葬主体部 未調査のため不明である。

e. 出土遺物 墳丘に伴う遺物は現在のところ確認されていないが、牧場造成の際、1・2号墓周辺から壺・壺・高杯・器台が採集されている。

f. 織造時期 周辺で採集された遺物から推測すると、法仏式～月影II式期か。

g. 小結 極端に肥大化した突出部が特徴的であり、本遺跡群の四隅突出型墳丘墓のなかでは隣接する2号墓とともに中型タイプである。基盤集落としては、2号墓と南東150m地点にある3号墓とともに、380m東の平野にある富崎遺跡、もしくは580m南西の富崎丘陵尾根上にある富崎赤坂遺跡・離山紫遺跡が考えられる。

●2号墓

a. 所在地 富山市婦中町長沢・富崎地内

b. 立地 標高70mの山田川右岸、富崎丘陵北東縁辺部に立地し、北方が谷となり東方に婦負平野が広がる。南西方は、緩やかな傾斜となり、丘陵北西縁辺部尾根にある富崎赤坂遺跡・離山紫遺跡へとつながる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は37.2m（標高31.3～68.5m）である。

c. 形態と規模 四隅突出型墳丘墓。崖側は土砂崩落、東側は牧場造営の為に削平されている。墳丘は、南北側辺部裾が15m以上、東西側辺部裾が17m以上で、1号墓から判断すると台状部はほぼ方形であると推測される。唯一遺存している南西側の突出部は、長さ6.3m、最大幅9.5m、基部幅6mで、平面形が橢円形である。墳丘裾部と頂部の比高差は最大2.8m（標高68.5～71.3m）で、墳頂部と突出部の比高差は1.1m、突出部と墳丘裾部の比高差は1.7mである。造成方法は、周溝を全周させ、台状部に盛土を施して整形する。突出部の盛土の有無は不明である。周溝の規模は、地山掘削ライン両端で測ると、突出部側で最大幅2m、深さ22cmと狭くて浅い。側辺部側は平成元年度調査で、最大幅6m、深さ150cmと広くて深いことが確認されている。周溝の立ち上がりは墳丘側が急傾斜となる。墳丘の主軸は真北から4°東に振っている。

d. 埋葬主体部 未調査のため不明である。

e. 出土遺物 出土遺物はほとんど無く、器形が分かるものは平成元年度調査で周溝から出土した器台脚部のみである。

f. 織造時期 弥生時代後期～終末期（法仏式～月影I式期）に比定される。

g. 小結 極端に肥大化した突出部が特徴的であり、本遺跡群の四隅突出型墳丘墓のなかでは隣接する1号墓とともに中型タイプである。基盤集落としては、1号墓と南東150m地点にある3号墓とともに、380m東の平野にある富崎遺跡、もしくは580m南西の富崎丘陵尾根上にある富崎赤坂遺跡・離山紫遺跡が考えられる。

なお、牧場造成工事の際、工事関係者によって1・2号墓周辺で採集された不時発見の遺物に、小型台付装飾壺2個体がある（P23図11の18・19）。詳細な出土地点は不明であるが、当地の弥生時代後期から終末期に特徴的な祭祀土器であり、遺存状態の良いものとして貴重である。

その他の採集遺物としては、壺・壺・高杯・器台（P23図11の1～17）などがある。これらの採集遺物から、周辺には後述する富崎3号墓（法仏式期）よりやや新しい時代（月影I・II式期）の墳丘墓の存在が推定できる。

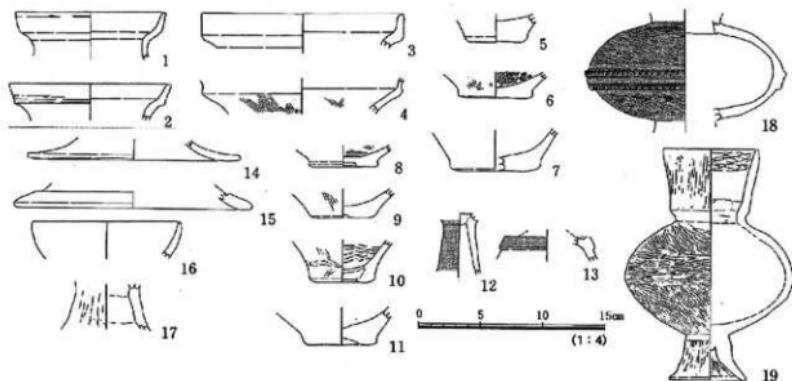


図11 富崎1・2号墓周辺における採集土器

「婦中町富崎地内採集の遺物」『大境13号』 富山考古学会 1991より転載

●3号墓

a. 所在地 富山市婦中町富崎地内

b. 立地 標高 67.50mの山田川右岸、富崎丘陵北東端から北に派生する小支脈の瘦尾根基部に立地する。西方と北方が谷となり、東方に婦負平野が広がる。南西方は、緩やかな傾斜となり、富崎丘陵尾根へと伸びる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は36.1m（標高30.0～66.1m）である。

c. 形態と規模 四隅突出型墳丘墓。崖側は土砂崩落の為、突出部の一部が消失している。墳丘は、規模が南北側辺部裾が22.0m、東西側辺部裾が21.0mで、台状部はほぼ方形である。突出部は、周溝を四隅のみ掘り残すことによって形成されており、平均で、長さ4m以上、最大幅（上場）12m程度、基部幅6.2mである。墳丘裾部と頂部の比高差は最大3.9m（標高66.1～70.0m）で、墳頂部と突出部の比高差は約2.5m、突出部と墳丘裾部の比高差は約1.4mである。造成方法は、周囲を広く削り出し、北・南側では更に周溝を巡らせ、台状部に盛土を施して整形する。側辺部側の周溝の規模は、地山掘削ライン両端の平均で、最大幅6.20m、深さ92cmである。周溝の立ち上がりは墳丘側が急傾斜となる。墳丘の主軸はほぼ真北に向かう。

d. 埋葬主体部 未調査のため不明である。

e. その他の遺構 SK01は、南西突出部の東側基部上に掘り込まれた土壙墓と考えられる土坑で、規模は上場で長軸2.5m以上、短軸1m、下場で長軸1.8m以上、短軸45cmである。基部を掘り込んで埋葬した後埋め戻し、仕上げに地山の土で丁寧に整地して堅く締めたものと考えられる。一見して土壙の痕跡は見えず、突出部の景観は崩れない。また埋め戻し後、東側の一箇所に小石をいくつか置いた上に蓋を据えている。覆土は、内部の有機物が腐食した為か、レンズ状に落ち込む。木棺を埋葬した可能性もあるが、土層や壁面には痕跡が確認できず、また、底部の幅が狭く側辺の壁の立ち上がりも直線的でないなど、不明確である。内部に副葬品は無かった。

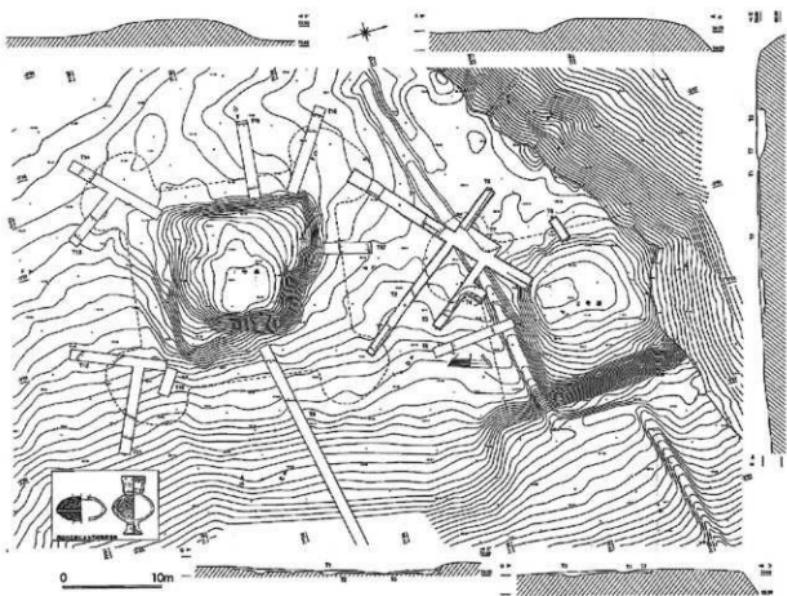
SK02は、南西突出部の南西延長線上にある円形の土坑で、直径1.3m、深さ70cmである。底部では3、4箇所において、小石をいくつか置いた上に蓋4個体、甕1個体が据えてあった。これらは蓋1個体を除いて全てに煤が付着する。他時代のものとしては、墳丘西斜面中腹にある平坦面で地山直上に須恵器が出土しており、古代に改変したものと思われる他、南側には戦国時代の富崎城の土塁がある。

f. 出土遺物 (P26 図 13・P27 図 14) おもな遺物は弥生上器で、壺、甕、高杯、器台、蓋、碗などが多い量に出土した。出土状況は、墳丘裾に転落した状態のものや、上記遺構に伴うものほか、墳丘盛土内に破片の状態で混入するものが多くあった。盛土内の土器には、他の上器との時期差はうかがえないため、墳丘築造以前の土器ではなく共伴するものと考えられている。土器様相は、長く外反する頸部に無文の短い口縁部が付く甕や 2 条のみの擬回線を施す甕、屈曲する胴部をもつ小型装飾壺、有段口縁の器台受部、強く外反し口縁端部を短く上方に伸ばす器台受部、高杯・器台の棒状有段脚など、法仏式の様相を示すものが多い。特筆すべきものには、墳丘西裾から出土した脚付有段装飾甕がある。赤彩した口縁部に回線文を施し、胴部上半には勾玉形の赤彩を 6 箇所に施すほか、赤彩した突帯部には 4 箇所に切り込みを入れるなど、特殊な装飾を施す。その他、北東突出部から出土した壺は、筒状の頸部から端部が垂下する口縁部が直線的に開くもので、東海の影響を受けたパレス系広口壺である。口縁部に回線文を施し、5 箇所に円形スタンプ文を中心に押印した浮文が付き、浮文は正面では 4 つ、それ以外では 2 つの組になる。同じ北東突出部には、器台もしくは壺と考えられる大型品の口縁部が出土した。外面に粗い回線文を施し、上端には同心円のスタンプ文を押印する他、口唇部上・下端にキザミ目を施す。その他平行線文の間に外円が波状になる同心円のスタンプ文や鰐齒文的スタンプ文を押印したり、局部的に赤彩を施すものなど、様々な装飾のものがある。他時代のものには磨製石斧、古代須恵器杯、古代土師器碗・甕、中世土師器皿、古錢、越中瀬戸丸碗があり、墳丘墓が戰国時代の土塁の他にも、何らかに転用された可能性がある。

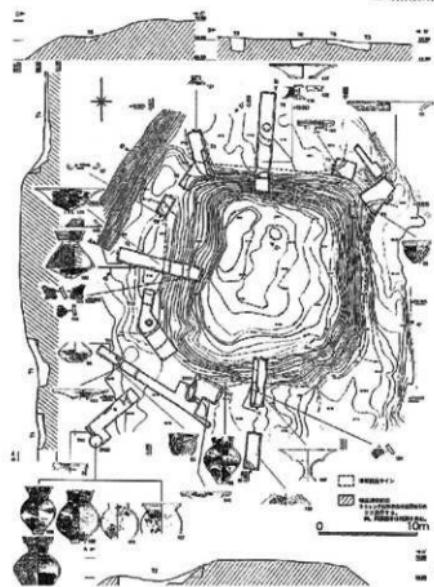
g. 築造時期 弥生時代後期（法仏式期）に比定される。

h. 小結 富崎 3 号墓は、県内で最も古い四隅突出型墳丘墓であり、主な特徴としては、①遺物出土量が非常に多い、②多様な葬送・祭祀儀礼を行う、③四隅を掘り残して突出部を形成する、などが挙げられ、①②は本遺跡群ではこの遺跡にのみ顕著にみられる特徴である。①については、f. で述べたように様々な形態や装飾のものがあり、②については、墳頂部での祭祀儀礼の他、墳丘築造過程における盛土への土器片の混入、複数の土器を据えた土坑、突出部基部への埋葬など、様々な儀礼バターンがあることが推測できる。③については、側辺部に幅広の溝を掘り、突出部が肥大化した状態になるように掘り残すのが特徴で、本墳墓より築造時期が少し下る鏡坂 1 号墓とともに四隅掘り残しタイプの四隅突出型墳丘墓である。基盤集落としては、北西 150m 地点にある 1・2 号墓とともに、170m 東の平野にある富崎遺跡、もしくは 670m 南西の富崎丘陵尾根上にある富崎赤坂遺跡・離山砦遺跡が考えられる。

富崎墳墓群においては、1・2 号墓は規模・形態ともにほぼ同じであるが、3 号墓は規模や突出部の形成方法、土器出土量の圧倒的な差、葬送・祭祀儀礼の多様性など、時期差や身分格差などによって前者 2 基とは大きな差が生じている。主軸方向は 3 基とも似ており、基盤集落も共通する。3 基ともに、平野の集落である富崎遺跡は北西・南東突出部を結んだ方角にあり、丘陵の集落である富崎赤坂遺跡・離山砦遺跡は北東・南西突出部を結んだ方角にあることから、突出部を集落に向けて築造した可能性がある。その他、周溝の立ち上がりの傾斜状況も共通する。



富崎墳墓群1号墓・2号墓



富崎墳墓群3号墓

図12 富崎墳墓群 (1:500)

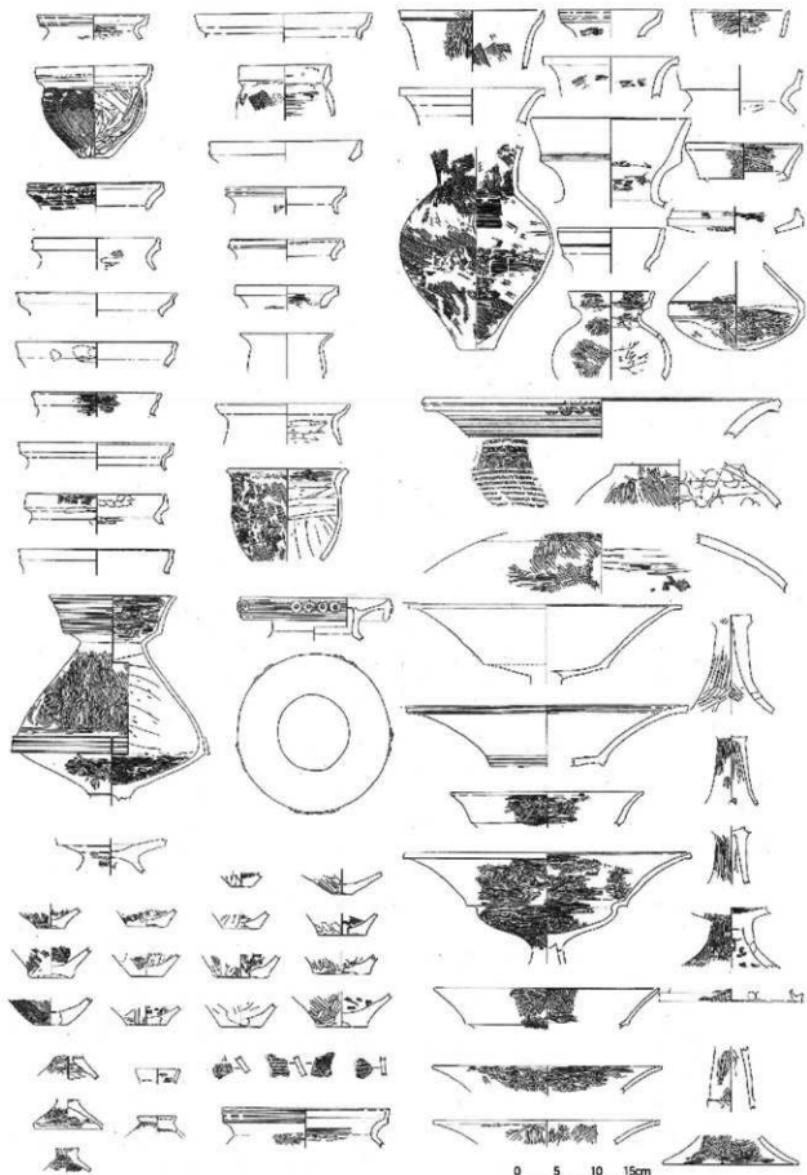


图13 富崎填群3号墓出土遗物 (1:6)

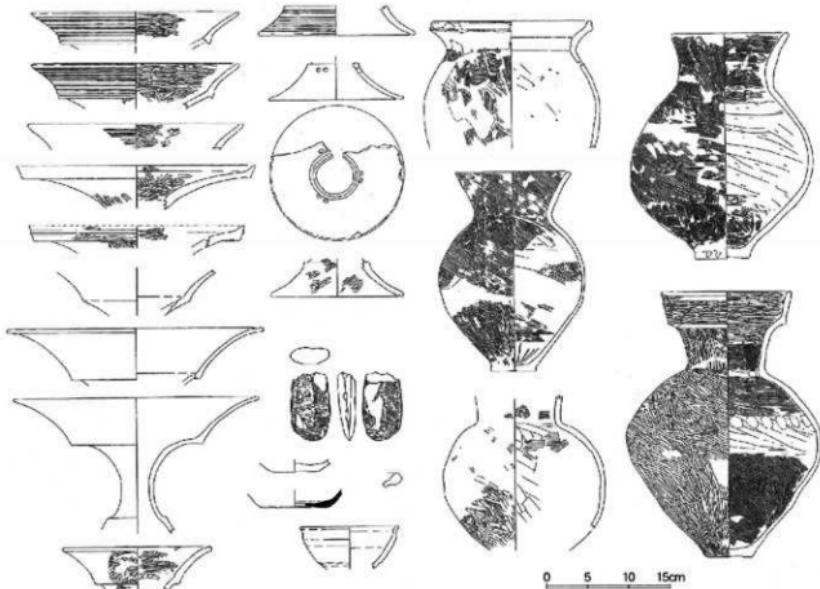


図14 富崎墳墓群3号墓出土遺物（1:6）

(4) 富崎千里古墳群 (P32 図 15)

本古墳群は、佐伯哲也氏により発見された。前述した富崎墳墓群と谷を挟んで南側に分布する 17 基の古墳群である。南群と北群は小さな谷を挟んで両側に造営され、南群 14 基（前方後方墳 1 基、方墳 12 基、円墳 1 基）、北群 3 基（方墳 3 基・未指定地）で構成される。南群の古墳の分布状況は、平野に平行する小さな尾根の頂部に 9 号墳が位置し、その 5m 下の尾根北側に 1 号墳が配置、残りの 12 基は尾根頂部から約 10m 下の東斜面にある平坦面に位置する。これらは、分布状況から 4 群に分けられる。古墳群の下方には、東の平野側に向かって方形や円形に張り出している地形があり、周溝墓の可能性もある。

現在、遺跡範囲のほとんどが、富山県農業技術センター畜産試験場の敷地内である。

●1号墳 (P32 図 15)

- 所在地** 富山市婦中町千里地内
- 立地** 標高 51m の富崎丘陵東縁辺部尾根上に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へとつながる。
- 形態と規模** 方墳。一边 13.5m、高さ 0.8m で、正方形であると推定される。埋葬主体部、遺構、遺物、築造時期は未調査のため不明。

●2号墳 (P33 図 16)

- 所在地** 富山市婦中町千里地内
- 立地** 標高 46m の富崎丘陵東縁辺部斜面に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小尾根か

ら小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へとつながる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は19.60m（標高24.50～44.10m）を測る。

c. 形態と規模 方墳。墳丘は、南北側辺部裾が14.1m、東西側辺部裾が13.1mで、南北にやや長い長方形である。墳丘裾部と頂部の比高差は最大3.2m（標高47.3～44.1m）である。造成方法は、広く地山を削り出すとともに周溝を巡らせ、墳丘に盛土を施して整形し、周溝と墳丘の境目には、削り出した地山面を平均85cmの幅で緩斜面もしくは平坦面の状態のまま掘り残す。北・西側では周溝は二重となり、その規模は上端で測ると、内溝が幅2.4m、深さ130cmで、外溝が幅1.2m、深さ57cmと、内溝の方が広くて深くなる。南・東側の周溝は一重で、規模は地山裾前面で南側が幅2.6m、深さ85cm、東側が幅3.1m、深さ50cmである。周溝の立ち上がりは、墳丘側がやや緩やかな傾斜となる。墳丘の主軸は真北から15°東に振っている。

d. 埋葬主体部 未調査のため不明である。

e. その他の遺構 T3南側では、2号墳の南に隣接する4号墳の北東隅周溝を検出した。

f. 出土遺物 おもな遺物は土師器で、壺・甕の底部が裾部から出土した他、高杯が4号墳周溝から出土した。土器出土量は極めて少ないが、4号墳は杯底部からハの字に開く高杯脚部があるなど、古墳時代初頭の様相を示す。他時代のものには、縄文土器がある。

g. 築造時期 古墳時代前期、白江式期（～古府クルビ式期）に比定される。

h. 小結 現在のところ、本古墳群で唯一周溝が二重になるタイプである。南群のなかでは最も北側のグループに位置し、西側の尾根上には1号墳が、南側には3・4号墳、北側には13号墳がある。

●3号墳（P32図15）

a. 所在地 富山市婦中町千里地内

b. 立地 標高46mの富崎丘陵東縁辺部斜面に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小尾根から小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へとつながる。

c. 形態と規模 一辶6.5～6.7m、高さ0.5mで、方墳と推定される。埋葬主体部、遺構、出土遺物、築造時期は未調査のため不明。

●4号墳（P32図15）

a. 所在地 富山市婦中町千里地内

b. 立地 標高47mの富崎丘陵東縁辺部斜面に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小尾根から小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へとつながる。

c. 形態と規模 方墳。11m×9m、高さ1.7mで、長方形と推定される。2号墳の試掘調査の際、北東隅周溝を検出した。埋葬主体部、遺構、出土遺物、築造時期は、未調査のため不明である。

●5号墳（P32図15）

a. 所在地 富山市婦中町千里地内

b. 立地 標高47mの富崎丘陵東縁辺部斜面に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小尾根から小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へとつながる。

c. 形態と規模 方墳。11.5m×9.5m、高さ0.7mで、長方形と推定される。埋葬主体部、遺構、出土遺物、築造時期は未調査のため、不明である。

●6号墳（P33図16）

a. 所在地 富山市婦中町千里地内

b. 立地 標高48mの富崎丘陵東縁辺部斜面に立地し、丘陵裾部は東方に婦負平野が広がる。西方は、小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へとつながる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は

21.2m（標高 24.8～46.0m）である。

c. 形態と規模 方墳。墳丘は、南北側辺部幅 15.4m、東西側辺部幅 12.0m で、南北に長い長方形である。墳丘裾部と頂部の比高差は最大 3.3m（標高 46.0～49.3m）である。造成方法は、広く地山を削り出すとともに丘陵側（墳丘西半部）では周溝を巡らせ、墳丘に盛土を施して整形し、周溝が深い墳丘西側では、周溝と墳丘の境目に削り出した地山面を平均 65cm の幅で緩斜面のまま掘り残す。墳丘西側の周溝は、地山掘削面で幅 4.9m、深さ 1.2m である。周溝の立ち上がりは、墳丘側がやや緩やかな傾斜となる。墳丘の主軸は真北から 22° 東に振っている。

d. 埋葬主体部 未調査の為不明である。墳頂部を地表面から 25cm 程度掘削したが、墓壙ラインは検出できなかった。

e. その他の遺構 SK01 は、墳丘南西隅の周溝の底部にある焼壁上坑で、直径 80cm の円形である。遺物は出土していない。

f. 出土遺物 おもな遺物は土師器で、高杯、鉢、壺底部などが裾部から出土した。土器山土量は極めて少ないが、杯底部からハの字に開く高杯脚部があるなど、古墳時代初頭の様相を示す。また、図示し得なかつたが甕もあった。

g. 築造時期 占墳時代前期（白江式期～古府クルビ式期）に比定される。

h. 小結 南群のなかでは中央部南側のグループに位置し、西側の尾根上には 9 号墳があり、南側には 7・8 号墳がある。墳丘東側は墳裾から平坦面及び緩斜面が 2m 程度続いた後、幅 1.6m、深さ 20cm の浅い溝があった。墳丘と溝に挟まれた範囲は、墳丘に付属する空間である可能性もあるが、周辺は植林による擾乱を受けている為、人為的な地形かどうかかも明確ではない。

●7 号墳 (P32 図 15)

a. 所在地 富山市婦中町千里地内

b. 立地 標高 48m の富崎丘陵東縁辺部斜面に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小尾根から小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へとつながる。

c. 形態と規模 方墳。12.6m × 8.2m、高さ 2.3m で、長方形と推定される。埋葬主体部、遺構、出土遺物、築造時期は未調査のため不明である。

●8 号墳 (P32 図 15)

a. 所在地 富山市婦中町千里地内

b. 立地 標高 49m の富崎丘陵東縁辺部斜面に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小尾根から小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へとつながる。

c. 形態と規模 方墳。10.2m × 10m、高さ 2.0m で、長方形と推定される。埋葬主体部、遺構、出土遺物、築造時期は未調査のため不明である。

●9 号墳 (P33 図 16)

a. 所在地 富山市婦中町千里地内

b. 立地 標高 55.0m の富崎丘陵東縁辺部尾根上に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、富崎丘陵尾根へとつながる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は 29.7m（標高 24.8～54.5m）である。

c. 形態と規模 前方後方墳。墳丘規模は、全長 34m、後方部長 20m、前方部長 14m、後方部幅 19m、前方部幅 13.7m、くびれ部幅 6.8m で、墳丘裾部と後方部頂部の比高差は最大 4.1m（標高 54.5～58.6m）である。後方部はやや綾長の長方形である。前方部は後方部に比べ小さく、くびれ部と後方部頂部の比高差は 2.3m（標高 56.3～58.6m）と大きいなど、出現期古墳の様相を呈する。前方部

は、くびれ部から先端部に向けて傾斜して高まりながら開き、くびれ部頂部と先端部の比高差は35cmである（標高56.30～56.65m）。また、墳丘北裾と前方部先端との比高差は1.6m（標高55.05～56.65m）である。造成方法は、広く地山を削り出すとともに、後方部南裾及びくびれ部、前方部側辺部には周溝を巡らせ、墳丘に盛土を施して整形し、（疊混じり地山の為、盛土にも礫が多量に入る）、墳丘南東側では周溝と墳丘の境目に削り出した地山面を75cmの幅で平坦面のまま残す。周溝の規模は、地山掘削ライン両端の後方部南裾部が幅3.9m、深さ80cmであり、くびれ部及び前方部側辺では幅2.2m、深さ26cmと狭くて浅くなる。周溝の立ち上がりは、墳丘側がやや緩やかな傾斜となる。墳丘の主軸は真北から28°東に振っている。

d. 埋葬主体部 未調査の為不明であるが、後方部墳頂中央部（T2南端）では、北東・南西幅1m以上、北西・南東幅60cm以上、深さ10cm以上の範囲で、破碎された赤彩上器が集中して出土した部分があり、埋葬主体部はその下に存在することが推測される。

e. 出土遺物 おもな遺物は土師器で、壺、甕、高杯缸部、器台脚部、蓋などが墳丘頂部もしくは裾部から出土した。墳丘頂部の破碎土器は26点出土した。接合出来ない為器形は分からないが、小型装饰壺一個体分か。土器様相は、小型器台の脚、高さのある逆台形の摘みをもち体部が内湾する蓋など、古墳時代初頭の様相を示す。また、図示し得なかったが、甕もあった。他時代のものとしては、縄文土器、打製石斧がある。

f. 築造時期 古墳時代前期（白江式期～古府クルビ式期）に比定される。

g. 小結 本古墳群の頂点に立つ古墳であり、唯一の前方後方墳である。墳頂部における土器の出土状況から、破碎土器を埋葬主体部上に撒く祭祀を行っていたことが分かる。南群のなかでは中央部南側のグループに位置し、東側面下方の平坦面には6号墳がある。月影II式期の前方後方形墳丘墓である向野塚と比較すると、前方部がまだ小さいものの、①前方部が撥形に開く形状となる、②前方部がくびれ部から先端部に向けて隆起するなどの変化がある他、墳丘全体では、③大規模化、④前方部と後方部の比高差が大きくなる、⑤周溝の在り方の違い、⑥主軸方向に対する意識の違い（後方部を東西に向け墳丘側辺部を平野に向ける）など、大きく変化している。

●10号墳（P34図17）

a. 所在地 富山市婦中町千里地内

b. 立地 標高53mの富崎丘陵東縁辺部斜面に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小尾根から小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へとつながる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は24.5m（標高26.9～51.4m）である。

c. 形態と規模 円墳。規模は直径20mである。墳丘裾部と頂部の比高差は最大4.3m（標高51.4～55.7m）である。造成方法は、広く地山を削り出すとともに周溝を巡らせ、墳丘に盛土を施して整形する。周溝の規模は、地山掘削面で測ると、丘陵側では幅3.8m、深さ105cm、平野側では幅2.8m、深さ70cmである。周溝の立ち上がりは、墳丘側がやや緩やかな傾斜となる。

d. 埋葬主体部 未調査の為不明。墳頂部を地表面から30cm程度掘削したが、墓壙ラインは検出できなかった。

e. 出土遺物 おもな遺物は土師器で、壺が裾部から出土した。土器出土量は極めて少ないが、球形の体部に長い口縁部が付くと考えられる直口壺や、器形はよく分からないが二重口縁壺的な壺の口縁部など、古墳時代初頭の様相を示す。また、図示し得なかったが、壙型上器と考えられる口縁部もあった。

f. 築造時期 古墳時代前期、（白江式期）～古府クルビ式期に比定される。

g. 小結 本古墳群で唯一の円墳である。南群のなかでは最も南側のグループに位置し、南側には 11 号墳、北側には 15 号墳があるが、これらは円形周溝墓の可能性もある。

●11号墳 (P32 図 15)

a. 所在地 富山市婦中町千里地内

b. 立地 標高 53m の富崎丘陵東縁辺部斜面に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小尾根から小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へとつながる。

c. 形態と規模 8.2m × 6.8m 、高さ 0.4m で、長方形と推定される。埋葬主体部、遺構、出土遺物、築造時期は未調査のため、不明である。

●12号墳推定地 (P34 図 17)

a. 所在地 富山市婦中町千里地内

b. 立地 標高 54m の富崎丘陵東縁辺部斜面に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小尾根から小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へとつながる。丘陵裾部と 12 号墳推定地である微高地裾部との比高差は 26m (標高 28.0 ~ 54.0m) である。

c. 小結 調査前、本推定地は前方後円墳の可能性のある古墳と推定されていたが、トレンチ断面の土層からみると、古墳と推定されていた微高地の西側に沿って谷が伸びていたが、そこには人為的な整形は認められなかった。また、古墳であることを示す遺構や遺物もなく、自然地形であることが判明した。

●13号墳 (P32 図 15)

a. 所在地 富山市婦中町千里地内

b. 立地 標高 44m の富崎丘陵東縁辺部斜面に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小尾根から小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へとつながる。

c. 形態と規模 方墳。一辺 6.5m 、高さ 0.3m で、正方形と推定される。埋葬主体部、遺構、出土遺物、築造時期は未調査のため、不明である。

●14号墳 (P32 図 15)

a. 所在地 富山市婦中町千里地内

b. 立地 標高 47m の富崎丘陵東縁辺部斜面に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小尾根から小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へとつながる。

c. 形態と規模 方墳。一辺 7.5m 、高さ 0.3m で、正方形と推定される。埋葬主体部、遺構、出土遺物、築造時期は未調査のため、不明である。

●15号墳 (P32 図 15)

a. 所在地 富山市婦中町千里地内

b. 立地 標高 51m の富崎丘陵東縁辺部斜面に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小尾根から小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へとつながる。

c. 形態と規模 方墳。8.7m × 6.8m 、高さ 0.4m で、長方形と推定される。埋葬主体部、遺構、出土遺物、築造時期は未調査のため、不明である。

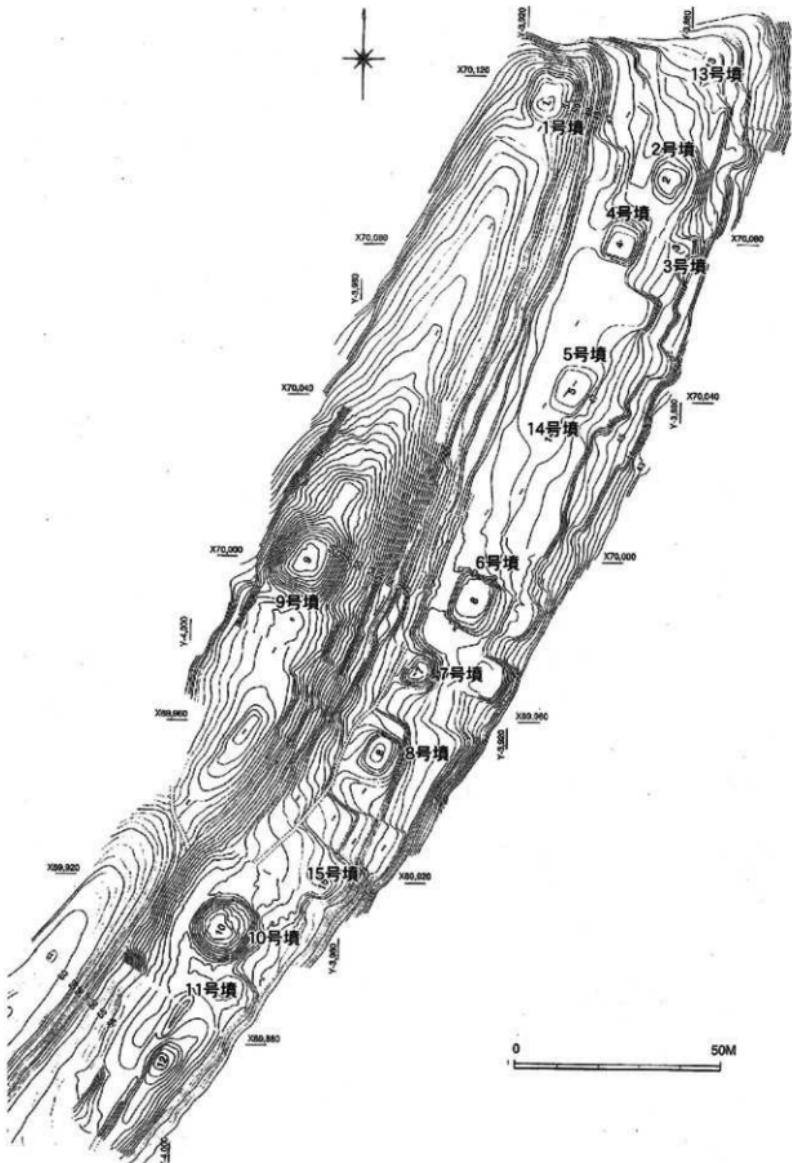


図15 富嶺千里墳墓群 測量図 (1:1,200)

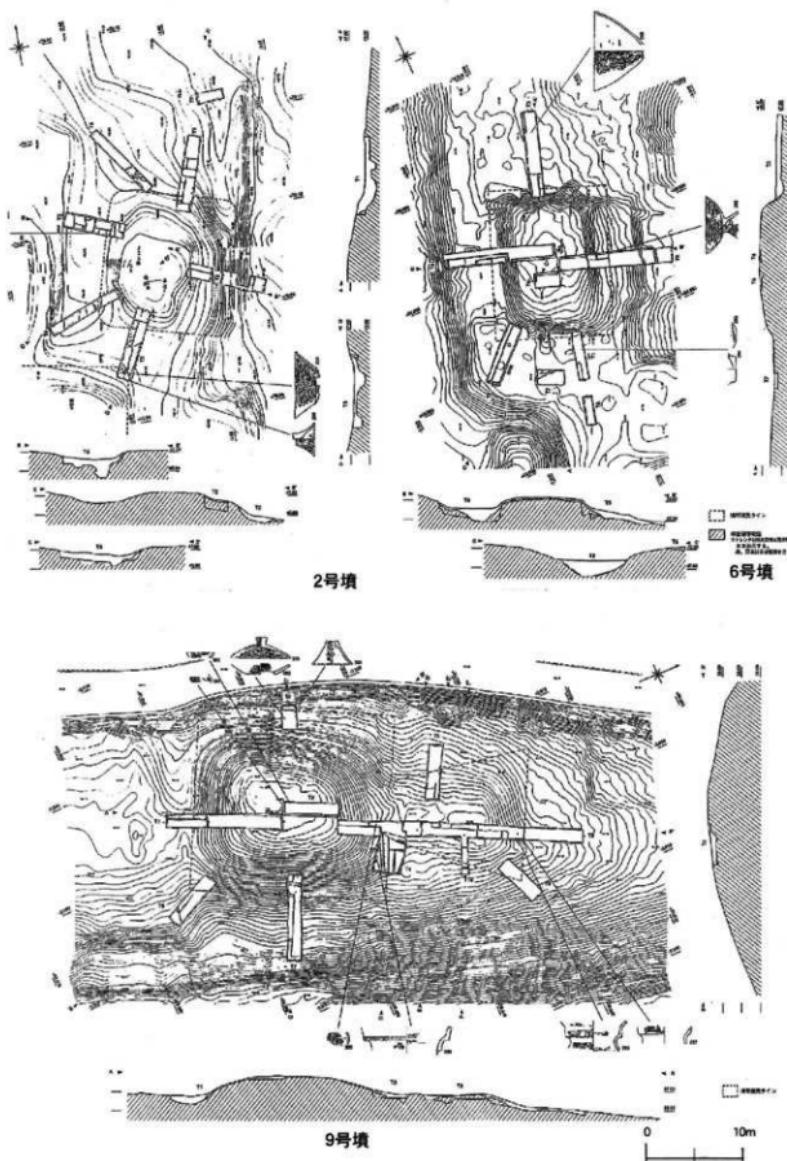


図16 富崎千里古墳群（2、6、9号墳）(1:500)

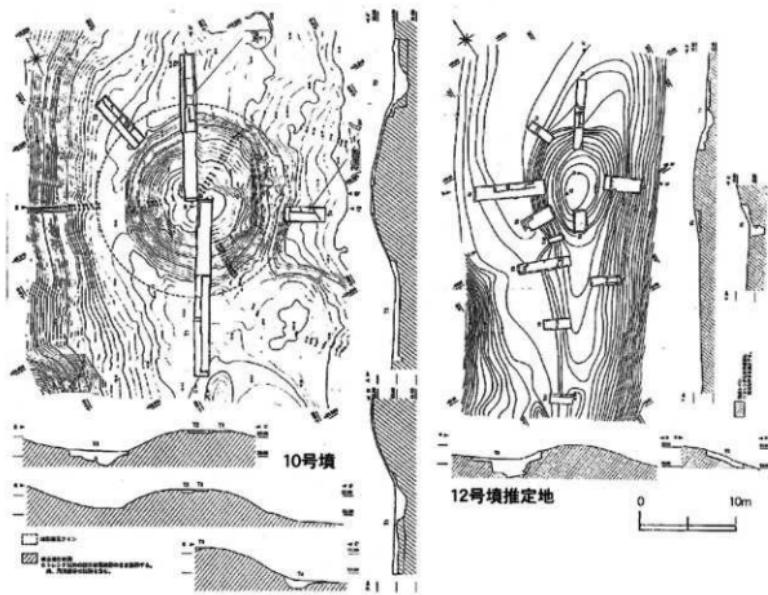


図17 富崎千里古墳群10号墳・12号墳推定地 (1:500)

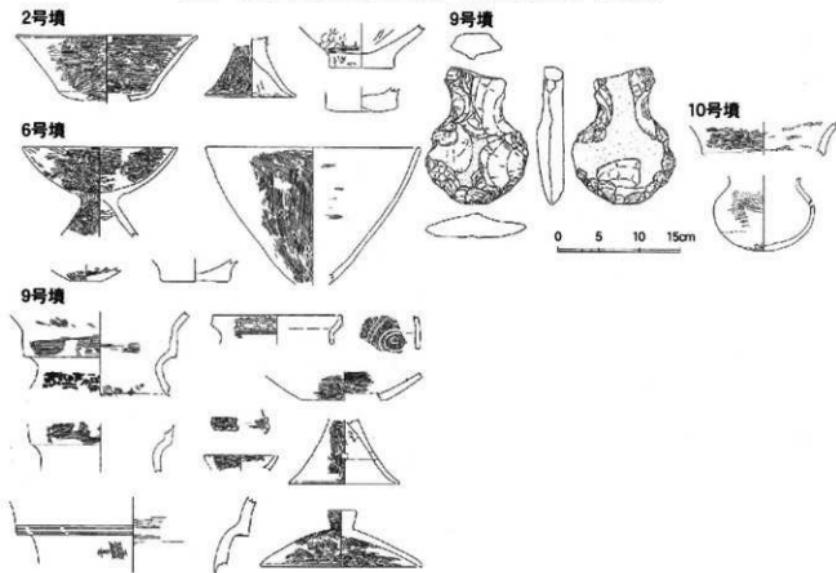


図18 富崎千里古墳群2号墳・6号墳・10号墳出土遺物 (1:6)

(3) 総括 史跡王塚・千坊山遺跡群における在地勢力の推移 (P36 図 19)

本遺跡群の分析は、古墳出現期の地域的様相を考える上で極めて重要な位置を占めるものであり、そのためにはまず遺跡群を構成する遺跡の分布状況や内容など基本的な諸点を捉え、総合的に考察する必要がある。試掘確認調査はこのような視点から実施し、集落と埋葬の両面から弥生時代から古墳時代への移行期の動態を把握する手掛かりが得られた。その成果を周辺遺跡の在り方等も含めて時間的な流れに沿ってまとめる以下のようなになる。

I期（法仏式期）は出現期。富崎グループ（高地性集落）と鍛冶町グループ（平野の集落）が出現し、ムラ長を始めとする特定個人墓として四隅突出型墳丘墓を築造する特殊な墓制が成立した。

II期（月影I式期）は成立期。本遺跡群を構成した4グループ（富崎・鍛冶町・千坊山・南部）がそろい、相互に等質的な農業共同体を形成した。各集団は共通して四隅突出型墳丘墓を築造し、同じ集団内の特定個人間においては墳丘規模に身分差が反映された。この墓制の築成は県内ではこの一帯に限られ、限定した分布や「千坊山型」といえる地域性から考えると、一地域の自立的共同体が海・陸路ルートで交流した他地域の墓制を固有のものとして消化し在地的墓制に取り入れたものと推測される。他系統の墓制を一過性に受容した背景には、富山平野が政治的に統合されていく社会的変革期を前に、他地域の首長連合のシンボル的墳形を掲げることで井田川・山田川合流域の地縁集団の結束を強化し、勢力を顯示する目的があったのではないかと考えられる。

III期（月影II式期）は発展期。大型墳丘墓の動向から、4グループのうち千坊山グループが地域の中枢を担うようになったと推定できる。千坊山グループでは三つの集団が独自に造墓した可能性が高いが、その中の特定集団が前方後方形墳丘墓を採用したことは大きな変化であり、次の流動期に向けての兆候とみなしうる。

IV期（白江～古府クルビ式期）は流動・再編期で、最盛期といえる。大きな地域社会の変動が起り、それに伴い集落は再編され埋葬は劇的変化を遂げる。千坊山遺跡が廃絶あるいは移動する中で、富山平野を統括する首長が台頭し、定型化・卓越した前方後方墳が築かれた。弥生時代に小地域内で完結していた階層性は広域な地域一帯において重層的に序列化するようになり、墳丘の形態・規模に複雑に反映された。本遺跡群における大型古墳の導入は能登・加賀より早く、これは地域の統合が迅速に進み在地政権が確立した結果とみられ、それと同時に外來系祭式土器の受容に見られるような对外交流も行われたらしい。そしてヤマトを頂点とした汎日本的政治的秩序に参入していくが、その一方で、葺石や埴輪等は受容せず本地系土器が依然として主体を占める状況など地域性も維持される。

V期（高皇式期）は衰退期。大型古墳の造営は古府クルビ式期の2基のみで断絶し、以降は衰退の一途をたどる。

本遺跡群の変遷は考えうるが、集落と埋葬が密接に関係しながら推移した弥生時代から古墳時代への転換過程を非常に良く表している。特にIII期からIV期への劇的変化は、当該期の“激動”的具体相を示しているであろう。

なお、史跡王塚・千坊山遺跡群を取り巻く広域的な情勢として、勅使塚古墳築造後まもなく富山湾近隣の氷見市に造られた柳田布尾山古墳の存在がある。この古墳は日本海側最大（全長 107.5m）の前方後方墳であり、県内外の広い範囲に影響を及ぼした勢力の存在を示す。また以後、富山県西部の射水・砺波郡地域には前方後円墳が出現し、律令期には射水郡に越中国府がおかれる。千坊山遺跡群の衰退は、このような新しい動向の中で理解できるであろう。ただし律令制下において婦負郡が成立することは、本地域が一定の独自性をもつ地域勢力として存続したことと示唆している。

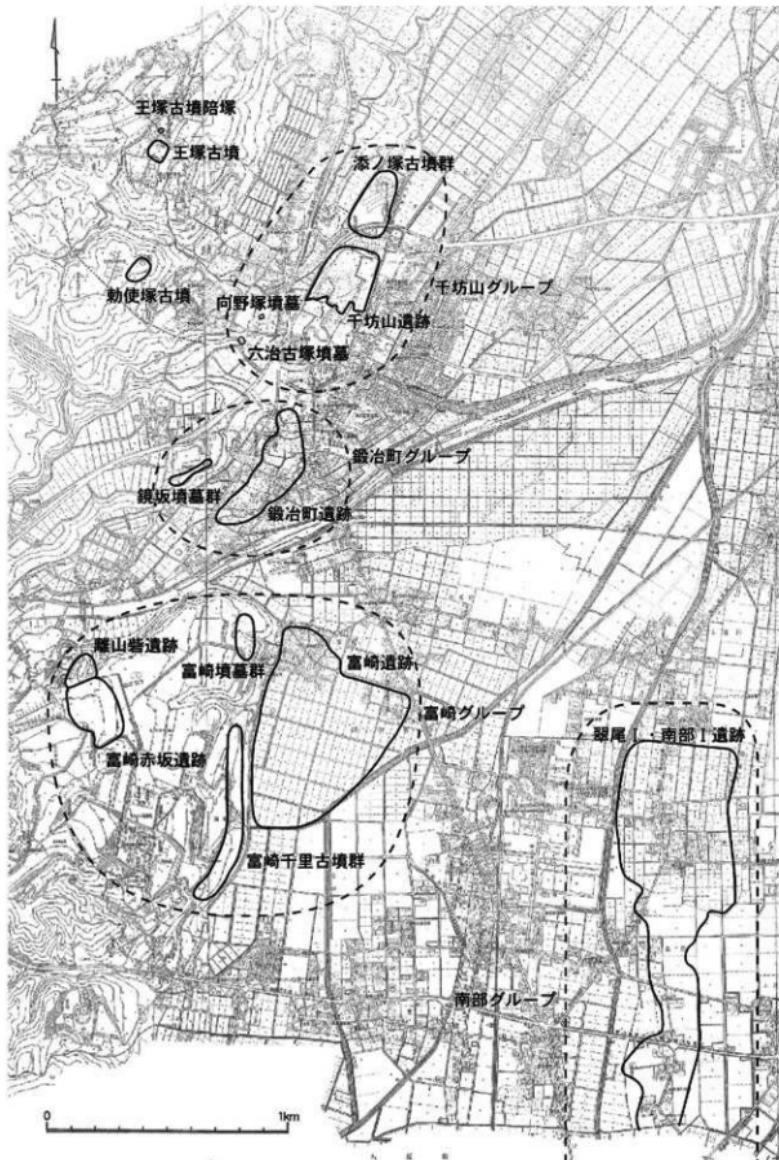


図19 王塚・千坊山遺跡群における弥生時代末～古墳時代前期の遺跡分布図 (1:20,000)

(4) 伝承と古絵図

ア. 伝承

羽根、長沢、新町地内には、各願寺（伝701年創建）にまつわる伝承や『肯構泉達録』（1815年成立）に記載された長沢地区の開祖である人物「六治古」の伝説が残っている。そのうち、史跡と関わる伝承について記す。

(7) 王塚古墳

各願寺の開祖とされる仏性上人の御廟と伝えられている。

(4) 勅使塚古墳

建武年間、帝が比叡山（延暦寺）と北叡山（各願寺）の争いをおさめるため勅使を遣わしたが、随伴した5人の京人とともに殺害された。これを葬ったのが勅使塚古墳と五ツ塚古墳群であると伝えられている。

(9) 千坊山遺跡

指定地南西にある墓地（無門寺管理）には、富山藩主前田利次の臣下で御旅屋羽根の宿場役人であった山田権太夫の墓があったと伝えられている。昔はここに天狗の松と言われる大松があり、夜遊びをする子供を権太夫松の天狗が連れ去るといって戒めたという。

また地元では、遺跡が所在する独立丘陵全体を「千坊山」と呼んでおり、各願寺と関わりのある場所（千人の坊主、千の宿坊など）として言い伝えられてきた。

(1) 六治古塚墳墓

墳墓の名称は、長沢地区の開祖である人物「六治古」に由来する。

イ. 古絵図

『長沢絵図』

長沢の旧家である若林家伝蔵の古絵図で、江戸時代文化年間（1804年～1817年）に若林家第39代市兵衛により描かれた。史跡王塚・千坊山遺跡群の墳墓を含め、この一帯の歴史や伝承が想像力豊かに描かれており、現在消失した墳墓の存在も知ることができる。

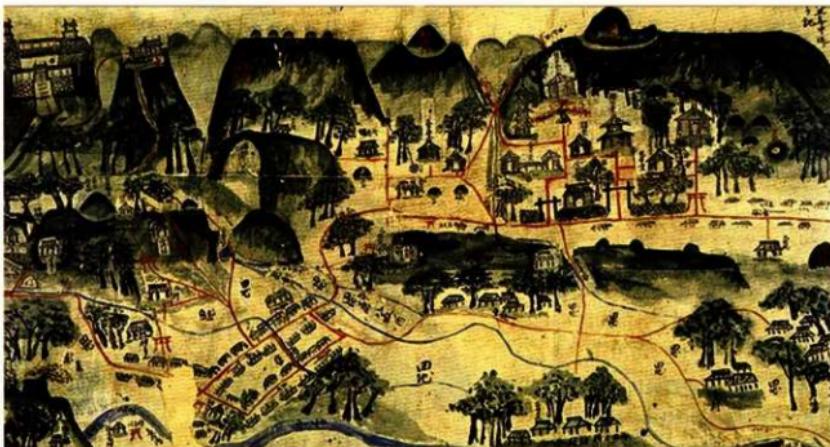


写真1 長沢絵図（若林宰氏所蔵）

2. 自然的調査の結果

(1) 地形・地質調査

ア. 地形概要

富山平野は西の音川山地・射水丘陵・呉羽山丘陵、南の飛騨高地北縁山地、東の飛騨山脈（立山連峰）とその縁辺の山地・丘陵によって三方を囲まれ、北は富山湾に面する。この平野は南北が約20km、東西が20~25kmで、海岸付近を除けばその大部分が常願寺川をはじめ飛騨山脈から流下する河川により形成された扇状地が大部分を占めるが、平野の西端には神通川とその支流山田川・井田川が造る比較的に小規模な扇状地がある。

調査地は富山平野の西部を縁どる河成段丘面群の上に位置する遺跡群の一部である。これらの段丘面は、中村・岡田・竹村（2003）によってI面～X面の10面に分類されている（図20・P39図21）。調査地はI面上とV面上に位置する。

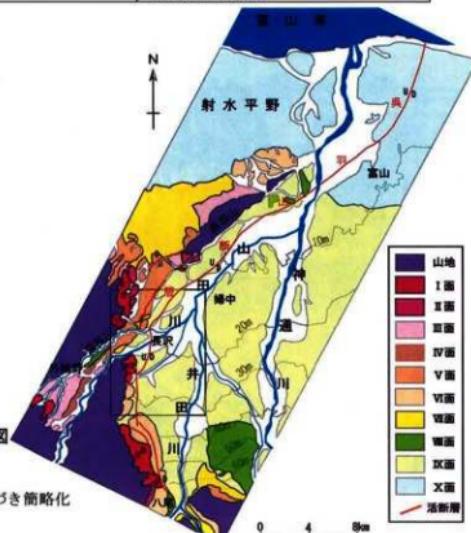
表2 富山平野西縁における河成段丘面の対比 中村ほか(2000)を参考にして作成

時代	広域火山灰	地形面	離水年代(ka)	現河床からの比高(m)	調査遺跡名
完新世		X	繩文晚期以前	沖積低地面	
		IX	0.3~0.4	3以下	
更新世		VIII	<20	5~15	
		VII	20	5~15	
	AT→	VI	25~30	15~40	
		V	50~80	20~30	向野塚墳墓・六治古塚墳墓・千坊山遺跡
	DKP→	IV	90~120	40~50	
		III	110~140	50~60	
	立山WKTZ→	II	140~160	20~50	
		I	160~200	40~80	王塚古墳・勅使塚古墳・富崎墳墓群・富崎千里古墳群

図20 富山平野西縁における地形分類図

「富山平野西縁の河成段丘とその変形」

（中村・岡田・竹村、2003年、地学雑誌）に基づき簡略化



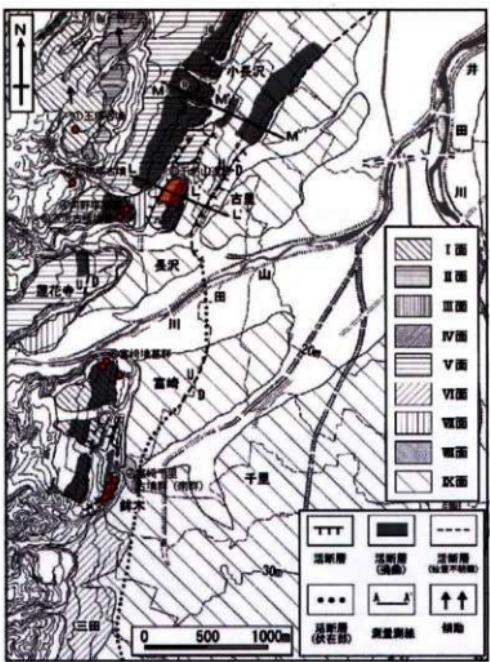


図21 富山平野西縁における地形分類図

「富山平野西縁の河成段丘とその変形」(中村・岡田・竹村、2003年、地学雑誌)に加筆

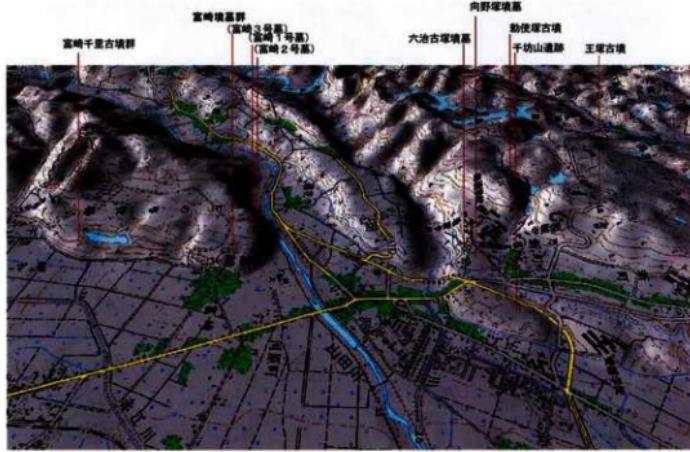


図22 調査地周辺の地形鳥瞰図

(東方上空から見る：高さを2倍に強調)

「数値地図1/25000(西側)」(国土地理院)を使用
3D景観作成プログラム「カシミール」(杉本晋彦作)により加工

1. 地質概要

富山平野西縁付近の台地・丘陵・山地を構成する地質は、新第三紀と第四紀更新世の碎屑物からなる地層である（図23）。音川累層は新第三紀中新世～鮮新世の地層で、主として固結度の低い砂質泥岩もしくは細粒砂岩からなり、凝灰岩層を数枚挟んでいる。ただし近年は、これらのうち最上位の三田砂岩層が第四紀更新世の氷見累層に対比されている。呉羽山疊層は更新世中期の砂疊層で、数枚の砂層と砂質泥層を挟んでおり、10～30cm 大の円疊のうちに腐り疊を多く含むこと、地層が傾斜していることが特徴である。段丘堆積物は主として径10～30cm の円疊からなり、I面では厚さが20m以上、IV面・V面では15m以上、VI面では10m以上である。これらの砂疊層の表面は厚さ0.5～2m の風成ローム層で覆われていることが多い。

富山平野西縁部には、富山市八尾町福島から北北東～北東に伸びて段丘面と平野を通って富山湾に至る活断層（真羽山断層）があるとされている（P38 図 20・P39 図 21）。この活断層は西上がり・東下がりの逆断層で、段丘面の撓曲や段差を生じさせている。これらの変位の平均速度は、およそ 0.1～0.3mm/年と見積もられている（中村・岡田・竹村、前出による）。

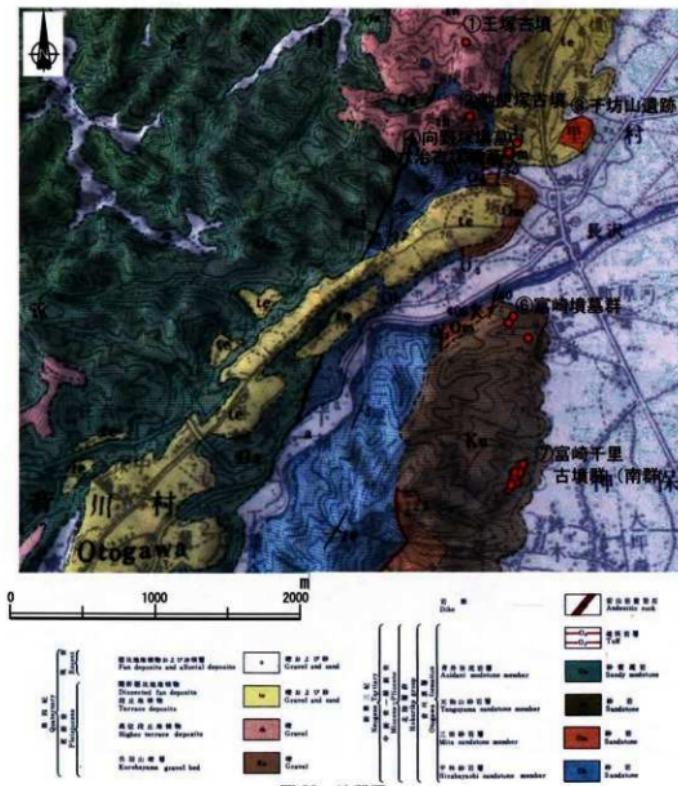


図 23 地質図

5万分の1地質図幅「八尾」(昭和35年、地質調査所)と、「数値地図-50mメッシュ標高」(国土地理院)により、「カシミール」(杉本智彦作)を用いて合成表示した。
①～⑦は調査位置を示す。

ウ. 遺跡の現況

(7) 王塚古墳

- 立地** 射水丘陵東端の河岸段丘Ⅰ面上にあって、墳丘の軸はN41°E、墳丘裾部の地盤はほぼ平坦であるが、前方部に近接して道路面が2m余り切下げられている。
- 地質** 墳丘表面の大半は広葉樹の疎林であるが、林内では草や落葉による被覆がなく、表土（淡黄褐色のシルト質粘土）が露出している。墳丘基盤面下には厚さが2m以上で黄褐色のシルト質粘土（風成層）で覆われており、本層の下部には腐り穂が点在する。さらに下位には厚さが30m以上の砂礫（段丘堆積物）層が分布すると推定される。
- 侵食状況** 墳丘表面には表層崩壊の疑いが持たれる馬蹄形の凹地形、表流水によって形成されたと見られる侵食溝、および雨滴衝突による土壤侵食跡が認められる。また、道面に面する法面では、一部石垣が崩落し、シルト質粘土が露出している。

(8) 勅使塚古墳

- 立地** 射水丘陵東端で河岸段丘Ⅰ面の東に張り出し孤立した枝尾根上にある。墳丘の軸はN60°E。墳丘裾部の地盤は周囲に山腹斜面がせまり、西部のみが鞍部を介し広い段丘面に繋がる。
- 地質** 墳丘表面は広葉樹の疎林であり、地表は落葉と草本の植生で覆われているが、発掘調査後の埋め戻し部などで表土（淡黄褐色のシルト質粘土）が露出している。墳丘基盤面直下に分布する円穂とシルト質砂からなる段丘堆積物が風倒木の根に抱きこまれた状態で観察できる。山麓の道路沿いには腐り穂を含む穂層が各所に露出していることから、段丘堆積物の厚さが40m以上であることが分かる。
- 侵食状況** 墳丘表面では後方部の南半部が頂上から裾部にかけて馬蹄形のなだらかな凹地形になっており、しかも裾部では押し出し地形が見られる。人為的な改変地形の可能性もあるものの、浅い崩壊表層崩壊によって形成されたとの疑いが持たれる。このほかに表流水によって形成されたと見られる侵食溝や、浅い凹地形が所々に見られる。

一方、墳丘の基礎地盤のうち前方部先端と後方部の南隅角部が山腹斜面に接しているため、山腹の侵食・崩壊の影響が

墳丘の一部に及んでいる
疑いがある。

山腹斜面では、墳丘の東側で斜面下半部に湧水が多く、湿地状になった所が点在する。また新池付近の谷沿いで斜面崩壊が生じている。墳丘の南側では、溪流の谷壁や谷頭で侵食・崩壊が進行しつつある。

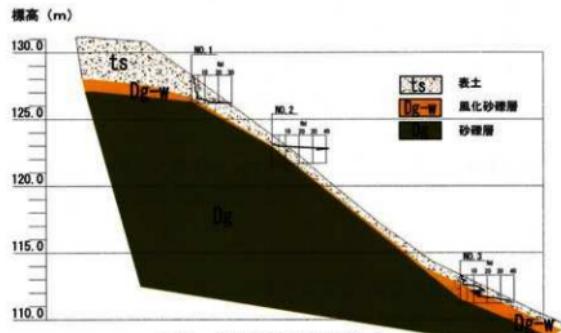


図24 勅使塚古墳地質断面

(1) 千坊山遺跡

- a. **立地** 射水丘陵東端で孤立した河岸段丘V面上に堅穴住居跡などが分布する。東北東-西南西の長軸を持ち、幅250m、長さ600mの矩形をなす段丘の南西側約五分の一が山砂利採取によって失われている。この山砂利採取跡地と段丘面との境界が落差5~10mの崖地になっている。
- b. **地質** 段丘面は畑地、草地、及び針葉樹の林地である。表層は厚さ50cm程度の砂質粘土で覆われ、その下位に円礫と粗砂からなる砂礫層が10m以上の厚さで分布する。
- c. **侵食状況** 崖地の法肩に高さ1.5~2.0mの直立もしくは張り出し部が形成され、過去に崖地上部で崩壊が生じた疑いがある。直立部では非常に良く締まった砂礫層が観察されるが、一部で疊間の砂が洗い出された状態になっている。また、直立部の直下から崖の裾部にかけては、崩土と見られる緩い砂礫層が分布している。

(2) 六治古墳群

- a. **立地** 射水丘陵東端を縁どるように分布し、緩やかに東に傾斜する河岸段丘V面上に位置する。南西面は辺呂川左岸の段丘崖をなす攻撃斜面に接している。辺呂川河床からの比高が24mの段丘崖の中には、放棄された用水路がある。
- b. **地質** 表層は厚さ30~100cm程度の砂質粘土で覆われ、その下位に円礫と粗砂からなる砂礫層が約20mの厚さで分布する。砂礫層の下位には、第四紀更新世の三田砂岩層に属する凝灰質泥岩と凝灰岩が分布し、段丘崖最下部から河床にかけて露出している。周囲の段丘面は宅地、草地、広葉樹および針葉樹の林地で、墳丘上には杉の高木が生育している。段丘崖は広葉樹林である。
- c. **侵食状況** 段丘崖に接する墳丘の南西部が欠損している。この欠損部は、段丘崖の崩壊に伴って形成されたものである。曲流する辺呂川の水衝部において三田砂岩層が侵食されるのに従い、上位の段丘堆積物(砂礫層)が崩壊したものと考えられる。なお、段丘崖の中途を通る農業用水路の基礎地盤の一部が崩落している。このような侵食・崩壊は今後も継続して進行するものと判断される。

(3) 向野塚墳墓

- a. **立地** 射水丘陵東端を縁どるように分布し、緩やかに東に傾斜する河岸段丘V面上に位置する。
- b. **地質** 表層は厚さ30~100cm程度の砂質粘土で覆われ、その下位に円礫と粗砂からなる砂礫層が約20mの厚さで分布するものと推定される。墳丘上には杉の高木が生育しており、墳丘の周辺は竹林である。
- c. **侵食状況** 前方部の墳丘が削平され、後方部の一部のみが東西方向の軸を持つ幅5m、長さ12mの矩形の高まりとして残っている。人工改変が顕著であるが、侵食・崩壊地形は見られない。

(4) 富崎墳墓群

- a. **立地** 射水丘陵東端、山田川右岸側に、段丘面Iに対比され富崎丘陵と称される台地状緩斜面がある。この台地は山田川の谷底平野との比高差が35~40mで、北端部に3基の墳墓がある。1号墓は山田川右岸の段丘崖に接し、2号墓は段丘面上にある。3号墓は段丘を刻む小谷の谷壁斜面に接する。
- b. **地質** 表層は厚さ30~100cm程度の砂質粘土で覆われ、その下位に呉羽山礫層に対比される円礫と粗砂からなる砂礫層が約35mの厚さで分布する。砂礫層の下位には、第四紀更新世の三田砂岩

層に属する凝灰質泥岩・砂岩互層と凝灰岩が分布し、段丘崖最下部から河床にかけて露出している。1号墓・2号墓は周囲の段丘面が牧草地であるが、墳墓上は草地である。3号墓は墳丘とその周囲が竹と杉との混生林である。

c. 侵食状況 2号墓は段丘崖に接する墳丘の北辺部が欠損している。この欠損部は、段丘崖の崩壊に伴って形成されたものである。また、1号墓・2号墓はともに人工改変により墳丘の一部が削平されており、特に2号墓の東辺部は欠損している。3号墓は四隅の突出部の輪郭が不明瞭になっているほか、北西・北東の突出部が小谷の谷壁斜面に接する部分で一部が欠損している。また、墳丘の南辺部斜面に浅層崩壊跡と見られる馬蹄形の凹地形がある。

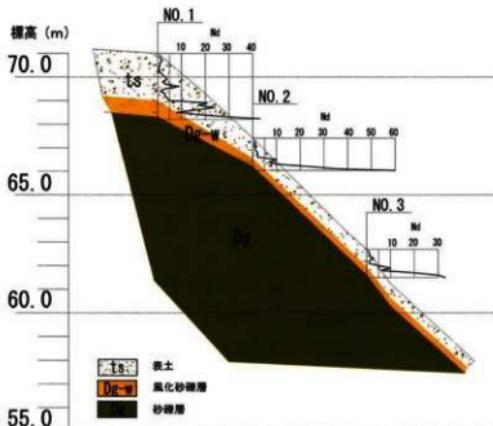


図 25 富崎墳墓群 2号墓地質断面

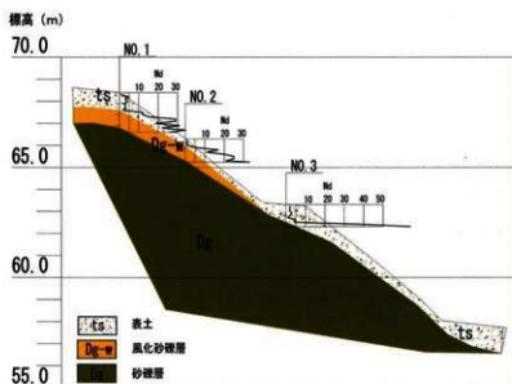


図 26 富崎墳墓群 3号墓地質断面

(2) 富崎千里古墳群

- a. **立地** 富崎丘陵の南半部の東端に位置する。この位置の背後には活断層に関連して形成されたことが推定される谷が南北方向に伸びているため、この谷に平行な枝尾根になっている。この尾根の頂部（平野との比高差が約30m）から東側に数段の階段状平坦面が形成されており、これらの平坦面上に14基の墳墓がある。階段状平坦面群の東側は前面の富山平野との比高差が約20mの山腹斜面である。この区域の北端は丘陵を横断する谷の谷壁斜面であり、この谷に牧場の洪水調節池の堰堤が築造されている。
- b. **地質** 古墳群が立地する尾根は、杉の高木が生育する植林地が大半を占め、一部が草地である。表層は厚さ30~100cm程度の砂質粘土で覆われ、その下位に円礫と粗砂からなる砂礫層が約30m以上の厚さで分布する。砂礫層の下位には、第四紀更新世の三田砂岩層に属する凝灰質泥岩・砂岩互層と凝灰岩が分布していることが推定されるが、丘陵裾部には露出せず、より深い位置に潜在する。
- c. **侵食状況** 墳墓の侵食・崩壊については14基の墳墓のうち2、8、9、10号墳について記載する。
2号墳：短辺13m、長辺14mの方墳の東辺部に浅層崩壊によると見られる馬蹄形の凹みがある。
8号墳：短辺6m、長辺10mの方墳の東辺部に風倒木によるとみられる崩壊がある。
9号墳：原型が良く保存されており、侵食・崩壊の痕跡が明瞭には認められない。
10号墳：直径20mの円墳の東側斜面に浅層崩壊の跡と見られる馬蹄形の凹地とそれに続く押し出し地形が認められる。

山腹斜面のうち、北端部の谷壁斜面では、45~50度の急傾斜面を構成する呂羽山礫層において、幅10m、高さ8mにわたって浅い崩壊が生じている。崩壊斜面では湧水や表流水が見られないと、斜面上部には礫間の砂が洗い出された跡が認められる。東側の富山平野に面する山腹斜面には20~40m間隔で浅い谷地形が形成されているが、明瞭な崩壊跡や、滑落崖・段差・亀裂を伴う地すべり地形は見られない。

工. 遺跡の侵食・崩壊防止対策

次の2つの目的を達するため、遺跡および周辺斜面の侵食と崩壊を防止するための対策方法について検討する。

- ① 遺跡と周辺環境の保存
- ② 見学者の安全確保

オ. 侵食・崩壊の形態と原因のまとめ

調査地における遺跡の侵食・崩壊の形態と原因是次のようにまとめることができる。

(7) 遺跡周辺の基礎地盤における侵食と斜面崩壊

調査対象である遺跡は、いずれも富山平野西南部の河岸段丘面（段丘面IおよびV）上に位置し、基礎地盤は第四紀更新世の砂礫層（未固結）、および表層をなす厚さが2m以下の風成ロームである。

遺構のうち段丘崖および段丘を刻む谷の谷壁斜面に近接するものは一部が欠損しており、将来にわたって欠損部が拡大する恐れがある。勅使塚古墳・六治古塚墳墓、富崎墳墓群（1号墓、2号墓）にこのような欠損が生じている。なお富崎千里古墳群では、近年に生じた北端部斜面における崩壊の範囲が拡大・進行すると、遺跡群の一部に影響が及ぶ可能性がある。また千坊山遺跡では、切土

によって形成された急斜面の一部が崩壊する危険がある。斜面の侵食・崩壊の原因となる諸作用を列記する。

- a. 段丘崖下の河川による侵食に伴う斜面の不安定化
- b. 表流水や湧水による斜面の侵食と谷頭の後退
- c. 斜面表層の緩みの進行
 - ・斜面における風化の進行
 - ・隙間の砂の流出に伴う砂礫層の緩み
 - ・植物根の侵入による緩み(高木の風による揺れと風倒木による緩みを含む)
 - ・小型哺乳類の巣穴によるゆるみ

(4) 墳丘斜面の侵食・崩壊

墳丘は、河岸段丘の構成物である風成ロームと砂礫を用いて築造されている。墳丘斜面の侵食・崩壊の形態を列記する。

- a. 雨滴衝突による裸地部表層の侵食
- b. 表流水による表層の洗掘
- c. 樹木の根の侵入による緩み(風倒木を含む)
- d. 浅層崩壊

(5) 留意点

斜面地(墳丘斜面、山麓斜面)については、土が露出している箇所を中心に基礎地盤の侵食・崩壊が進むことが予測される。よって、遺構を適切に保護し災害を防止するため、早急に侵食・崩壊防止対策(斜面保護)を講ずる必要がある。その際、史跡の環境・景観を損ねないよう十分に配慮することが必要である。

力. 侵食・崩壊防止対策(斜面保護)における基本的な考え方

(「遺跡の斜面保護—遺跡の保存工学的研究」奈良文化財研究所・埋蔵文化財ニュース119を参照)
遺構(墳丘など)とその周辺基礎地盤の侵食・崩壊の原因となる作用を除去・抑制するため、以下の基本的な考え方へ従って斜面保護を行うことが必要である。

(7) 遺構としてのり面保護対策

- a. 遺構を損傷しない対策をとる。
- b. 植物の根が遺構に侵入しない対策をとる。
- c. ロックボルト打設などの支持工が不可欠の場合は、構造上の安定が図れる最低限の数量・規模に抑える。
- d. 遺構のり面の崩落を防ぐ予防的保護工である場合には、遺構本来の形状や植生を保持できること。
- e. 崩落した遺構のり面の復旧保護工である場合には、遺構本来の形状や植生を復元できること。
- f. 適正な維持管理のもとで、永続的のり面安定効果が期待できること。

(8) 遺跡周辺の基礎地盤としての斜面保護対策

- a. 適正な維持管理のもとで、永続的のり面安定効果が期待できること。
- b. 遺跡内の景観として適切な斜面景観が形成できること。

(9) 遺跡の斜面保護工実施に関する留意事項

遺跡内で斜面保護工を実施するにあたっては、遺跡への影響を考慮した施工計画が求められる。

また、工種の選定に加えて実施に伴う仮設計画も十分な配慮が必要である。斜面保護工の実施にあたっての原則的留意事項を以下に記す。

- 遺構を損傷しないこと。
- 遺跡の地形や植生を保持できること。
- 見学者・観光者に対する安全を完全に確保できること。
- 景観への影響に配慮すること。
- 仮設を含む資材・機材の搬入経路が確保できること。

キ. 斜面保護工の設計方針案

斜面保護工の設計は、次の原則に注意しながら進める。

- (1) 斜面及びその周辺の現況と気象条件、過去の実施例などに基づき、安定性、永続性、施工性、環境、景観、経済性、維持管理などの総合的な検討を行う。
- (4) 施工目標を念頭に置き、保護目的、利用目的を常に考慮する。
- (9) 斜面崩壊は水が原因で発生することが多い。斜面への水の流入を防ぐとともに、流入した水を迅速かつ安全に排出する。
- (12) 斜面保護の工種は、落石の危険がないことを確認したうえで、植生工、植生工と構造物工の併用、構造物工のいずれを適用するかを検討する。

工法選定の流れを図 27 に示す。

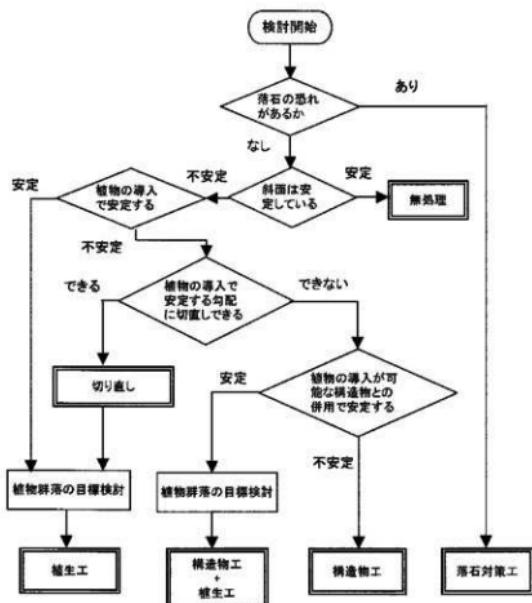


図 27 斜面保護工選定の考え方及び手順

(「のり面保護工 設計・施工の手引き」社団法人農山村文化協会、1990 を参照)

ケ. 斜面保護工法の選定案

調査対象の各遺跡について斜面安定対策工法の概略選定案を表3にまとめる。詳細な工法と施工方法を決定するためには、遺跡の保存・周辺整備の全体計画を策定した後に、遺構とその周辺斜面を含む範囲の測量を行うことが必要である。なお、千坊山遺跡を除く全遺跡に共通する問題点には、高木の転倒や竹・樹木の根の進入により遺構・遺跡に影響を及ぼす恐れが挙げられる。

表3 斜面安定対策工法の概略選定案と問題点

遺跡名	斜面種別	侵食・崩壊形態	侵食・崩壊の原因	工 法 案	問題点
王塚古墳	遺構のり面	浅層崩壊・洗掘	雨水侵食・雨水浸透	盛土修復・植生工など	排水対策
勤使塚古墳	遺構のり面	浅層崩壊・洗掘	雨水侵食・雨水浸透	盛土修復・植生工など	排水対策 排水対策
	遺跡内斜面	浅層崩壊・洗掘	雨水侵食・表層のゆるみ	植生工など	
千坊山遺跡	遺跡内斜面	張り出し斜面の崩壊	風化と緩みの進行	構造物工・植生工など	排水対策
向野塚墳墓	遺構のり面	(人為改変)	—	盛土修復・植生工など	—
六治古墳墳墓	遺構のり面	崩落による欠損	基礎地盤の崩壊	構造物工・植生工など	
	遺跡内斜面	浅層崩壊・洗掘	河川による洗掘・表層の緩み	構造物工・植生工など	斜面高24m・護岸対策
富崎 塚 墳 墓 群	富崎2号 墓	遺構のり面	崩落による欠損	基礎地盤の悪化	構造物工+植生工など
	富崎3号 墓	遺跡内斜面	浅層崩壊	表層のゆるみ・雨水侵食	構造物工+植生工など 斜面高40m
富崎 千 塚 古 墳 群	2号墳	遺構のり面	浅層崩壊・洗掘	雨水侵食・雨水浸透	植生工など
	8号墳	遺跡内斜面	浅層崩壊	表層のゆるみと雨水侵食	盛土修復・構造物工+植生工など
	10号墳	遺構のり面	浅層崩壊	表層のゆるみと雨水侵食	盛土修復・植生工など
	北端斜面	遺跡内斜面	浅層崩壊	表層のゆるみと雨水侵食	台地面の排水対策

ケ. 参考資料

簡易動的コーン貫入試験による斜面調査結果

基礎地盤の崩壊によって墳丘の一部に欠損が生じ、あるいは欠損の恐れがある箇所のうち、富崎塚墓群2号墓・3号墓及び勤使塚古墳に近接する自然斜面において、表土・緩み層の厚さを知ることを目的として簡易動的コーン貫入試験を実施した。

(7) 試験方法

(i) 試験結果

試験で得られた貫入抵抗値（N d 値）と地山の地質の観察結果を併せ判断すると、N d 値によって次のように地質を区分できる。

地質区分	表土	N d ≤ 5 (一部盛土を含む)
	風化砂礫層・緩み層	30 > N d > 5
	砂礫層	N d ≥ 30

各測定地点における表土・緩み層の厚さを表4に示す。また、各側線における地質断面をP41図24、P43図25・図26に示す。

表4 表土・緩み層の厚さ

位置	地点番号	①表土厚 (m)	②風化層厚 (m)	①+② (m)
勅使塚古墳東側 山腹斜面 (P47 図 20)	N.O.1	1.7	0.3	2.0
	N.O.2	0.8	0.1	0.9
	N.O.3	0.7	0.9	1.6
富崎2号墓北側 山腹斜面 (P48 図 21)	N.O.1	2.0	0.6	2.6
	N.O.2	0.8	0.4	1.2
	N.O.3	0.7	0.3	1.0
富崎3号墓北西側 谷壁斜面 (P48 図 22)	N.O.1	0.8	1.0+	1.8+
	N.O.2	0.3	0.7	1.0
	N.O.3	0.8	0.0	0.8

(6) 考察

斜面崩壊あるいは雨水侵食を受けやすい表土と緩み層の厚さは、斜面肩部 (N.O.1) で 2m 前後、斜面上 (N.O.2, N.O.3) で 0.9~1.6m である。また特に崩壊・侵食を受けやすい表土層は斜面上で (N.O.2, N.O.3) 0.3~0.8m である。これらの表層土の下には縮まった砂礫層が分布している。

表層土が侵食を受けたり崩壊した跡に露出した砂礫層は、雨水による隙間の砂の洗掘、植物根の侵入などの諸作用により時間の経過とともに緩い表層土に変化するものと考えられる。

※表層土：表土 + 風化層

(2) 植生調査

ア. 調査方法

(1) 調査方法

文献調査および現地調査により、下記項目を把握した。

(4) 文献調査

調査区域周辺における植物関係の文献として、以下を参照した。

表5 参考文献

著作者	発行年	文献名	出版元
大田 弘 小路 登一 長井 真隆	1983	富山県植物誌	廣文堂
環境庁編	1984	第3回自然環境保全基礎調査（植生調査）現存植生図「八尾」	財団法人日本野生生物研究センター
富山市科学文化センター	1994	富山市吳羽丘陵自然環境調査報告	富山市科学文化センター
富山県	2002	富山県の絶滅のおそれのある野生生物一レッドデータブックとやま－	富山県
富山市科学文化センター	2006	里山（富山県中央部）の自然環境調査報告書II 植物・動物・その他編	富山市科学文化センター

(9) 現地調査

指定地およびその周辺部を含む調査区域内を対象として、植生および植物相の現況を把握するため、夏季1回（8月上旬に3日間）・秋季1回（9月下旬に2日間）の計2回（計5日間）の現地調査を行った。

対象とする植物は、野生状態でみられる維管束植物とした。ただし、植林されている樹種は栽培下にあるが、植物群落として広大な面積を占め、調査区域周辺の植生に大きな影響を与えており、これらの樹種は調査記録に含めた。

イ. 調査項目

(1) 植生分布

文献および現地調査結果に基づき、調査区域ごとの植生分布（植物種の分類・出現種数、相観による植物群落（植生）の分布状況等）について把握した。

(4) 貴重種等の分布と生育環境

「(2)-イ-(1)植生分布」の結果に基づき、文献（表5参照）を参照し、調査区域内にみられる貴重な植物群落および植物種等を調査し、その分布および生育環境について把握した。

ウ. 調査結果

(1) 植物相

調査区域全城において、植生調査時に記録された種は97科374種であった。（P50表6参照）

富山県内で記録されている植物種数は約2,500種類であり、調査区域全域においてはその15%程度の種類の植物が生育することになる。

調査区域ごとの記録については、「(2)-オ 各調査区域の概要」において述べる。

表6 調査区域全域での記録植物種数

分類群		科(数)	種(数)
シダ植物		10	31
種子植物	裸子植物		4
	被子植物	単子葉類	
		双子葉類	離弁花類 合弁花類
合計		97	374

※ 種のほか、種内分類群（変種・変種等）が区別されている場合にはそれぞれを1種類として数え、出現種数に算入してある

(イ) 植生の概要

調査地域は富山市西南部の丘陵地に位置し、周辺は農用地および住宅地・公共施設等となっている。植生帯は、全域が暖温帯のヤツツバキクラス域に属する。

調査区域の植生はスギの植林地である針葉樹林が大部分を占め、部分的にコナラ等の落葉広葉樹を中心とした二次林である広葉樹林となっている。一部に、モウソウチクの人工林や、ススキ草原などの野草地も見られる。また、調査地域内には畑地などの農用地や作業用道路・墓地等の人工物としての上地利用も散見される。

(ロ) 植生分布

調査区域の植生は、土地利用状況および現地調査結果に基づき、全調査区域について9分類に区分した。(表7参照)

表7 植生区分一覧

相概	区分名	相概	区分名
森林植生	コナラ二次林	草本植生	ススキ草原
	スギ植林		畠地跡雜草群落
	モウソウチク林	その他	畠地
	ニワウルシ植林		牧草地
			裸地・人工物

各植生区分の特徴は次の通りである。

a. コナラ二次林

代償植生である二次林として成立したもので、王塚古墳、勅使塚古墳、六治古塚墳墓、千坊山遺跡、富崎墳墓群1・2号墓において見られる。特に勅使塚古墳ではその大部分が広葉樹林となってを占めている。

代償植生である二次林として成立したもので、落葉広葉樹高木であるコナラが優占しており、高木・亞高木にクリ・ウワミズザクラ、低木にヒサカキ・ヒメアオキ・ムラサキシキブ・ガマズミなどが見られる。その他、ブナクラス域に多くあるキタコブシ・ヤマモミジ、日本海側に分布域があるキンキマメザクラ・オオバクロモジなど多様な種が生育している。

b. スギ植林

王塚古墳を除き、調査区域の大部分がスギの植林地となっている。針葉樹林の全域がスギ植林地であり、調査区域および周辺森林の大部分を占めている。勅使塚古墳、向野塚墳墓、六治古塚墳墓、千坊山遺跡、富崎千里古墳群南群において見られる。特に富崎千里古墳群ではほぼ全域、千坊山遺跡では周辺の斜面のほぼ全域および斜面上部の平坦部で一部を占めている。広い範囲が針葉樹林となっている。

全体的に間伐や枝打ちなどの育成管理の行き届かない林となっており、平坦なところではスギの樹冠同士が接し林内が暗くなっているため、亜高木はほとんど育成せず、林床にヒメアオキ・ジュウモンジシダなどの耐陰性植物が生育している。斜面部については、樹冠が林床を覆っていないところでニワウルシなどの広葉樹の亜高木・低木の生育がみられる。

また、林縁部は日の射しみ具合や土壤の乾湿などの生育環境が多様であるため、オニドコロ・ヤマノイモといったつる植物やウツギ・ヤマハギなどの広葉樹低木、イネ科・キク科・シソ科などの草本類が、それぞれに適した生育環境に繁茂している。

c. モウソウチク林

調査区域の一部にモウソウチク林が見られる。向野塚墳墓では、一部にスギが入ったモウソウチクの単相林となっている。富崎墳墓群3号墓では針葉樹（スギ）と竹との混交林、千坊山遺跡では針葉樹（スギ）および広葉樹（主にオニグルミ・ヒメアオキなど）と竹との混交が進んだ状態となっている。

モウソウチクは、スギと同様に奥羽丘陵地域において過去に植林の記録がある樹種であり、元来スギ植林地等であると見られることからあったところに、周辺に植林されたモウソウチクが侵入し混交が進んだと考えられる。モウソウチクが安定的に優占しているため、林内の生育環境は単純であり、周辺の植生と比較して生息種数が少ない。

また、富崎墳墓群3号墓では、林床の草本層に県レッドデータブック希少種であるササクサが群落状に出現している。

d. ニワウルシ植林

千坊山遺跡において、ニワウルシ（別名；シンジュ）の林が見られる。

ニワウルシは中国原産の落葉広葉樹の高木で、公園・街路樹として利用されるほか、富山県内においては戦時に養蚕用（神樹並と呼ばれた）に植栽されたといわれる。

特に千坊山遺跡では、木立や林状に密生している樹林地を形成しており、ニワウルシ植林として区分した。

経緯的にニワウルシは自生種ではなく植栽または逸出したものであるため、植物分布上の貴重な植物群落としてあげられないが、地域の近代史を物語る植生として注目される植物群落に位置づけられる。

e. ススキ草原

千坊山遺跡において、クズやススキの草原が見られる。植物遷移の上から見ると、ススキの株が成長するのに時間がかかるため、ススキ草原は草原としてほぼ最終段階に当たる。ススキ草原を放置すれば先駆的な樹木が侵入し、次第に樹林へと変化していくものと考えられる。

f. 烟地跡雜草群落

王塚古墳、六治古塚墳墓、千坊山遺跡、富崎墳墓群1・2号墓、富崎千里古墳群において、調査区域

の一部に見られる。

樹木のない平地・緩斜面部や林縁部に位置し、その多くは定期的に草刈りなどの維持管理がなされている土地で、セイタカアワダチソウ・ヨモギなどのキク科植物やヤハズソウ・シロツメクサなどのマメ科植物、ミズヒキ・ミゾソバなどのタデ科植物、アキノエノコログサ・スズメノカタビラなどのイネ科植物といった耕作放棄地などで多く見られる草本が生育しており、相観的に畑地跡雜草群落に位置づけられる。

また、千坊山遺跡の畑地跡雜草群落内では県レッドデータブック希少種であるササクサが出現している。

g. 畑地

向野塚墳墓、千坊山遺跡の一部に見られる。

野菜類や果樹といった栽培種以外に、雑草としてメヒシバ・カタバミなどの草本が生育する。また、十分に手入れされていない境界部や耕作放棄地にはカラスウリ・オニドコロといったツル性植物の生育が見られる。

h. 牧草地

富崎墳墓群1・2号墓が牧場内に位置しており、指定地周辺に牧草地が見られる。

i. 裸地・人工物

六治古塚墳墓、千坊山遺跡、富崎千里古墳群に見られる。

宅地の敷地内の空き地や道路・墓地等の人工物、地面が露出している裸地が調査区域内に一部見られる。特に富崎千里古墳群については、北側急傾斜地の一部に地盤がむき出しになり崩落している崖地がある。

工. 貴重種の分布と生育環境

(1) 貴重な植物群落

貴重な植物群落は以下の選定基準に従って選定した。

A：国および富山県指定の天然記念物の植物群落

B：「富山県の絶滅のおそれのある野生生物一レッドデータブックとやまー」(富山県・2002年)に記載されている特定植物群落

C：「第2回自然環境保全基礎調査 動植物分布図 富山県」(環境庁・1981年)に記載されている特定植物群落

D：「第3回自然環境保全基礎調査(緑の国勢調査)特定植物群落調査報告書(追加調査・追跡調査)日本の重要な植物群落II 北陸版」(環境庁・1988年)に記載されている特定植物群落

E：「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物一レッドデータブックー植物I(維管束植物)」(環境庁・2000年)に記載されている絶滅のおそれのある地域個体群

その結果、調査区域近傍では、Bに該当する山本熊野社のユズリハ群落が挙げられるが、調査区域内および周辺には特に貴重な植物群落の分布はなかった。

(4) その他注目される植物群落

植生分布上貴重と言えないが、植物群落として注目されるものとして、ニワウルシ植林があげられる。

ニワウルシ植林は、千坊山遺跡に見られる植生で、ニワウルシの高木または亞高木の木立やシュー

ト（伐採後の根からの再生）による樹林からなる。ニワウルシは中国原産の落葉広葉樹の高木で、公園・街路樹として利用されるほか、富山県内においては戦時に養蚕用（神樹蚕と呼ばれた）に植栽されたといわれる。自生種ではなく植栽または逸出したものであるため、植物分布上の貴重な植物群落としてあげられないが、地域の近代史を物語る特徴的な植生として注目される植物群落に位置づけられる。

(4) 貴重な植物種

今回の現地調査で確認された種のうち、以下の基準で貴重な植物種を選定した。

A：国および富山県指定の天然記念物の個体植物

B：「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物一レッドデータブック植物編（維管束植物）」（環境省・2000年）に記載されている絶滅のおそれのある地域個体群

C：「富山県の絶滅のおそれのある野生生物一レッドデータブックとやまー」（富山県・2002年）に記載されている植物種

その結果、AからBについては該当なし、Cに該当する植物種としてササクサが確認された。

ササクサの選定理由・県内の分布状況は、次の通りである。

選定理由：生育地が限られており、個体数も少ない。平地や丘陵地に残存する照葉樹の林の整備により生育地が消滅する危険性がある。

県内の分布状況：滑川市南部の平地、上市町南部の丘陵地、富山市西部の丘陵地、富山市（旧山田村南部）の丘陵地。

（富山県の絶滅のおそれのある野生生物一レッドデータブックとやまーの記載より）

ササクサの確認された調査区域は、次の2区域であった。生息状況についても併記する。

・千坊山遺跡 野草地内 ((2)-オ P61図30参照)

生息状況：夏季調査時に1株確認したが、秋季調査時には未確認である。なお、秋季調査時は野草地全体に草刈りされた痕跡が残っていた。

・富崎墳墓群3号墓 混交林内 ((2)-オ P63図32参照)

生息状況：区域内に個体数で約50株前後のササクサが生育している。（写真3 参照）



写真2 ササクサ(中央の筒状の葉を持つ草本) 2株



写真3 ササクサの生育状況 群生地点・30株程度

(c) 分布上特筆すべき種

今回の現地調査で確認された種のうち、以下の基準で分布上特筆すべき種を選定した。ただし、貴重種（(2)-エ-(イ)で記載された種）として挙げられているササクサ、および栽培されているものは除く。

A：富山県植物誌（大田ほか・1983年）のコメント文で「ごくまれ」あるいは「まれ」の記載のあるもの

B：県内の分布状況から考えて、その種の生息が貴重であると考えられるもの

その結果、次の植物種が分布上特筆すべき種として確認された。（表8）

表8 分布上特筆すべき種

植物名	科名	富山県 植物誌	その他
カニクサ	カニクサ科	まれ	国内分布の北限に近い
オオヒメワラビ	オシダ科	まれ	
ウバユリ	ユリ科	まれ	
ヤブラン	ユリ科	まれ	
キツネノカミソリ	ヒガンバナ科	まれ	
アケボノシュスラン	ラン科		生育標高が低い
メヤブマオ	イラクサ科	まれ	
イラクサ	イラクサ科	まれ	
ミヤマハコベ	ナデシコ科	まれ	
ヤブツルアズキ	マメ科	まれ	
ヒメミカンソウ	トウダイグサ科	まれ	
ヤマハゼ	ウルシ科	まれ	
イソノキ	クロウメモドキ科	まれ	
ケヤマウコギ	ウコギ科	まれ	
カクレミノ	ウコギ科		国内分布の北限に近い
カラタチバナ	ヤブコウジ科	まれ	
ヒメシロネ	シソ科	まれ	
イガホオズキ	ナス科	まれ	
キツネノマゴ	キツネノマゴ科	まれ	
サジガンクビソウ	キク科	まれ	
サワギク	キク科	ごくまれ	

これらの種については、「(2)-オ 各調査区域の概要」において確認の有無等を記載する。

才. 各調査区域の概要

各調査区域における植生の概要および分布情況、貴重種の分布と生息環境について、以下に述べる。

(7) 王塚古墳

a. 植生の概要および分布状況

王塚古墳では、51科112種の植物種が確認された。

調査区域の植生分布は p59 図 28 の通りである。

植生分布の状況は、墳丘上はコナラなどの落葉広葉樹が疎に生えるコナラ二次林となっており、古墳周辺にオオヂドメ・ハコベなどの背の低い草本が優占する畠地跡雜草群落がみられる。また、寺社の植栽に使われているウラジロモミや花木であるヤマザクラがあり、これらは植栽によるものと考えられる。調査区域および周辺部は、秋季調査時に草刈りの痕跡が見られるなど、定期的な維持管理がなされており、ベンチ等の公園施設はないが周辺住民の憩いの場として利用されているようである。

b. 貴重種の分布と生息状況

貴重な植物群落および植物種は確認されていない。

分布上特筆すべき種として、ヤブランが出現した。ヤブランは、古墳部のコナラ二次林林床で確認された。県内にまれに生育する。

(イ) 勅使塚古墳

a. 植生の概要および分布状況

勅使塚古墳では、61科 156種の植物種が確認された。

調査区域の植生分布は p60 図 29 の通りである。

植生分布の状況は、一部（古墳北西～西側斜面）にスギ植林が見られるが、古墳を含む大部分はコナラ二次林となっている。調査区域は富山市婦中ふるさと自然公園内に位置し、古墳北西側の針葉樹林部分から古墳まで木道が整備されており、古墳部についても定期的な維持管理がなされている。古墳から下の斜面部については、全体的に密な樹林地となっており、林床にはヒメアオキ・ムラサキシキブなどの低木・ベニシダ・ショウジョウバカマなどの草本が繁茂している。

b. 貴重種の分布と生息状況

貴重な植物群落および植物種は確認されていない。

分布上特筆すべき種として、ヤブラン・アケボノシュスラン・イソノキ・カラタチバナ・サジガンクビソウが出現した。ヤブラン・アケボノシュスランは斜面のスギ植林林床、イソノキは斜面下部のスギ植林低木層、カラタチバナ・サジガンクビソウは墳丘上のコナラ二次林林床で確認された。それぞれ県内にまれに生育する。

(ガ) 千坊山遺跡

a. 植生の概要および分布状況

千坊山遺跡では 77科 222種の植物種が確認された。

調査区域の植生区分は p61 図 30 の通りである。

全調査区域の中で最も面積が広く、植生区分も多様となっている。森林植生の大部分がスギ植林である。戦時中に養蚕用として植栽されたといわれるニワウルシ（別名：シンジュ）が多く見られ、樹林地化している（ニワウルシ植林）。草本植生では、スキ草原が広く見られる。一部が畠地や農道・墓地等（裸地・人工物）として利用されている。

b. 貴重種の分布と生息状況

貴重な植物群落は確認されていないが、注目される植物群落としてニワウルシ植林がある。

ニワウルシ植林は、斜面上の平坦部に木立やシート（伐採後の根からの再生）による小規模の樹林が点在している。

貴重な植物種として、ササクサが出現した（県レッドデータブック希少種）。位置は野草地内のイノコズチ・イヌタデなど膝丈程度の高さの草本中に 1株確認された。ただし、秋季調査時には確認されていない（草刈りの跡あり）。

分布上特筆すべき種として、以下の 11 種が出現している。

カニクサ：スギ植林の林縁において確認。県内にまれに生育。分布の北限に近い。

オオヒメワラビ：スギ植林の林内・ニワウルシ林の林内において確認。県内にまれに生育。

ウバユリ：スギ植林の林内において確認。県内にまれに生育。

ヤブラン：スギ植林の林内において確認。県内にまれに生育。

キツネノカミソリ：スギ植林の林縁および林内において確認。県内にまれに生育。

メヤブマオ：スギ植林の林縁において確認。県内にまれに生育。

ミヤマハコベ：スギ植林の林縁において確認。県内にまれに生育。

ヒメミカンソウ：スギ植林の林縁において確認。県内にまれに生育。

ケヤマウコギ：スギ植林の林縁において確認。県内にまれに生育。

カクレミノ：スギ植林の林内において確認。分布の北限に近い。

イガホオズキ：スギ植林の林内において確認。県内にまれに生育。

キツネノマゴ：スギ植林の林内において確認。県内にまれに生育。

カラタチバナ：スギ植林の林内において確認。まれに生育。園芸採取の対象。

(e) 六治古墳墳墓

a. 植生の概要および分布状況

六治古墳墳墓では 44 科 88 種の植物種が確認された。

調査区域の植生区分は p62 図 31 の通りである。

植生分布の状況は、墳丘上はスギ植林の針葉樹林となっており、斜面など周辺部はコナラ二次林となっている。また、住宅側は畑地跡雜草群落となっており、道路～侵入路にかけて一部地面が露出した低い草本部分があるが、墳丘付近の斜面部では人手が入らないため、クズに覆われセイタカアワダチソウなどの背の高い草本が優占している。また、墳丘東側の針葉樹林は倒木などのため樹冠が形成されておらず、クズ・セイタカアワダチソウなどが繁茂している。

b. 貴重種の分布と生育状況

貴重な植物群落および植物種は確認されていない。

分布上特筆すべき種として、ヤマハゼが出現した。ヤマハゼは、墳丘部のスギ植林林床にみられた。県内にまれに生育する。

(f) 向野塚墳墓

a. 植生の概要および分布状況

向野塚墳墓では 39 科 61 種の植物種が確認された。

調査区域の植生分布は p61 図 31 の通りである。

植生分布の状況は、調査区域および周辺は全体的に平坦な地形であり、墳丘上は、北側がモウソウチク人工林である竹林、南側が畑地となっている。また、後方部にはスギの高木が植えられている。

b. 貴重種の分布と生育状況

貴重な植物群落および植物種、分布上特記すべき種は確認されていない。

(g) 富崎墳墓群 1・2 号墓

a. 植生の概要および分布状況

富崎墳墓群 1・2 号墓では 52 科 120 種の植物種が確認された。

調査区域の植生区分は p63 図 32 の通りである。

植生の分布状況は、調査区域内の南側および周辺が牧草地となっており、墳丘部は明るく日が射す

ため、セイダカアワダチソウ・クズなどが繁茂する畠地跡雑草群落となっている。北側斜面は一部植林されたスギが生育しているが、全体の相観としてエノキ・コナラ・ホウノキなどのコナラ二次林となっている。

b. 貴重種の分布と生息状況

貴重な植物群落および植物種は確認されていない。

分布上特筆すべき種として、イラクサ・ヤブツルアズキ・カラタチバナ・イガホオズキが出現した。イラクサ・ヤブツルアズキ・イガホオズキは畠地跡雑草群落内、カラタチバナはコナラ二次林林床にて確認された。それぞれ県内にまれに生育する。

(e) 富崎墳墓群3号墓

a. 植生の概要および分布状況

富崎3号墓では66科138種の植物種が確認された。

調査区域の植生区分はp63図32の通りである。

植生の分布状況は、スギの植林地に隣地のモウソウチクが侵入してきたモウソウチク林が大部分を占めている。道路側に一部林縁から続くオニドコロなどのツル性草本やオカトラノオなどの畠地跡雑草群落となっている。

b. 貴重種の分布と生息状況

貴重な植物群落は確認されていない。

貴重な植物種として、ササクサが出現している（県レッドデータブック希少種）。位置は、墳丘および周辺に広く見られ、あわせて50株程度が生育している。（図32中の赤丸部）。30株程度の群落状の生育地もみられ、本州常緑広葉樹林の林内および林縁に生息する種であるが、現時点でササクサに良好な生育環境と考えられる。県レッドデータブックには、生存の脅威として森林伐採（林床の整備）が挙げられており、保全対策としては適切な管理による生育地の保護が求められている。

分布上特筆すべき種として、オオヒメワラビ・イラクサ・ヤブラン・ヤマハゼ・ケヤマウコギが出現した（すべてモウソウチク林林床にて確認）。それぞれ県内にまれに生育する。

(f) 富崎千里古墳群

a. 植生の概要および分布状況

富崎千里古墳群では72科193種の植物種が確認された。

調査区域の植生区分はp64図33の通りである。

植生の分布状況は、大部分がスギ植林となっている。南西側にある駐車場に隣接した斜面地と林縁部にススキ・セイタカアワダチソウなど背の高い草本の畠地跡雑草群落が見られる。畠地跡雑草群落内にはアカメガシワ・ヌルデなどの先駆性低木も多く見られる。また、北側の急傾斜地に地盤が露出し崩落がみられる崖地がある（裸地・人工物として区分）。

b. 貴重種の分布と生息状況

貴重な植物群落および植物種は確認されていない。

分布上特筆すべき種として、次の10種が出現した。

カニクサ：スギ植林の林内・林縁および畠地跡雑草群落にて確認。県内にまれに生育。北限に近い。

オオヒメワラビ：スギ植林の林内および畠地跡雑草群落にて確認。県内にまれに生育。

ウバユリ：スギ植林の林内および畠地跡雑草群落にて確認。県内にまれに生育。

メヤブマオ：スギ植林の林縁および畠地跡雑草群落にて確認。県内にまれに生育。

ヤマハゼ：スギ植林の林縁および畠地跡雑草群落にて確認。県内にまれに生育。

イソノキ：スギ植林の林縁にて確認。県内にまれに生育。

ケヤマウコギ：畑地跡雑草群落にて確認。県内にまれに生育。

ヒメシロネ：畑地跡雑草群落にて確認。県内にまれに生育。

キツネノマゴ：スギ植林の林縁および畑地跡雑草群落にて確認。県内にまれに生育。

サワギク：畑地跡雑草群落（北側斜面下の陰湿性地）にて確認。県内にごくまれに生育。

力. 留意点

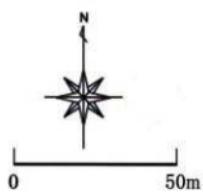
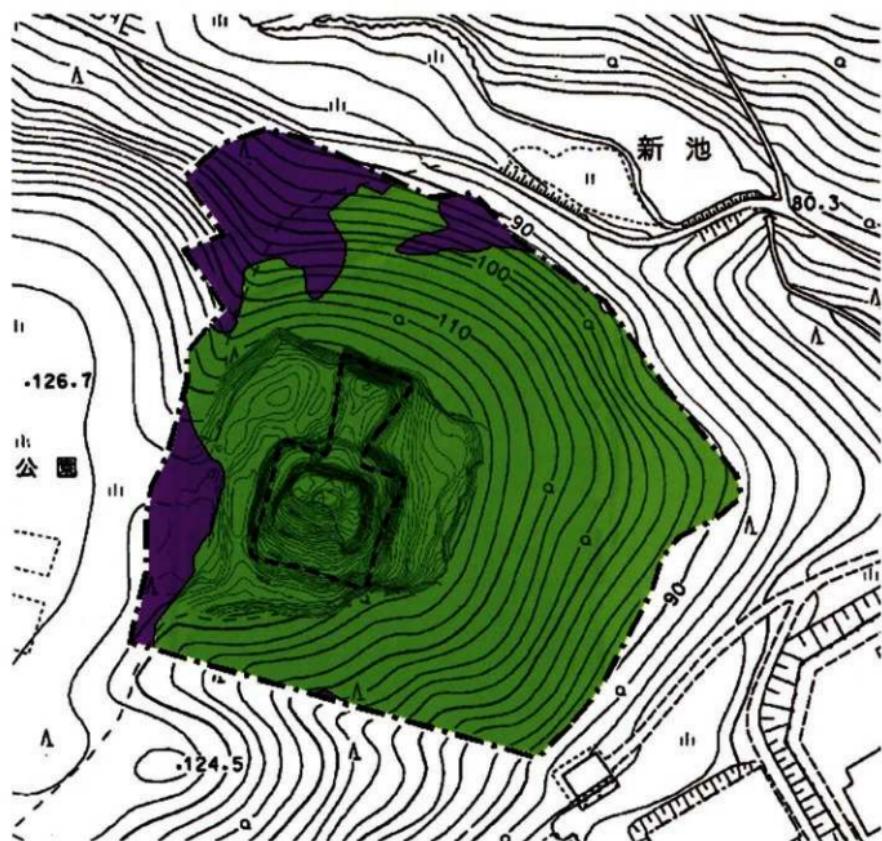
「富山県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブックとやま—」(2002, 富山県) に登載されるササクサが確認された千坊山遺跡北側、富崎墳墓群3号墓では、植生自然度の低下を最小限にとどめる配慮が必要である。

樹木については、斜面保護や環境への配慮、自然との調和を図るため、安易な大規模伐採は避けるべきである。

なお、千坊山遺跡、六治古塚墳墓、富崎墳墓群などに台風被害による倒木が多く見られる。向野塚墳墓では竹林が繁茂しており、遺構保護、景観、安全面などに課題が残る。



図28 王塚古墳 植生図 (1 : 600)



凡例	
I. 二. 1	史跡指定範囲
■	コナラ二次林
●	スギ植林

図29 勅使塚古墳 植生図 (1 : 1,500)



凡例			
	コナラ二次林		史跡指定範囲
	スギ植林		畠地雜草群落
	ニワウルシ植林		畠地
	モウソウチク林		裸地・人工物
	スキ草原		ササクサ(確認位置)

図30 千坊山遺跡 植生図 (1 : 2,000)

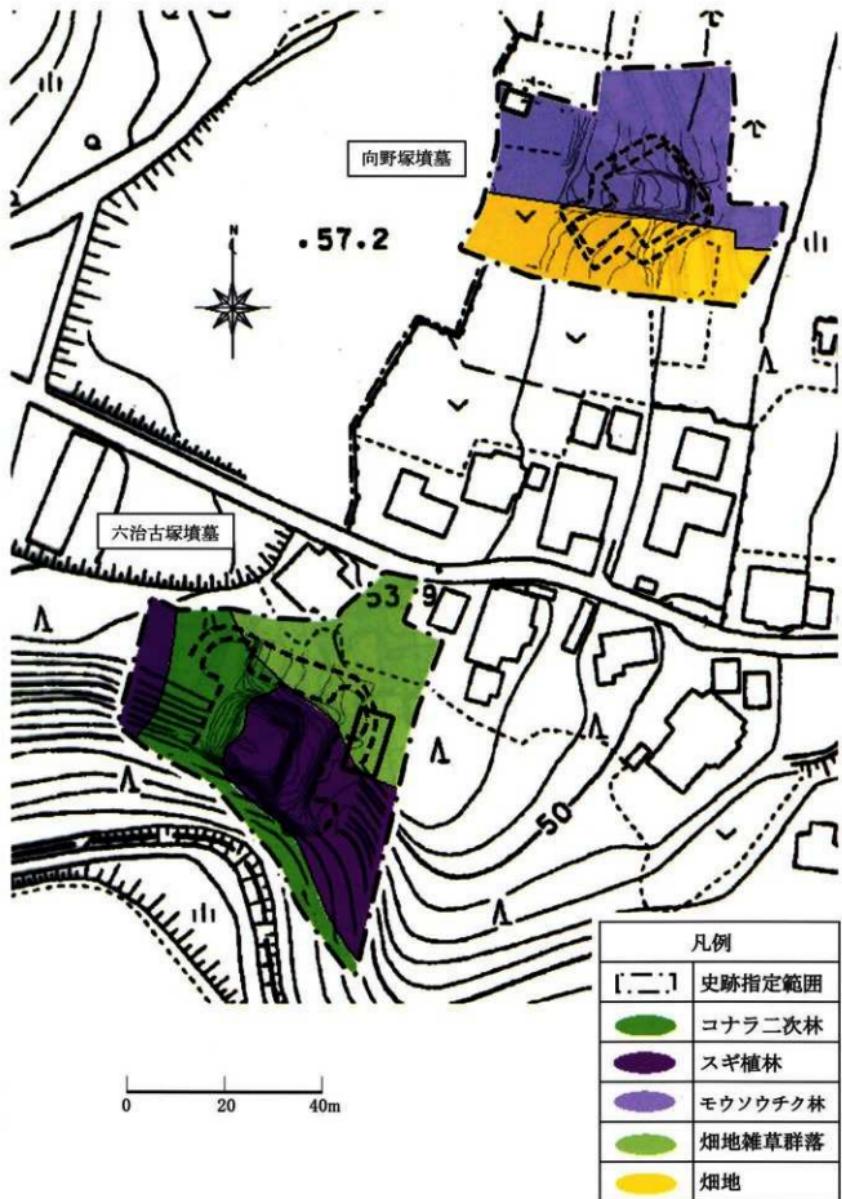


図31 六治古塚墳墓・向野塚墳墓 植生図 (1 : 1,000)

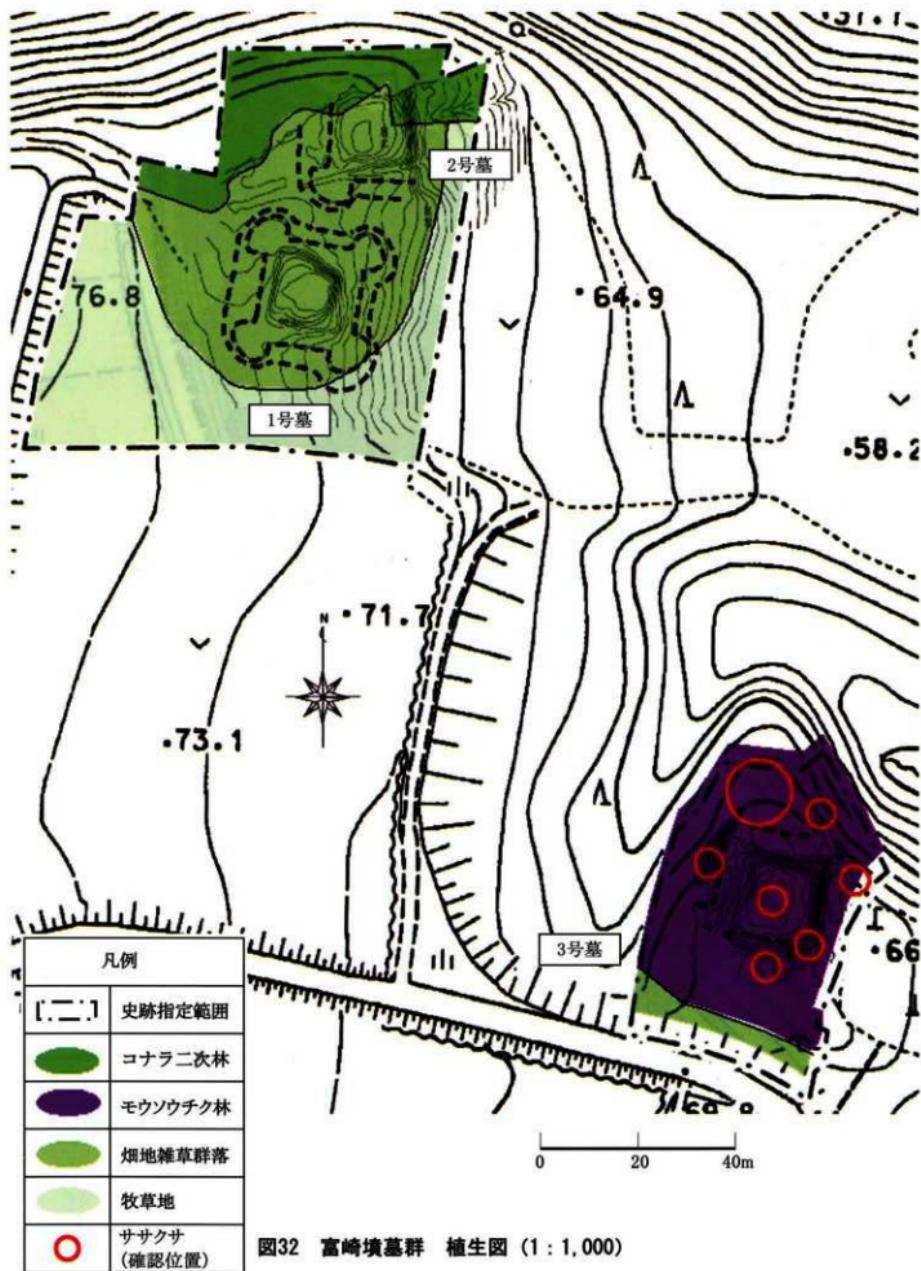


図32 富崎墳墓群 植生図 (1 : 1,000)

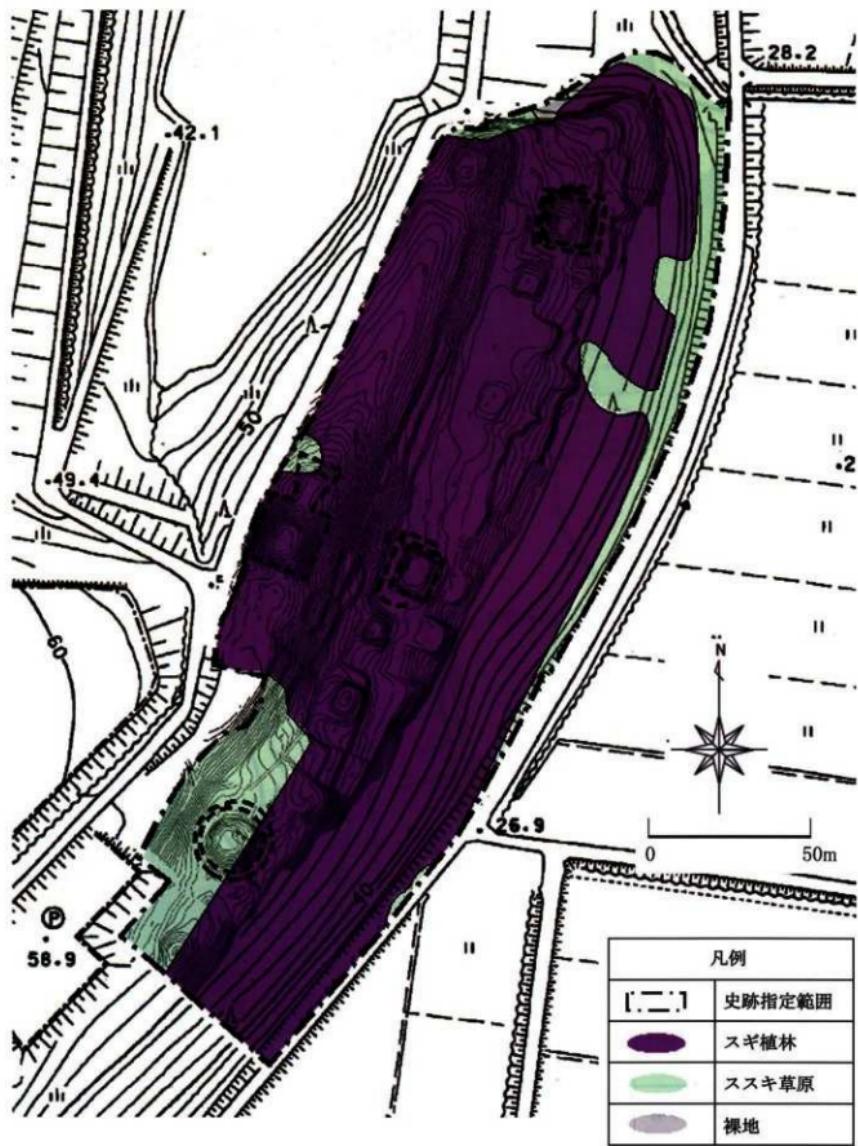


図33 富崎千里古墳群（南群） 植生図 （1 : 1,500）

(3) 古植生調査

ア. 鏡坂墳墓群の花粉分析

(7)はじめに

富山県富山市婦中町外輪野に所在する鏡坂墳墓群は、山田川左岸の河岸段丘南縁辺部に立地している。本墳墓群は、弥生時代終末期に築造された大小2基の四隅突出型墳丘墓から構成されている。

本報告では、鏡坂墳墓群1号墓の西側周溝内より採取された土壌を対象に花粉分析を行い、当時の古植生検討の一助とする。

(4) 試料

試料は、鏡坂墳墓群1号墓西側の周溝覆土より採取された土壌試料4点(No.1:④層-A、No.2:⑤層-A、No.3:⑤層-B、No.4:⑤層-C)である。試料の観察によれば、いずれも褐色~暗褐色を呈する砂や粘土が混じるシルト質の土壌である。

(5) 分析方法

試料約10gを秤り取り、水酸化ナトリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.3)による有機物の分離、ブッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9,濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、同定・計数結果の一覧表として示す。

(6) 結果

結果を表9に示す。花粉化石は、いずれの試料も保存状態が悪くほとんど検出されない。僅かに検出された花粉化石は、木本類では、モミ属、マツ属、スギ属、クマシデ属-アサダ属、クリ属-シノキ属、コナラ属コナラ属、ニレ属-ケヤキ属等が認められる。一方、草本類では、イネ科、セリ科、キク亞科が認められるのみである。

(7) 寄考

鏡坂墳墓群1号墓周溝覆土の花粉分析の結果、いずれも花粉化石の保存状態が悪く、また検出数も少なかった。本墳丘墓の立地や分析試料とした土壌の状況を考慮すると、周溝内は好気的環境にあったと推測され、花粉化石は好気的な環境下では風化・消失する(中村, 1967など)とされていることから、大部分はこれらの影響を受け分解・消失していると考えられる。また、花粉化石は、風化に対する耐性に差があり、シダ類胞子や針葉樹花粉は広葉樹花粉と比べ、風化に対する耐性が強いと考えられている(徳永・山内, 1971 三宅・中越, 1998など)。このことから、各試料から少量検出された化石も、本来の植生を反映しておらず、計測数を増やしても結果的に風化に耐性のある種類が高率となることが推定される。このように、検出された種類を定性的に扱うことは可能だが、定量的に扱うことは難しいため、各分類群の割合を図示することは控え、結果表の表示に留めている。

富山平野における古植生に関する資料は、神通川及び常願寺川等が形成した扇状地先端部の低地や潟

表9 花粉分析結果

種類	試料番号	4層			5層
		A	A	B	C
木本花粉					
モミ属		-	1	-	-
マツ属	3	-	-	-	-
スギ属		-	1	-	-
ヤマモモ属	1	-	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	1	-	-	-	-
クリ属-シノキ属	9	1	-	-	1
ブナ属		-	-	1	-
コナラ属コナラ属		-	1	1	-
ニレ属-ケヤキ属	1	-	-	-	-
ブドウ属		-	1	-	-
タニウツギ属		-	-	1	-
草本花粉					
イネ科		7	3	1	-
セリ科		1	-	-	-
キク亞科		1	2	1	-
不明花粉		3	-	-	2
シダ類胞子					
シダ類胞子		14	6	3	-
合計		15	5	3	1
木本花粉		9	5	2	0
草本花粉		3	0	1	2
不明花粉		14	6	3	0
シダ類胞子		38	16	8	1

埋積平野で泥炭層が発達した射水平野において蓄積されつつある。弥生時代頃の射水平野及びその周辺の古植生は、下村加茂遺跡の調査成果(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1999, a, b)等からハンノキ等を主とする湿地林等の植生景観が推定されている。ただし、本遺跡東側の沖積地は、地形的にハンノキ林が形成されるとは考え難く、入善町の杉沢に見られるようなスギ林や、オニグルミ、エノキ、トネリコ等の河畔林等が想定されるが、現在自然状態の植生はすべて失われていること、本地域における花粉分析等の調査成果が少ないとから、現時点では詳細を言及するに至らない。

丘陵縁辺部付近の古植生については、上野A遺跡(旧福岡町)の繩文時代末頃の泥炭層を中心とした分析調査の結果、オニグルミ、イヌシデ、ブナ属、コナラ属、ニレ属一ケヤキ属、トチノキ属、カエデ属、エゴノキ属等の花粉化石や種実遺体が検出されている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 2003)。上記した種類は、本分析において検出された種類と重なるものも多いことから、類似した景観であった可能性がある。すなわち、本遺跡周辺は、クマシデ属一アサダ属、クリ属一シノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属、中~低木の落葉樹を主体とした、明るい林地であった可能性がある。また、マツ属は尾根沿いなど土地条件の悪い場所に、スギ属やモミ属や谷斜面などを中心に生育していたと推測される。

なお、本遺跡東側に神通川及びその支流が形成された扇状地が広がっており、地形的にみて砂礫層が主体と推定され、微化石等の産状が比較的良好な泥炭層は発達しにくいと考えられる。そのため、今後は、後背湿地等の河川氾濫原や旧河道跡等の堆積物を対象とし、調査事例を蓄積してゆくことが望まれる。

(b) 留意点

鏡坂墳墓群(未指定の関連遺跡)で実施した花粉化石からは、本地域における古植生の詳細を言及できる結果は得られなかつたが、県内における丘陵縁辺部の花粉分析結果から類推すると、本遺跡周辺はクマシデ属一アサダ属、クリ属一シノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属、中~低木の落葉樹を主体とした明るい林地であった可能性があり、マツ属は尾根沿い、スギ属やモミ属は谷斜面などを中心に生育していたと推測される。詳細はさらに調査例を増やして判断する必要があるが、管理・整備に際しては、こうした古植生を考慮に入れることが望ましい。

《引用文献》

- 三宅 尚・中越 信和 1998 「森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6(1) 15-30.
中村 純 1967 『花粉分析』古今書院 232p.
パリノ・サーヴェイ株式会社 1999a 「下村加茂遺跡の古環境復元」『富山県射水郡下村加茂遺跡発掘調査報告』下村教育委員会 55-62
パリノ・サーヴェイ株式会社 1999b 「平成8年度調査区の自然科学分析について」『富山県射水郡下村加茂遺跡発掘調査報告』下村教育委員会 78-82
パリノ・サーヴェイ株式会社 2003 「上野A遺跡の自然科学分析」『富山県福岡町 上野A遺跡発掘調査報告II』福岡町教育委員会 31-62
徳永 重元・山内 輝子 1971 『花粉・胞子・化石の研究法』共立出版株式会社 50-73.

1. 千坊山遺跡（指定地隣接地）の花粉分析

(7)はじめに

富山県富山市婦中町長沢に所在する千坊山遺跡は、山田川左岸の河岸段丘に立地している。これまでの発掘調査では弥生時代後期後半～終末期の堅穴住居跡が多数検出されたことなどから、当該期の集落遺跡と推定されている。また、本遺跡周辺の丘陵及び沖積地には、弥生時代後期～古墳時代前期頃の集落と、これらの集落と関連するとみられる墳墓群（古墳群）が多く分布していることから、古墳出現期の動向を検討する上で重要な地域とされている。

本報告では、本遺跡を含む史跡王塚・千坊山遺跡群が展開する当該地域の古環境、とくに古植生に関する情報を得るために自然科学分析調査を実施する。

(8)試料

試料は、千坊山遺跡内に設定された発掘調査区5箇所（No.1～5）に認められた堆積物より採取された土壌12点である。これらの試料は、No.1の2層・地山・構造埋土（試料番号1～3）、No.2の2～4層（試料番号4～6）、No.3の1層・地山（試料番号7,8）、No.4の2層・地山（試料番号9,10）、No.5の表上・地山（試料番号11,12）からなる。以上の試料を対象に花粉分析を行う。

(9)分析方法

試料約10gを秤り取り、水酸化ナトリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9、濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、同定・計数結果の一覧表として示す。

(10)結果

結果をP68表10、図34に示す。図表中で複数の種類を「-」で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。また、木本花粉総数が100個体未満の試料は、統計的に扱った場合、結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を+で表示するに留めている。

花粉化石の産出状況は全体的に悪く、定量解析に有効な個体数が得られた試料はNo.1 2層（試料番号1）のみである。ただし、No.1 2層も花粉化石の保存状態は良好といえず、花粉外膜が破損・溶解しているものも多く認められる。検出された分類群のうち、木本花粉ではマツ属が優占し、スギ属やハンノキ属等を伴う。草本花粉では、イネ科やアリノトウグサ属、ヨモギ属等が検出される。

その他の試料では、定量解析に耐えうる個体数は検出されず、木本花粉ではマツ属やスギ属、ハンノキ属等が、草本花粉ではイネ科やヨモギ属等がわずかに認められるのみである。

(11)考察

千坊山遺跡及び周辺の古植生復元を目的として花粉分析を実施したが、花粉化石はほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことは困難であった。

表10. 花粉分析結果

種類	No. 1			No. 2			No. 3			No. 4			No. 5		
	2層 試料番号	地山 1	透達土 2	3	2層 4	3層 5	4層 6	1層 7	地山 8	2層 9	地山 10	透土 11	地山 12		
木本花粉															
モミジ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツバキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツツキ属皆葉属	79	-	1	5	1	-	4	-	-	-	-	-	2	1	-
マツツキ(不明)	172	1	-	12	8	-	4	-	-	2	9	-	-	-	6
スギ属	18	-	-	4	2	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
サクランボ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カバヤヒキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	9	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	1	2	-
ブナ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属アカガシ属	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
クリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
シノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キクダラ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉															
イネ科	8	-	6	15	4	-	2	-	-	3	1	3	-	-	-
アザレタデ第一ウナギツカミ属	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ソイ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アリノゾウタグサ属	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	4	-	2	2	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
不老花粉	3	-	-	-	2	-	2	-	-	2	-	-	-	-	-
シダ類孢子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ゼンマイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
向日葵類孢子	36	-	5	35	24	-	15	-	-	21	21	10	21	21	10
合計	285	1	21	12	1	12	0	0	3	12	10	10	10	10	10
木本花粉	25	1	1	1	1	1	0	0	3	1	1	1	1	1	1
木本花粉	2	0	8	17	6	0	2	0	0	3	1	1	1	1	0
不老花粉	3	0	0	0	2	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0
シダ類孢子	36	0	5	35	24	0	15	0	0	21	21	10	21	21	10
算計(不明を除く)	342	1	14	73	42	1	29	0	0	27	34	21	21	21	10

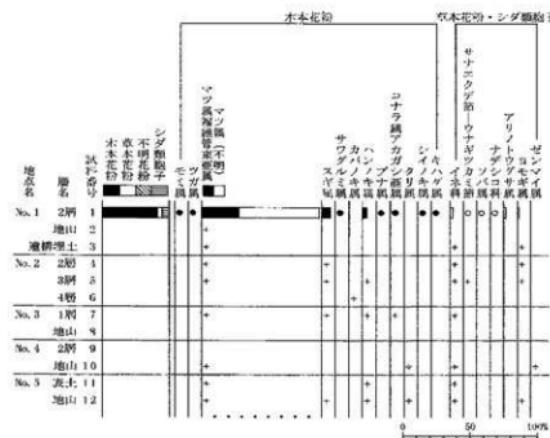


図34 花粉化石群集の層位分布

一般的に、花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている(中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998など)。花粉化石の産出状況では、花粉外膜が破損・溶解しているものが多く、比較的分解に強い花粉や分解が進んでも同定可能な花粉が検出される傾向が認められた。本遺跡の立地を考慮すると、表層を構成する堆積物は好気的環境にあったと推測され、花粉化石の大部分は経年変化の影響を受けていると考えられる。なお、花粉化石は、風化に対する耐性に差があり、シダ類胞子や針葉樹花粉は広葉樹花粉に

比べ、風化に対する耐性が強いと考えられている(徳永・山内, 1971 三宅・中越, 1998 など)。したがって、計測数を増やしても結果的に風化に耐性のある種類が高率となり本来の植生を反映しないため、ここでは計測数を増やすことは差し控えた。

富山市域及び周辺では、神通川及び常願寺川等が形成した扇状地先端部に広がる低地部や、湯瀬平野で泥炭層が発達した射水平野において古植生復元を目的とした分析調査多く実施されている。これらの調査成果によれば、低地部は、下村加茂遺跡における弥生時代の堆積物の分析結果(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1999 a·b)等で推定されているように、ハンノキ林等を主体とする景観であったと考えられる。また、上野 A 遺跡(旧福岡町)の縄文時代末頃の泥炭層を中心とした分析調査結果では、オニグルミ、イヌシデ、ブナ属、コナラ属、ニレ属-ケヤキ属、トチノキ属、カエデ属、エゴノキ属等の花粉化石や種実遺体が検出されている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 2003)ことから、丘陵縁辺は、中~低木の落葉樹を主体とした明るい林地であった可能性がある。今回分析対象とされた堆積物は年代観が不明であるため、弥生時代後期~終末頃の古植生に限定されないが、前述した分類群は今回検出された花粉化石と重複するものが多いことから、上記と同様の景観が推定される。また、マツ属は、尾根沿い等の上地条件の悪い場所に、スギ属やモミ属等は谷斜面などを中心に生育していたと考えられる。

一方、No.1 2 層(試料番号 1)では、花粉化石の保存状態は悪かったが、この他の試料と比較してマツ属を中心に多くの花粉化石が検出され、多産したマツ属は亜属まで同定できたものは全て複数管束亜属であった。マツ属複数管束亜属(いわゆるニヨウマツ類)は、生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺、海岸砂丘上など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育するほか、二次林の代表的な種類である。これまでの調査成果では、近世・現代においてマツ属が多産する傾向が認められている(たとえば田中・千葉, 2007 など)ほか、現存植生では周辺にマツ植林や二次林の点在も認められる。さらに、No.1 2 層は、生物や植物等による擾乱を受けやすい表層付近の堆積物であることを考慮すると、本試料に認められた花粉化石群集は近現代の植生を反映している可能性がある。

《引用文献》

- 三宅 尚・中越 信和 1998 「森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6(1), 15-30.
中村 純 1967 『花粉分析』古今書院, 232p.
パリノ・サーヴェイ株式会社 1999a 「下村加茂遺跡の古環境復元」『富山県射水郡下村加茂遺跡発掘調査報告』下村教育委員会, 55-62
パリノ・サーヴェイ株式会社 1999b 「平成 8 年度調査区の自然科学分析について」『富山県射水郡下村加茂遺跡発掘調査報告』下村教育委員会, 78-82
パリノ・サーヴェイ株式会社 2003 「上野 A 遺跡の自然科学分析」『富山県福岡町 上野 A 遺跡発掘調査報告 II』福岡町教育委員会, 31-62
田中 義文・千葉 博俊 2007 「射水平野周辺の古環境変遷」『PALYNO』5, 34-47.
徳永 重元・山内 輝子 1971 『花粉・胞子・化石の研究法』共立出版株式会社, 50-73.

(4) 昆虫類調査

ア. はじめに

七塚・千坊山遺跡群整備計画に資するため、当該地域の自然環境（昆虫類）に関し文献調査を行い（実地調査で少々の追加を行った）、計画地域において特に注意すべき種類があるかどうか検討を行った。

当該地域を含む地域の昆虫相に関する調査報告は、いくつか存在するが、最も包括的に行われたものは、AMICA 編集部編「呉羽・射水丘陵昆虫調査（1993年～1995年）」AMICA(34)：1-58. (1996年) に記録されている。その後では、富山市科学文化センターによる「里山（富山県中央部）の自然環境調査報告書Ⅰ・Ⅱ」(2005) があり、これらは、呉羽丘陵と富山市池多地区の丘陵部、射水市小杉地区の丘陵部、富山市婦中地区の丘陵部、富山市山田地区（これら場所を合わせて射水丘陵と呼んでおく）を調査範囲とするもので、今回の整備計画地域である場所は、これらの調査区域内に含まれるもしくは隣接する地域である。

整備計画地域の昆虫相は、これらの調査地域の昆虫相以上のものとは考えられず、特段の相異は無いものと考えられる。

上記の文献調査および実地調査によって目撃された昆虫類の目録を以下に作成した。それによれば、15目13科794種が記録され、その中にはいくつかの「富山県の絶滅のおそれのある野生生物」（レッドデータブックとやま）に登載されている希少な種24種も含まれていて、呉羽丘陵、射水丘陵の昆虫相は自然環境の良好な丘陵地～山地下部の昆虫相を示している。

整備計画地域は、丘陵地の中腹部から末端部に位置し、草原、灌木、林地からなり、周囲に小沢が存在するが、大規模な陸水環境は存在しない。

下記リストから、陸水に生息する種・計画地域には見られない植物を食草食樹とする種・山地を主な生息地としている種を除いた種が、この地に生息可能性のある種と言えるであろう。特にこの地を整備する場合、何らかの影響を受けると考えられる昆虫類は、直翅類、陸生の半翅類、陸生の甲虫類、鱗翅類の一部、双翅類、膜翅類であるが、それらはいずれも当該地域のみでなく、周辺地域にも通常存在するものであると考えられる。

下記のリストには「レッドデータブックとやま」に登載の種（アンダーラインを付す）も含まれているが、整備計画地域では、それらの種類は生息していないものと判断される。

レッドデータブックに登載され、整備計画地域に多少ともかかわりのありそうな種についてふれておく。

(7) ギフチョウ：丘陵地から山地まで広く分布する。県内では全体として個体数も多いが、産地の環境変化や採集による個体数の減少も心配される。射水丘陵・呉羽丘陵においても見られ、カンアオイ類の自生する場所では、本種に注意する必要もある。

(4) オオムラサキ：エノキを食樹とし、樹液を成虫の餌とする。丘陵地から山地まで分布は広いが、産地個体数ともにたいへん少ない。エノキがある場合には本種に注意する必要もある。

(9) ゲンジボタル：県内各地のカワニナの多く生息する小河川・用水に見られるが、産地は局地的で個体数も多くはない。整備計画地域の岡辺部の小河川・用水では本種に注意する必要もある。

(1) マガタマハンミョウ：後翅が退化し、飛ぶことが出来ないハンミョウ。低山から山地の山道やのその斜面等の裸地にすむが、減少の傾向にある。林中の裸地では本種に注意する必要もある。

イ. 奥羽丘陵・射水丘陵昆虫目録

和名のみを列記する

アンダーラインを付した種は「レッドデータブックとやま」に登載の種である。

<u>トンボ目</u>	<u>ネアカヨシヤンマ</u>	<u>シロアリ目</u>	<u>バッタ科</u>
<u>イトトンボ科</u>	<u>オヤンマ</u>	<u>ミゾガシラシロアリ科</u>	<u>ショウリョウバタ</u>
<u>モートントンボ</u>	<u>ギンヤンマ</u>	<u>ヤマトシロアリ</u>	<u>トノサマバッタ</u>
<u>エソイトンボ</u>	<u>クロスジギンヤンマ</u>		<u>クルマバッタモドキ</u>
<u>セスジイトンボ</u>	<u>オオギンヤンマ</u>	<u>カマキリ目</u>	<u>ツマグロイナゴモドキ</u>
<u>ムスジイトンボ</u>	<u>ミルンヤンマ</u>	<u>カマキリ科</u>	<u>ナキイナゴ</u>
<u>オオイトンボ</u>	<u>コシボソヤンマ</u>	<u>オオカマキリ</u>	<u>コバネイナゴ</u>
<u>キイトンボ</u>	<u>サラサヤンマ</u>	<u>コカマキリ</u>	<u>ミカドフキバッタ</u>
<u>クロイトンボ</u>	<u>エゾトンボ科</u>	<u>ハラビロカマキリ</u>	<u>ヒシバッタ科</u>
<u>アジイトンボ</u>	<u>トラフトンボ</u>		<u>ハラヒシバッタ</u>
<u>アオモントンボ</u>	<u>タカネトンボ</u>	<u>ハサミムシ目</u>	
<u>モノサシトンボ科</u>	<u>エントンボ</u>	<u>ハサミムシ科</u>	<u>チャタテムシ目</u>
<u>モノサシトンボ</u>	<u>オオヤマトンボ</u>	<u>ハサミムシ</u>	<u>チャタテ科</u>
<u>アオイトンボ科</u>	<u>コヤマトンボ</u>		<u>スジチャタテ</u>
<u>アオイトンボ</u>	<u>トンボ科</u>	<u>直翅目</u>	
<u>オオアオイトンボ</u>	<u>ショウジョウトンボ</u>	<u>ケラ科</u>	<u>シリアゲムシ目</u>
<u>ホソミオツネントンボ</u>	<u>ハッショウトンボ</u>	<u>ケラ</u>	<u>シリアゲムシ科</u>
<u>カワトンボ科</u>	<u>ヨツボシトンボ</u>	<u>コオロギ科</u>	<u>ヤマトシリアゲ</u>
<u>ハグロトンボ</u>	<u>ハラビロトンボ</u>	<u>エンマコオロギ</u>	
<u>ミヤマカワトンボ</u>	<u>シオヤトンボ</u>	<u>ハラオカメオオロギ</u>	<u>脈翅目</u>
<u>カワトンボ</u>	<u>シオカラトンボ</u>	<u>モリオカメコオロギ</u>	<u>ツノトンボ科</u>
<u>オオカワトンボ</u>	<u>オオシオカラトンボ</u>	<u>ツヅラセセコオロギ</u>	<u>ツノトンボ</u>
<u>ムカシトンボ科</u>	<u>コフキトンボ</u>	<u>マダラスズ</u>	<u>半翅目</u>
<u>ムカシトンボ</u>	<u>コシアキトンボ</u>	<u>マダラスズ</u>	<u>ヒシウンカ科</u>
<u>ムカシヤンマ科</u>	<u>チョウトンボ</u>	<u>シバスズ</u>	<u>キガシラヒシウンカ</u>
<u>ムカシヤンマ</u>	<u>ウスバキトンボ</u>	<u>エゾスズ</u>	<u>ウンカ科</u>
<u>サナエトンボ科</u>	<u>アキアカネ</u>	<u>クサヒバリ</u>	<u>ヒメトビウンカ</u>
<u>コサナエ</u>	<u>ナツアカネ</u>	<u>ヤマトヒバリ</u>	<u>セジロウンカ</u>
<u>ヤマサナエ</u>	<u>オナガアカネ</u>	<u>カネタキ</u>	<u>トビロウンカ</u>
<u>ミヤマサナエ</u>	<u>ノシメトンボ</u>	<u>キリギリス科</u>	<u>アオノヘゴロモ科</u>
<u>キロソナエ</u>	<u>コノシメトンボ</u>	<u>ツユムシ</u>	<u>アオノヘゴロモ</u>
<u>ホシナナエ</u>	<u>リスアカネ</u>	<u>アシグロツユムシ</u>	<u>ハゴロモ科</u>
<u>クロソナエ</u>	<u>マイコアカネ</u>	<u>セスジツユムシ</u>	<u>ベッコウハゴロモ</u>
<u>ダビドソナエ</u>	<u>ヒメアカネ</u>	<u>サトクダマキモドキ</u>	<u>アワフキムシ科</u>
<u>コオニヤンマ</u>	<u>マユタテアカネ</u>	<u>ハヤシノウマオイ</u>	<u>コガシラアワフキ</u>
<u>ウチワヤンマ</u>	<u>ミヤマアカネ</u>	<u>クサキリ</u>	<u>ホシアワフキ</u>
<u>オニヤンマ科</u>	<u>ネキトンボ</u>	<u>オナガササキリ</u>	<u>シロオビアワフキ</u>
<u>オニヤンマ</u>	<u>キトンボ</u>	<u>ウスイロササキリ</u>	<u>ミニズク科</u>
<u>ヤンマ科</u>		<u>ヒメギス</u>	<u>ヒロズヨコノイ科</u>
<u>マグラヤンマ</u>	<u>ゴキブリ目</u>	<u>コバネヒメギス</u>	<u>ヤナギハトムネヨコハイ</u>
<u>ルリボシヤンマ</u>	<u>チャバネゴキブリ科</u>	<u>ヤブキリ</u>	<u>アオズキンヨコハイ科</u>
<u>オオルリボシヤンマ</u>	<u>モリチャバネゴキブリ</u>	<u>キリギリス</u>	<u>アオズキンヨコハイ</u>
<u>マルタシヤンマ</u>	<u>ゴキブリ科</u>		
<u>カトリヤンマ</u>	<u>ヤマトゴキブリ</u>	<u>オンブバッタ科</u>	
<u>ヤブヤンマ</u>		<u>オンブバッタ</u>	<u>オオヨコハイ科</u>

オオヨコバイ	ツノカメムシ科	ベニシジミ	アミメダガ
マエジロオオヨコバイ	アオモンツノカメムシ	ルリシジミ	ウスマダラマドガ
ヨコバイ科	ベニモンツノカメムシ	ツバメシジミ	メイガ科
ヒシモンヨコバイ	ヘリカメムシ科	ヤマトシジミ	ホソシツトガ
トバヨコバイ	オオヘリカメムシ	ウラギンシジミ	テンシツトガ
ヒトツメヨコバイ		テングチョウ科	ゴマダラノメイガ
リンゴマダラヨコバイ	トビケラ目	テングチョウ	クロオビノメイガ
シロセシヨコバイ	ヒグナガカワトビケラ科	マダラチョウ科	シロオビノメイガ
セミ科	ヒグナガカワトビケラ	アサギマダラ	アヤナミノメイガ
アブレゼミ		タテハチョウ科	ウスムラサキノメイガ
ニイニイゼミ	鱗翅目 チョウ類	クモガタヒョウモン	クロウスムラサキノメイガ
ヒグラン	セセリチョウ科	ミドリヒョウモン	ヨスジノメイガ
ツクツクボウシ	ミヤマセセリ	ウラギンヒョウモン	キンシズノメイガ
ハレゼミ	オオバセセリ	オオウラギンヒョウモン	コブノメイガ
チッチゼミ科	ダイミヨウセセリ	ツマグロヒョウモン	ハカジモドキノメイガ
チッチゼミ	キマダラセセリ	アサマイチモンジ	シロモンノメイガ
アメンボ科	チャバネセセリ	イチモンジチョウ	ハラナガキマダラノメイガ
ヒメアメンボ	コチャバネセセリ	コミスジ	クロスジノメイガ
アメンボ	ミヤマチャバネセセリ	オオムラサキ	モノゴマダラノメイガ
ハネナシアメンボ	イチモンジセセリ	ゴマダラチョウ	シロテンキノメイガ
ヤスマツアメンボ	ホソバセセリ	スミナガシ	マエウスキノメイガ
タイコウチ科	アグハチョウ科	サガハチチョウ	キバラノメイガ
ミズカマカリ	アオスジアゲハ	キタデハ	クロズノメイガ
ヒメミズカマカリ	ウスバシロチョウ	ヒオドシチョウ	クロスジキンノメイガ
マツモムシ科	ギフチョウ	ルリタデハ	ウコンノメイガ
マツモムシ	キアゲハ	アカタデハ	ヨツメノメイガ
コマツモムシ	ナミアゲハ	ヒメアカタデハ	ホソミスジノメイガ
マルミズムシ科	クロアゲハ	ジャノメチョウ科	タイワンモンキノメイガ
ヒメマルミズムシ	ミヤマカラスアゲハ	ヒメウラナミジャノメ	マエアカスカシノメイガ
ミズムシ科	カラスアゲハ	ヒメジャノメ	ワタヘリクロノメイガ
コチビミズムシ	オナガアゲハ	ヒカゲチョウ	ヨツボシノメイガ
メクラカメムシ科	モンキアゲハ	クロヒカゲ	キベリハネボソノメイガ
ナカグロメクラガメ	シロチョウ科	サトキマダラヒカゲ	マメノメイガ
ツマグロハギメクラガメ	シマキチョウ	ヤマキマダラヒカゲ	シロテンウスグロノメイガ
アカヒゲホソミドリメクラ	キチョウ	ヒメキマダラヒカゲ	マエキノメイガ
ガメ	エゾシジグロシロチョウ	鱗題目 カ類	モンキクロノメイガ
カシワトビメクラガメ	スジグロシロチョウ	ハマキガ科	シロアヤヒメノメイガ
ヒメセダカメクラガメ	モンシロチョウ	ウスアミメキハマキ	モンシロルリノメイガ
ヒラタカメムシ科	モンキチョウ	ニセウツギヒメハマキ	キムジノメイガ
シナヒメヒラタメクラガメ	スジボソヤマキチョウ	キバガ科	ホシオビソノメイガ
ナガカメムシ科	シジミチョウ科	ブジツサキバガ	ヘリジロキンノメイガ
チャイロナガカメムシ	ウラナミアカシジミ	イラガ科	ヒメトガリノメイガ
キベリヒョウタンナガカメム	アカシジミ	イラガ	トビイロシマメイガ
シ	ミズイロオナガシジミ	ムラサキイラガ	ギンモンシマメイガ
ヒメホシカメムシ科	ミドリシジミ	クロシタイラガ	キオビトガリメイガ
ヒメホシカメムシ	エゾミドリシジミ	アオイラガ	キベリトガリメイガ
カメムシ科	トラフシジミ	セセリモドキ科	ウスペニトガリメイガ
クサギカメムシ	ウラナミシジミ	ニホンセセリモドキ	マエナミマダラメイガ
チャバネアオカメムシ	コツバメ	マドガ科	アカマダラメイガ
ツノアオカメムシ	ゴイシシジミ	アカジママドガ	カギハ蝶

マエキガギバ	フトスジツバメエダシャク	ベニヘリコケガ	マルモンシロガ
ヤマトカギバ	ウスキツバメエダシャク	ハガタキコケガ	フサヤガ
ウコンカギバ	ノムラツバメエダシャク	ゴマダラキコケガ	ネジロキノイカワガ
ウスロカギバ	コガタツバメエダシャク	モンクロベニコケガ	キノカワガ
アカウラカギバ	カレハガ科	スジモンヒトリ	マエクリンガ
トガリバ科	タケカレハ	ベニシタヒトリ	アオスジアオリンガ
オオバトガリバ	マツカレハ	コブガ科	キスジコヤガ
ホソトガリバ	オビガ科	ソトグロコブガ	クロハナコヤガ
シャクガ科	オビガ	リンゴコブガ	シマフコヤガ
オオアシオシャク	ヤママユガ科	ヤガ科	ウシベニコヤガ
ウスアシオシャク	ヤママユ	ゴマケンモン	モンシロクルマコヤガ
カギドマオシャク	クスサン	ニッコウアオケンモン	ネジロコヤガ
オオシロオビアオシャク	オオミズアオ	ナシケンモン	シロフコヤガ
シロオビアオシャク	スズメガ科	クロフケンモン	シロマダラコヤガ
カギシロスジアオシャク	エゾシモフリスズメ	アミメケンモン	ウスアオモンコヤガ
クロスジアオシャク	エゾスズメ	シロスジキヨトウ	ギンスジキンウワバ
コシロオビアオシャク	クロスキバホウシャク	タバコガ	イネキンウワバ
スカシヒメアオシャク	クロホウシャク	ツメクサガ	リョクモンオオキシウワバ
クロモンアオシャク	ビロードズメ	タマナヤガ	キクシキウワバ
ヨツメアオシャク	シャチホコガ科	カブライガ	エゾギクシキンウワバ
ウスベニスジヒメシャク	シャチホコガ	ホソアオバヤガ	ミツモンキンウワバ
ベニヒメシャク	ギンシャチホコ	クロクモヤガ	イチジクシキンウワバ
キオビベニヒメシャク	ホソバシャチホコ	ウスイロカバシヤガ	マメキシタバ
ホソスジヒメシャク	モンクロシャチホコ	オオバヤガ	コガタキシタバ
ホソバナミシシャク	ヘリスジシャチホコ	ウスイロアカフヤガ	ムラサキアシブトクチバ
フトビスジナミシャク	クビワシャチホコ	オオバコヤガ	ウンモンクチバ
ウストビモンナミシャク	スズキシャチホコ	ウスイロアカフヤガ	ニセウンモンクチバ
セスジナミシク	オオエグリシャチホコ	シロモシヤガ	ムクゲコノハ
トンボエダシャク	クリゴモドキシャチホコ	キシタミドリヤガ	オスグロトモエ
ユウマドラエダシャク	ドクガ科	ハイロイキシタヤガ	ハグルマトモエ
サザナミオビエダシャク	スギドクガ	ミヤマフタオビキヨトウ	ウスエグリバ
キスジシロエダシャク	ママドクガ	フタテンキヨトウ	オオエグリバ
ナミシシロエダシャク	スゲオオドクガ	アワヨトウ	アカエグリバ
マエキオエダシャク	スカシドクガ	ホソバセダカモクメ	マダラエグリバ
ハグルマエダシャク	ウチジロマイマイ	コマエアカシロヨトウ	アカテンクチバ
コトビスジエダシャク	ニワトコドクガ	クサビヨトウ	シラフクチバ
ウスオエダシャク	モンシロドクガ	セアカヨトウ	アヤシラフクチバ
クロフシエダシャク	ヒトリガ科	モクメヨトウ	ウスヅマクチバ
オオシロエダシャク	ムシホソバ	オオシロテンアワヨトウ	シャクドウクチバ
キシタエダシャク	ツマキハソバ	スジキヨトウ	ソトジロツマキリクチバ
ヒヨウモンエダシャク	ヤネホソバ	ヒメサビスジヨトウ	チョウセンツマキリアツバ
ナカウスエダシャク	マエキホソバ	シロモンオビヨトウ	シロツマキリアツバ
リンゴツノエダシャク	キマエクロホソバ	オオシマカラショトウ	リンゴツマキリアツバ
ヨモギエダシャク	マエクロホソバ	ニレキリガ	キマダラツバ
ヒロオビエダシャク	ヨツボシホソバ	シマキリガ	ムラサキアツバ
ソトキクロエダシャク	クビワウスグロホソバ	シラオビキリガ	テンクロアツバ
ツマトビキエダシャク	アカスジシロコケガ	フタテンヒメヨトウ	クロキシタツバ
クリエダシャク	フタホシキコケガ	ムラサキツマキリヨトウ	ウスヅマツバ
キエダシャク	クロテンハイロコケガ	ヒメツマキリヨトウ	シラナミクロアツバ
コナフキエダシャク	ハガタベニコケガ	キスジツマキリヨトウ	フジクロアツバ

ソトウスグロアツバ	ムナビロアトボシゴミムシ	ムネビロハネカクシ	アカヒゲヒラタコメツキ
ヒロオビウスグロアツバ	アオアトキリゴミムシ	ナミツヤムネハネカクシ	ドウガネヒラタコメツキ
オオシラホシアツバ	アオヘリアトキリゴミムシ	チャイロツヤムネハネカク	オオシモフリコメツキ
ハナマガリアツバ	フタホシトキリゴミムシ	シ	シモフリコメツキ
カギモンハナオイアツバ	フタホシジバネゴミムシ	チビハネカクシの1種	アカバラクロコメツキ
ミシシアツバ	コガシラミズムシ科	ヒゲトハネカクシの1種	ホソツヤケシコメツキ
ホソナミアツバ	クロホシコガシラミズムシ	クワガタムシ科	キバネホソコメツキ
フタシシアツバ	コガシラミズムシ	ミヤマクワガタ	オオナガコメツキ
オオアカマエアツバ	コツブゲンゴロウ科	コクワガタ	ヒナガコメツキ
ウスグロアツバ	コツブゲンゴロウ	コガネムシ科	ミドリヒメコメツキ
甲虫目			
ハンミヨウ科	ゲンゴロウ科	カブトムシ	クシコメツキ
エリザハンミヨウ	ルイスツブゲンゴロウ	センチコガネ	ニホンチビマコメツキ
ニワハンミヨウ	ツブゲンゴロウ	ムネアカセンチコガネ	ヘルミネマコメツキ
マガタマハンミヨウ	ケシゲンゴロウ	コフキコガネ	クロハナコメツキ
ナミハンミヨウ	ホソセシゲンゴロウ	クリロコガネ	ベニボタル科
オサムシ科	キベリクロヒメゲンゴロウ	ナガチャコガネ	カクムネベニボタル
エゾカタピロオサムシ	マメゲンゴロウ	ヒメアシナガハムグリ	ジョウカイポン科
マヤサンオサムシ	コシマゲンゴロウ	コイチャコガネ	ウスイロクビポソジョウカ
クロナカオサムシ	ヒメゲンゴロウ	マメコガネ	イ
ヒメマイマイカブリ	ミズスマシ科	セマグラコガネ	クロヒメクビポソジョウカ
ナガヒヨウタングミムシ	ミズスマシ	アオカナブリ	イ
ウスオビコミズギワゴミム	コミズスマシ	コガネムシ	クビポソジョウカイの1種
シ	ガムシ科	ヒメコガネ	クビポソジョウカイ
ウスモンコミズギワゴミム	アカケシガムシ	ハヌノヒメコガネ	アオジョウカイ
シ	スジヒメガムシ	ヒラタハナムグリ	セボシジョウカイ
カワチゴミムシ	キベリヒラタガムシ	アオハナムグリ	セスジジョウカイ
アシミゾナガゴミムシ	キイロヒラタガムシ	コアオハナムグリ	ジョウカイポン
トックリナガゴミムシ	ヤマトゴマフガムシ	マルハナノミ科	ホタル科
ヨリトモナガゴミムシ	タマガムシ	ホソチビマルハナノミ	ゲンジボタル
オオヒラタゴミムシ	ヒメガムシ	チビマルハナノミの1種	カタモンミナミボタル
アオグロヒラタゴミムシ	エンマムシ科	クロマルハナノミ	オバボタル
クロモリヒラタゴミムシ	エンマムシ	マルテグムシ科	クロマドボタル
ニセマルガタゴミムシ	ヤマトエンマムシ	シラフチビマルゲムシ	カツオブシムシ科
ヒヨウタングマルガタゴミム	シデムシ科	ナガハナノミ科	ヒメカツオブシムシ
シ	クロシデムシ	エダヒゲナガハナノミ	ヒヨウホンムシ科
ゴミムシ	ヨツボシモンシデムシ	クリロヒガナガハナノミ	ナガヒヨウホンムシ
ヒメケゴモクムシ	オオモモブチシデムシ	タマムシ科	ジョウカイモドキ科
ケウスゴモクムシ	オオブチシデムシ	ウバタマムシ	クロアオケシジョウカイモ
ウスアカクロゴモクムシ	ムナグロホソツヤシデムシ	ヒメヒラタタマムシ	ドキ
オオクロツヤゴモクムシ	オサシデムシ	ナガタマムシの1種	ツマキアオジョウカイモド
オオズヒメゴモクムシ	ハネカクシ科	ホソアシナガタマムシ	キ
キイロチビゴモクムシ	キバネセシジハネカクシ	コメツキムシ科	ケシキス科
ツヤマメゴモクムシ	ツノフトツツハネカクシ	ヒゲコメツキ	カタベニデオキスイ
ムネアカマメゴモクムシ	アオアリガタハネカクシ	サビキコリ	クロハナケシキスイ
キベリゴモクムシ	キバネキビポハネカクシ	ムナビロサビキコリ	メヒラタケシキスイ
ニッポンヨツボシゴモクム	ツマグロナガハネカクシ	マダラチビコメツキ	ツヤチビヒラタケシキスイ
シ	ホソコガシラハネカクシの1種	タテジマカネコメツキ	トゲアシヒラタケシキスイ
スジアオゴミムシ	1種	オオツヤハダコメツキ	コクロヒラタケシキスイ

アカマダラケシキスイ	モモブタミキリモドキ	シ	腹翅目
キヨロセマルケシキスイ	アリモド科	アカヒガナガソウムシ	アシプトコバチ科
キムネチビケシキスイ	ホソクピアリモドキ	キマダラヒゲナガソウムシ	キアシプトコバチ
ニヨツボシケシキスイ	アカホソアリモドキ	スネアカヒゲナガソウムシ	ベッコウバチ科
ヨツボシケシキスイ	カミキリムシ科	オトシブミ科	キオビベッコウ
ヒラタムシ科	クロカミキリ	チビクヒョックリ	アリ科
ヒメヒラタムシ	ミヤマカミキリ	シリブトヒョックリ	アミメアリ
クロホシチビヒラタムシ	キバネニセハムシハナカミ	カシルリヒョックリ	トビイロケアリ
フトタグホソヒラタムシ	キリ	コルリヒョックリ	クロヤマアリ
キスイモド科	ヒナルリハナカミキリ	ウメメヒョックリ	ハヤシクロヤマアリ
キスイモドキ	キマダラヤマカミキリ	セアカヒメヒョックリ	クロオオアリ
コメツキモドキ科	アオカミキリ	エゴツルクビオトシブミ	ムネアカオオアリ
ケナガマルキスイ	ヨツボシチビヒラタカミキ	カシルリヒョックリ	スズメバチ科
ルイスコメツキモドキ	リ	ハギルリオトシブミ	オオスズメバチ
オオキノコムシ科	クリストフコトラカミキリ	ホソクチゾウムシ科	キイロスズメバチ
ヒメオビオオキノコ	クロトラカミキリ	ヒレルホソクチゾウムシ	クロスズメバチ
テントウムシダマシ科	エグリトラカミキリ	ゾウムシ科	フタモンアンサガバチ
ルリテントウダマシ	ベニカミキリ	ケブカクチブトゾウムシ	キボシアシナガバチ
テントウムシ科	ゴマフカミキリ	カシワクチブトゾウムシ	コハナバチ科
クロヘリテントウ	カタシロゴマフカミキリ	クリイロクチブトゾウムシ	アカガネコハナバチ
フタホシテントウ	アトモンサビカミキリ	カキゾウムシ	ケブカハナバチ科
ヒメアカホントントウ	ヒメヒゲナガカミキリ	コフキゾウムシ	キオビツヤハナバチ
ヒメカメノコテントウ	ゴマダラカミキリ	ムシクサコバソウムシ	ヤマツツヤハナバチ
ムーアシロホシテントウ	ハムシ科	ムネスジノミゾウムシ	クマバチ
ナミテントウ	ジョンサイハムシ	カシワノミゾウムシ	ミツバチ科
コキノコムシ科	ワモンナガハムシ	ヤドリノミゾウムシ	クロマルハナバチ
ヒゲブトキノコムシ	カタビロハムシ	アカアシノミゾウムシ	コマルハナバチ
ゴマダラキノコムシ	アカクビボソハムシ	マダラノミゾウムシ	コマルハナバチ
ゴミシングダマシ科	バラルリツツハムシ	ガロアノミゾウムシ	トラマルハナバチ
ヒメツノゴミシングダマシ	クロボシツツハムシ	チビデオゾウムシ	ニホンミツバチ
マルムネゴミシングダマシ	ドウガネツツハムシ	ハモグリゾウムシ	
キマリ	ムナゲクロサルハムシ	クロナガハナゾウムシ	双翅目
ハムシダマシ科	マダラアラゲサルハムシ	ウスモンチビシギゾウムシ	ハナアブ科
ヒゲブトハムシダマシ	フジハムシ	ジュウジチビシギゾウムシ	ホソヒラタアブ
ニセハムシダマシ	アトボシハムシ	セダカシギゾウムシ	ヒメヒラタアブ
アオハムシダマシ	ウリハムシモドキ	クリシギゾウムシ	クロヒラタアブ
ナガハムシダマシ	キイロクワハムシ	タデサルゾウムシ	シマハナアブ
クチキムシ科	ホタルハムシ	クロツヤサルゾウムシ	ハナアブ
ウスイロクチキムシ	クワノミハムシ	ツノクモゾウムシ	ホシメハナアブ
アカハネムシ科	ヒゲナガルリマルノミハム	ウスモンカレキゾウムシ	オオハナアブ
アカハネムシ	シ	リンゴアナキゾウムシ	アシブトハナアブ
ナガクチキムシ科	ルリマルノミハムシ	ホソアナアキゾウムシ	ベッコウハナアブ
クロホソナガクチキムシ	イチモンジカメノコハムシ	オサゾウムシ科	ケバエ科
ハナノミ科	マメゾウムシ科	オオゾウムシ	メスアカアシボソケバエ
クロヒメハナノミ	シリアカマメゾウムシ	ササコゾウムシ	ムシヒキアブ科
セアカヒメハナノミ	ヒゲナガゾウムシ科	キクイムシ科	シオヤアブ
ハナノミダマシ科	アカアシヒゲナガゾウムシ	ルイスザイノキクイムシ	
クロフタガハナノミ	ウスモンツツヒゲナガゾウ	ツヤナシキクイムシ	
カミキリモドキ科	ムシ		
オカカミキリモドキ	ヒメセマルヒゲナガゾウム		

(5) 動物調査

ア. はじめに

王塚・千坊山遺跡群周辺の脊椎動物（魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類）について報告する。

イ. 調査方法

対象遺跡は、王塚古墳・勅使塚古墳・千坊山遺跡・向野塚墳墓・六治古塚墳墓・富崎墳墓群・富崎千里古墳群の7箇所である。

調査は富山市科学博物館が富山市三熊周辺で行った里山調査の結果を基に、遺跡周辺に生息すると考えられる脊椎動物について推測した。

ウ. 調査結果及び考察

各グループごとに、生息する可能性のある種について述べ、三熊で確認されている絶滅危惧種 P78 表 11 を示す。なお魚類は南部他(2005, 2006)、両生類・爬虫類は南部他(2005, 2006)、鳥類は湯浅他(1997)、高橋(2005)、穴田他(2006)、哺乳類は村井・南部(2006)、村井他(2006)を参考にした。

(1) 魚類

池が隣接する遺跡(富崎千里古墳群)や水田や水路が隣接する遺跡(千坊山遺跡、富崎千里古墳群)周辺には魚類が生息すると思われる。池には、ギンブナ、コイ等が生息し、池や水路にはヨシノボリ類等が生息すると思われる。

(2) 両生類

水田が隣接する遺跡(千坊山遺跡、富崎千里古墳群)、池が隣接する遺跡(富崎千里古墳群)では、繁殖期に水田で産卵し、非繁殖期には水田周辺の草地や山林に生息する両生類が生息すると思われる。サンショウウオ類では、ホクリクサンショウウオ、カエル類では、アマガエル、ヤマアカガエル、ニホンアカガエル、モリアオガエル、シュレーゲルアオガエル等が生息すると思われる。池には外来種であるウシガエルが生息する可能性がある。

ホクリクサンショウウオは、能登半島、富山県中央部の丘陵に生息し(環境庁 2000)、その分布域は限られ、環境省の絶滅危惧 I B 類、富山県の絶滅危惧種である。

(3) 爬虫類

ヘビ類では、山地や水田周辺にアオダイショウ、シマヘビ、ヤマカガシ、マムシ等が、トカゲ類では草地にカナヘビ等が生息すると思われる。富山県希少種のシロマダラも生息する可能性がある。

(4) 鳥類

遺跡周辺には雜木林や杉林、水田、畑等の耕作地、住居がみられる。そのため、森林性の野鳥や人里にすむ野鳥が生息する。三熊周辺では、森林性の野鳥 54 種、人里の野鳥 13 種が知られ(穴田他, 2006)、これらの多くが古墳周辺にも生息すると思われる。

森林性の野鳥では、カッコウ、ホトトギス、アカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、ヤブサメ、ウグイス、メジロ、アトリ、イカル、カケスなどが、集落や農耕地にはトビ、キジバト、ツバメ、モズ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラスなどが生息すると思われる。

タカ類では、オオタカ、ミサゴ等が三熊で確認されている(湯浅他, 1997; 高橋, 2005; 穴田他, 2006)。オオタカは環境省の絶滅危惧 II 類、富山県の危急種、ミサゴは環境省の絶滅危惧 II 類、富山県の危急種、準絶滅危惧、富山県の希少種である。

(オ) 哺乳類

遺跡周辺には雑木林や杉林、水田、畠等の耕作地や住居がみられるため、森林や耕作地に生息する哺乳類がみられる。

食虫目ではヒミズやアズマモグラ、翼手目ではイエコウモリ、食肉目ではタヌキ、キツネ、テン、イタチ、ハクビシン、偶蹄目はカモシカ、囁歎目はニホンリス、ムササビ、アカネズミ、ウサギ目はニホンノウサギなどが生息すると思われる。

ヤマコウモリは三熊で確認され（村井他, 2006），富山県カテゴリーでは希少種、環境省カテゴリーでは絶滅危惧II類である。

カモシカは山麓部に分布を広げ、射水丘陵でもみかけるようになってきている（村井他, 2006）。ツキノワグマは大量出没年の2004年には、三熊でも確認されている（富山クマ緊急調査グループ他, 2005; 村井他, 2006）。

《参考文献》

- 穴田哲, 南部久男 2006 「里山地域（富山県中央部）の鳥類（補遺）」 pp.173-186『里山（富山県中央部）の自然環境調査報告書II植物・動物・その他編』富山市科学文化センター。
- 環境庁 2000 『改訂日本の絶滅の恐れのある野生生物. レッドデータブック（両生類・爬虫類）』自然環境研究センター, 120pp.
- 村井仁志, 山内洋, 森大輔, 白石俊明, 南部久男 2006 「富山市三熊および山田村の哺乳類」 pp. 187-206『里山（富山県中央部）の自然環境調査報告書II植物・動物・その他編』富山市科学文化センター。
- 村井仁志, 南部久男 2006 「富山県の中央部里山地域における2004年のツキノワグマの山没状況」『里山（富山県中央部）の自然環境調査報告書II植物・動物・その他編』富山市科学文化センター。
- 南部久男, 福田保 2005 「富山県中央部の里山（山田川・鍛冶川・浄土寺川）の魚類」 pp. 45-54『里山（富山県中央部）の自然環境調査報告書I環境・動物・植物編』富山市科学文化センター。
- 南部久男, 福田保, 荒木克昌 2006 「富山県中央部の里山の両生類に関するメモ」『里山（富山県中央部）の自然環境調査報告書II』 pp. 141-172『富山市科学文化センター』。
- 南部久男, 福田保 2006 「富山県中央部の里山（山田川・鍛冶川・浄土寺川）の魚類、調査地点の環境」『里山（富山県中央部）の自然環境調査報告書II』 pp. 131-139『富山市科学文化センター』。
- 南部久男, 福田保, 荒木克昌 2005 「富山県中央部の里山（山田村及び富山市南西部、婦中町北部）の両生類・爬虫類」 p. 55-62『里山（富山県中央部）の自然環境調査報告書I環境・動物・植物編』富山市科学文化センター。
- 高橋輝男 2005 「富山県中央部の里山（富山市三熊・山田村）の鳥類」 pp. 63-73『里山（富山県中央部）の自然環境調査報告書I環境・動物・植物編』富山市科学文化センター。
- 富山県 2002 「富山県の絶滅のおそれのある野生生物（レッドデータブックとやま）」
- 富山クマ緊急調査グループ・日本クマネットワーク（JBN）発行 2005 『富山県における2004年のツキノワグマの山没状況調査報告書』
- 湯浅輝久・山野浩平・篠田耕児 1997 「富山市古洞池の鳥類」『富山市科学文化センター研究報告』20:91-101.

表 11 富山市三熊周辺で確認されている絶滅危惧種(脊椎動物)

	和名	富山県カテゴリー	環境省カテゴリー
哺乳類	ヤマコウモリ	希少種	絶滅危惧 II 類
鳥類	オオハクチョウ	希少種	
	トモエガモ	希少種	絶滅危惧 II 類
	ヨシガモ	希少種	
	ホオジロガモ	希少種	
	オジロワシ	希少種	絶滅危惧 I B 類
	ミサゴ	希少種	準絶滅危惧
	オオタカ	危急種	絶滅危惧 II 類
	ツミ	希少種	
	ハイタカ	希少種	準絶滅危惧
	ハヤブサ	危急種	絶滅危惧 II 類
	オオバン	希少種	
	ヨタカ	希少種	
	ヤマセミ	危急種	
	カワセミ	希少種	
	サンショウウクイ	希少種	絶滅危惧 II 類
	サンコウチョウ	希少種	
両生類	ホクリクサンショウウオ	絶滅危惧種	絶滅危惧 I B 類
昆蟲類	シロマダラ	希少種	
魚類	メダカ	危急種	絶滅危惧 II 類
	スナヤツメ	希少種	絶滅危惧 II 類
	ドジョウ	希少種	

富山県(2002)による。

(6) 土壌動物調査

土壌動物は環境の指標性が高く、自然の状況をよく現す生物群と考えられるが、分類学の進歩が遅く専門家でないと同定できない場合が多い。そのためには多数の国内の専門家が長期の研究を行う必要があるが、今回の調査のように期限がきめられているときにはそれが不可能である。

幸い、富山市婦中地区の遺跡群がある近傍で富山市科学文化センターが近年里山を調査したのでそこで確認された種を報告する。また、遺跡の敷地内について、その環境状況を反映している動物群として陸産等脚類の調査を行い、6科6種を確認した。ニホンヒメナムシのように湿潤な森林を指標する種、セグロコシビロダンゴムシやフイリワラジムシのように雜木林や林縁、田園に多い種、オカダンゴムシやワラジムシのように人間営為の影響の及ぶ地域に多い種が見られたが、概して人間営為と密接にかかわる種の出現は少なかった。

以下は富山市科学文化センターが富山市の中～大型土壌動物全般についておこなった調査の報告を掲載する。

標高の低い富山市池多地区・婦中地区ならびに標高の高い里山としての富山市山田地区の土壌動物を調査した。調査地の標高は50～650mである。調査期間は1997年11月1日から2002年7月26日の4年9ヶ月であったが、主な調査は1999年に行われ、1997～1998年は予備調査、2000年以降は補充調査である。

調査は見つけ取りとツルグレン法により採取した。ツルグレン装置で約100時間抽出して採集し、動物群毎に分別した。それぞれの研究者に送付した。見つけ取りはシフティングを併用した。大型種の一部は他からの採集品をくわえた。なお同定は須摩靖彦（トビムシ）、平内好子（ササラダニ）、浅間茂（クモ）、石井清（多足類）、石川和男（トゲダニ）、芝実（ケダニ）、野村周平（甲虫）、根来尚（アリ）、佐藤英文（カニムシ）、鶴崎展巨（ササラダニ）、石塚小太朗（ミミズ）、宮本望（軟体動物）、菊地義昭（ソコミジンコ）の各氏にお願いした。等脚目などの甲殻類は布村が同定した。

種名まで同定できたものは環形動物ヒル類2種、黄毛類1種、軟体動物18種、節足動物ザトウムシ類7種、カニムシ類6種、ヤドリダニ類23種、ケダニ類13種、ササラダニ類92種、クモ類29種、甲殻類9種、多足類34種、トビムシ類86種、カマアシムシ類3種、コムシ類1種、アリゾカムシ類20種、アリ類25種であった。全体に良好な林を指標するものが多いが、人工的な環境を指標するものもあった。

参考文献

- ・布村昇、須摩靖彦、平内好子、浅間茂、石井清、石川和男、芝実、野村周平、根来尚、佐藤英文、鶴崎展巨、石塚小太朗、中村修美 2006 「富山市の中の里山の土壌動物」『里山（富山県中央部）の自然環境調査報告書 II 植物・動物・その他編』 富山市科学文化センター：53-124
- ・布村昇 2007 『富山市婦中町王塚・千坊山遺跡群の陸産等脚目甲殻類』『富山市科学文化センター研究報告 第30号』 pp. 77-78

(7) 気象調査

ア. はじめに

本遺跡群周辺での気象観測は行っていないが、近く(北東約10km)の富山地方気象台の気温・降水・降雪の観測データをもとにその特徴を報告する。

なお、ここで使用するデータは平年値(1971年～2000年の平均値)である。

イ. 気温

冬季は晴れる日が少ないため、同緯度の太平洋側の地点(表はなし)と比較して、最高気温が低く、最低気温が高い傾向にある。それでも1月、2月は最低気温の平均は0°C以下である。

富山	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平均気温	2.5	2.5	5.7	11.8	16.7	20.6	24.7	26.1	21.8	15.9	10.4	5.5
最高気温	5.8	6.1	10.2	17.0	21.5	24.7	28.8	30.4	26.0	20.6	15.0	9.4
最低気温	-0.4	-0.7	1.7	6.8	12.1	17.2	21.2	22.4	18.2	11.9	6.4	2.1

ウ. 降水

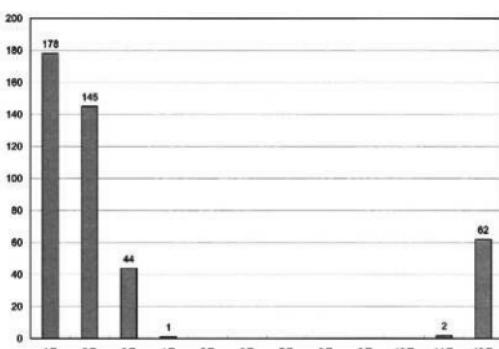
一年を通した降水量は2245mmとかなり多く、鹿児島と同程度である。7月、9月、11月～1月は月降水量が200mmを超えている。

富山	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年
降水量	255	173	146	123	127	183	223	181	230	159	214	236	2245

エ. 降雪

降雪は11月から4月にかけて観測される。一シーズンの降雪の深さの合計は平均433cmである。1月、2月が多く、それぞれ178cm、145cmである。

また、積雪の深さ最大は平均69cmである。



オ. 気象調査の留意点

遺跡群の管理・整備については、多雨や冬季の積雪や凍結などを常に考慮に入れる必要がある。

3. 社会的調査の結果

(1) 土地利用の現状

遺跡名	土地利用の概要
王塚古墳 (P83 図 35)	<ul style="list-style-type: none"> 王塚古墳を含む周辺丘陵は婦中ふるさと自然公園になっている。史跡指定区域は、広葉樹（コナラ、サクラ等）に覆われ、定期的な下草刈りにより墳丘が良くわかる。 境界北側は市道に面し、南東・南西側は史跡敷地より2mほど低く、境界に擁壁が設けられ、富山簡易保険養センターの敷地になっている。 北西側は草地が広がり、エンジュやサルスベリなどが疎らに植栽されている。
勅使塚古墳 (P84 図 36)	<ul style="list-style-type: none"> 勅使塚古墳を含む周辺丘陵は婦中ふるさと自然公園になっており、駐市場、便所、ハナショウブ園、散策路などが整備されている。史跡指定区域は、広葉樹林地及び針葉樹林地（スギ植林地）になっている。 古墳の周りはコナラなどの広葉樹林におおわれ、下草が定期的に刈り払われ、見通しが良い景観となっている。 斜面の広葉樹林は、中・低木が密生し、区域北側の斜面と西側境界側にスギ植林が分布している。 区域北側の斜面上部は急勾配であり、斜面下部はゆるやかな地形となり水田跡地が見られ、潤潤な環境になっている。
千坊山遺跡 (P85 図 37)	<ul style="list-style-type: none"> 丘陵斜面は針葉樹林（スギ植林）が分布し、丘陵台地はスギ植林や畠、果樹園、野草地等が入り混じって分布している。 野草地の多くは、もともと畠地として利用していたと思われ、耕作を休止した区域は、スキやクズに覆われている。 区域北東側は古里小学校の旧運動場があり、現在も野外学習などで活用されている。 区域南側の境界外側には墓地があり、西側の区域内にも墓地が1箇所見られる。
六治古塚墳墓 (P86 図 38)	<ul style="list-style-type: none"> 墳墓は針葉樹林（スギ植林）と広葉樹林に覆われており、北東側の民家に面する部分は野草地になっている。 南側は辻呂川に面し、急な斜面中腹には用水跡がある。用水敷設時に斜面を大きく掘削しているようである。 墳墓の杉の中に落雷したと思われる樹木があり、幹が上部より深く裂けている。
向野塚墳墓 (P86 図 38)	<ul style="list-style-type: none"> 史跡指定区域は、北側に竹林が分布し、南側は畠になっている。 区域北西の富山病院所有地には井戸が設けられている。
富崎塚墳墓群 (P87 図 39)	<p>1号墓・2号墓</p> <ul style="list-style-type: none"> 墳墓は野草で覆われ、南側は牧草地、北側の斜面地は広葉樹林が分布している。 <p>3号墓</p> <ul style="list-style-type: none"> 墳墓はスギ植林地であるが、モウソウチクが周辺より進入し、スギと竹が混生する林地になっている。 南側は墓地に接している。
富崎千里 古墳群 (P88 図 40)	<ul style="list-style-type: none"> 史跡指定区域の大部分は針葉樹林（スギ植林）となっている。南西の駐車場側は、スキ・ワラビ・ハギなどが生育する野草地になっている。 区域北側は、急な崖になっている。

表 12 土地利用割合

	土塚古墳	動使塚古墳	千坊山遺跡	六治古墳墳墓	向野塚墳墓	富崎墳墓群		富崎千里 古墳群	
						1・2号	3号		
面積 (m ²)	3,870.33	23,461.17	49,952.59	2,821.64	2,297.82	5,890.36	2,337.42	27,556.75	
都市集落									
住宅地									
公共公益用地									
公園用地									
農地	田								
	普通畑		4,451	8.9%		807	35.1%		
	果樹園		613	1.2%					
	牧草地 (牧場)					2,585	43.9%		
林地等	針葉樹林	3,833	16.3%	24,256	48.6%	1,166	41.3%		
	広葉樹林	2,410	62.3%	19,628	83.7%	1,698	3.4%	823	29.2%
	竹林			2,636	5.3%			1,062	18.0%
	野草地	1,460	37.7%	11,431	22.9%	833	29.5%	2,244	38.1%
	裸地							102	4.5%
								16,110	58.4%
								379	1.4%
河川・湖沼等	河川								
	湖沼								
	溝池 (調整池)								
道路	道路用地								
	農道等			553	1.1%				
その他	墓地								
	ゴルフ場								
	駐車場								
	運動場			4,315	8.6%				

※土地利用面積求積は、ブランニメーターによる。面積は、丈量測量及び確定測量による実測面積。

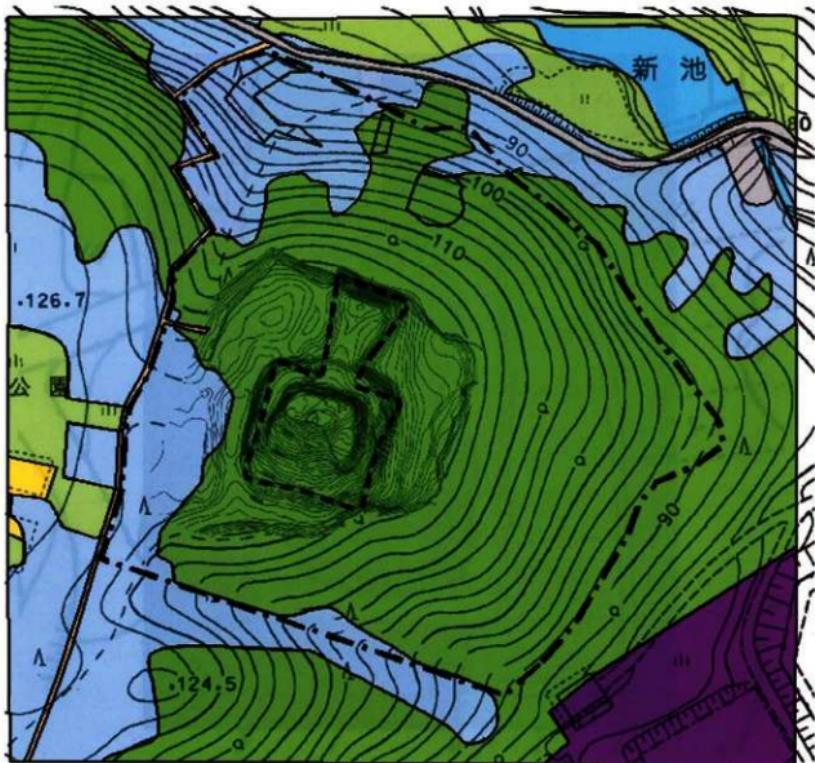


土地利用図 凡例			
都市集落		道路等	
	住宅地		道路用地
	公共公益用地		農道等
林地等			
	針葉樹林		史跡指定範囲
	広葉樹林		
	野草地		



0 20 40m

図35 王塚古墳 土地利用図 (1 : 1,000)



土地利用図 凡例			
都市集落		河川・湖沼等	
	公共公益用地		河川
	公園用地		溜池（調整池）
農地		道路等	
	普通畠		道路用地
	林地等		農道等
	針葉樹林		
	広葉樹林		史跡指定範囲
	野草地		

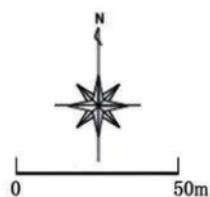
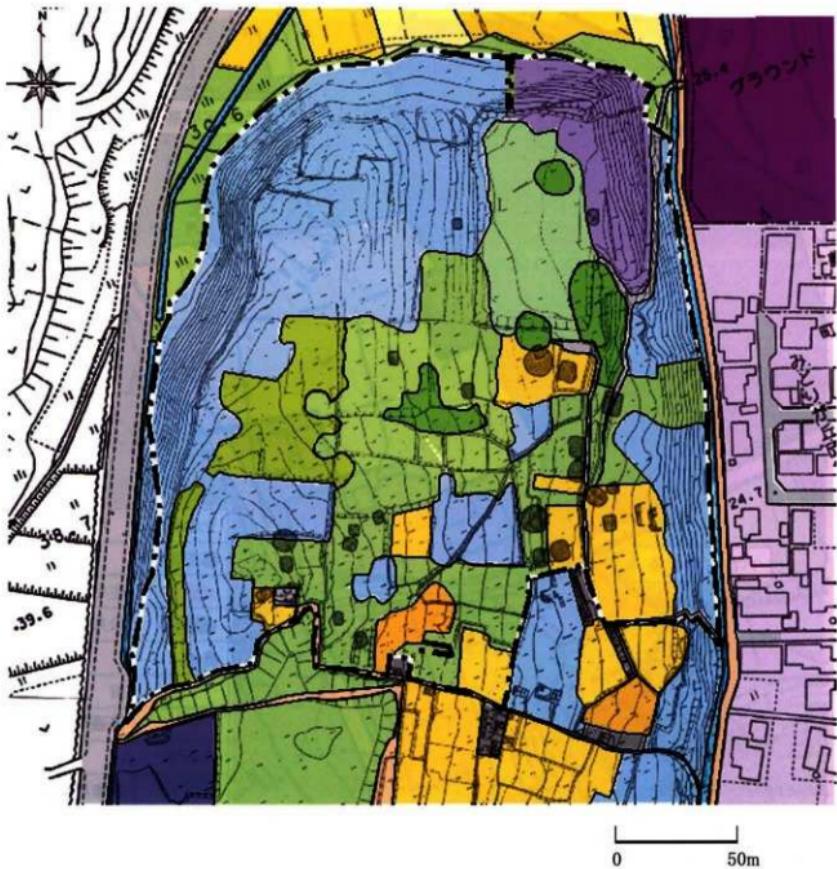


図36 勅使塚古墳 土地利用図 (1 : 1,500)



土地利用図 凡例						
都市集落		林地等		道路等		
■	住宅地	■	針葉樹林	■	道路用地	[二.] 史跡指定範囲
■	公共公益用地	■	広葉樹林	■	農道等	
農地		■	竹林	その他		
■	田	■	野草地	■	墓地	
■	普通畠	河川・湖沼等		■	駐車場	
■	果樹園	■	河川・水路	■	運動場 (芝+野草)	

図37 千坊山遺跡 土地利用図 (1 : 2,000)

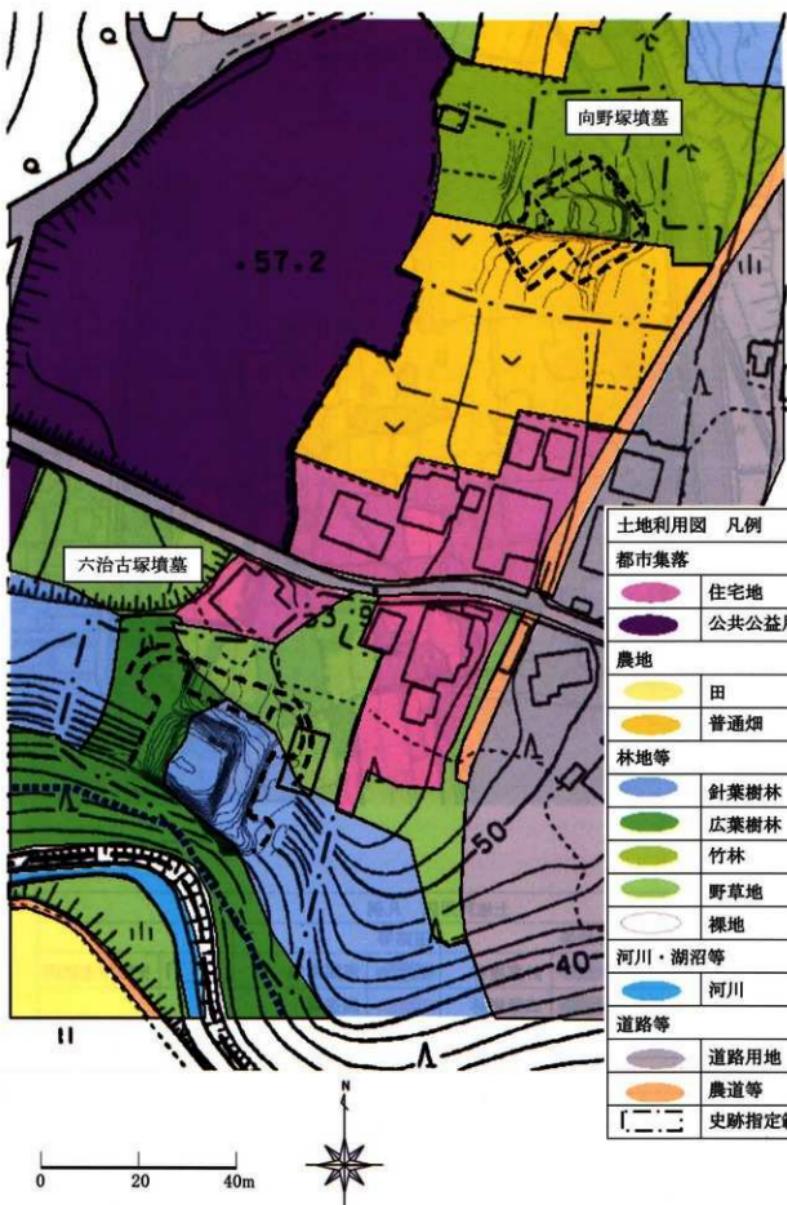


図38 六治古塚墳墓・向野塚墳墓 土地利用図 (1:1,000)

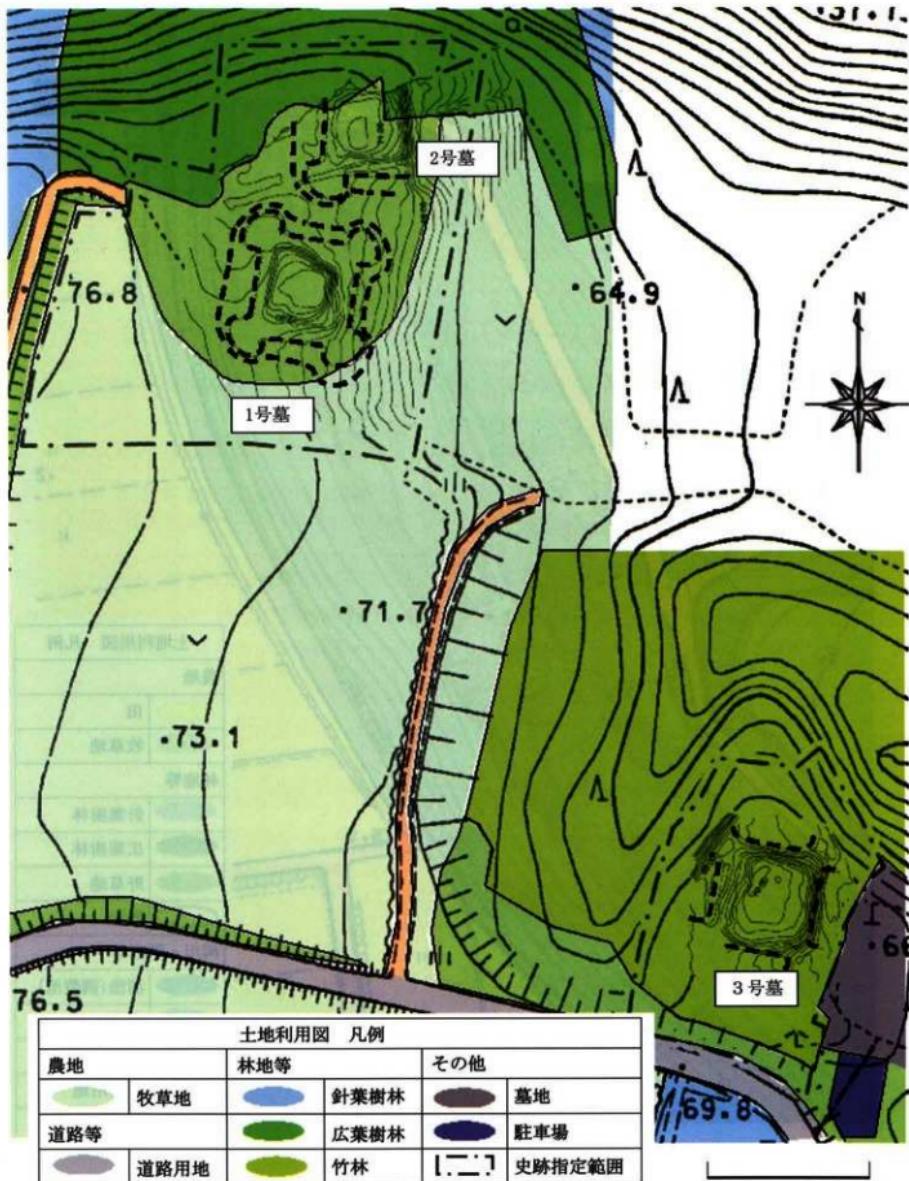


図39 富崎墳墓群 土地利用図 (1 : 1,500)

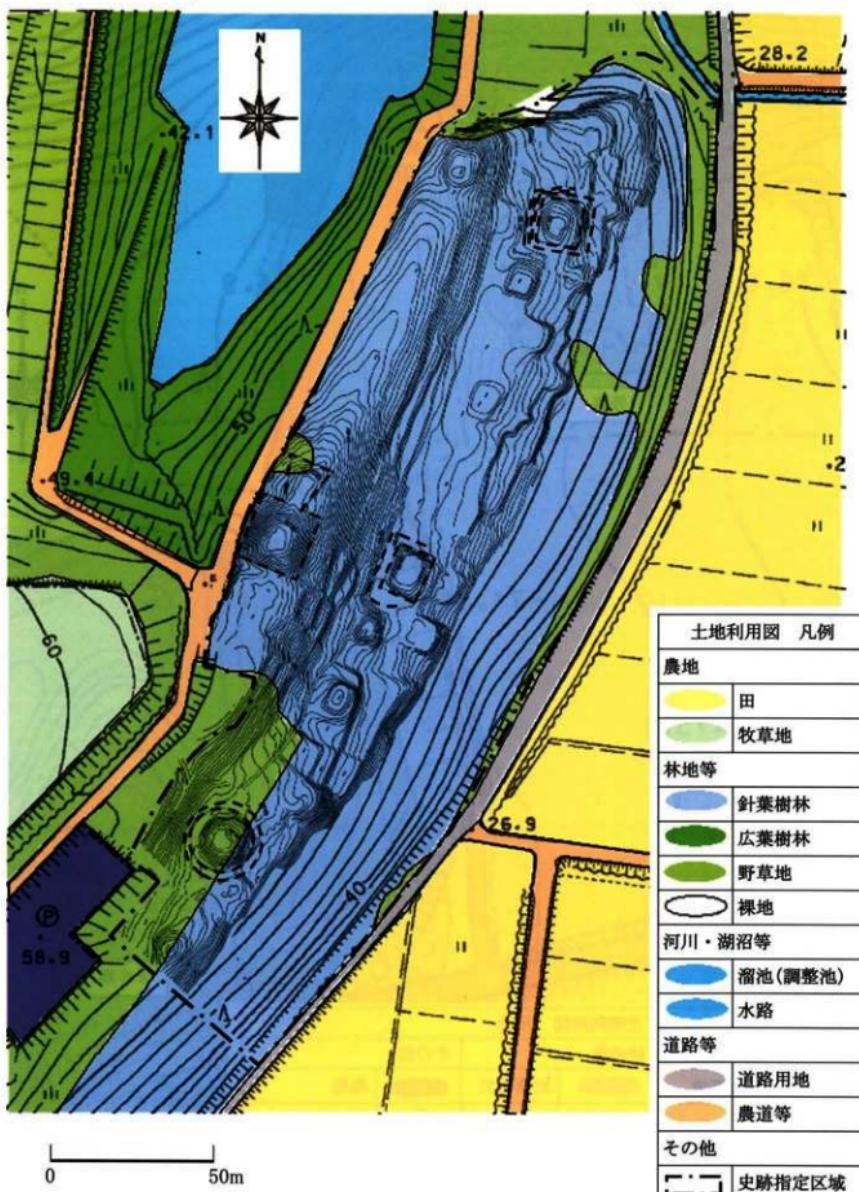


図40 富崎千里古墳群土地利用図 (1:1,500)

(2) 土地所有の現状

指定地の土地所有の現状は以下のとおりである。

遺跡名	指定面積 (m ²)	民有地 (m ² ・%)	寺社地 (m ² ・%)	県有地 (m ² ・%)	市有地 (m ² ・%)	国有地 (m ² ・%)
王塚古墳 (P90 図 41)	2,452 m ²		2,452 m ² (100%)			
勅使塚古墳 (P91 図 42)	22,617 m ²	13,678 m ² (60.5%)		富山県立ふるさと養護学校 8,939 m ² (39.5%)		
千坊山遺跡 (P92 図 43)	45,654 m ²	41,024 m ² (89.9%)			旧運動場 3,754 m ² (8.2%) 里道・水路 876 m ² (1.9%)	
六治古墳墳墓 (P93 図 44)	2,490 m ²	2,475 m ² (99.4%)			里道・水路 15 m ² (0.6%)	
向野塚墳墓 (P93 図 44)	1,896 m ²	1,891 m ² (99.7%)			里道・水路 5 m ² (0.3%)	
富崎墳墓群 (P94 図 45)	8,118 m ²					
1号墓・2号墓	5,839 m ²	617 m ² (10.6%)		富山県農業技術センター畜産試験場 5,121 m ² (87.7%)		里道・水路 101 m ² (1.7%)
3号墓	2,279 m ²		116 m ² (5.1%)	富山県農業技術センター畜産試験場 2,163 m ² (94.9%)		
富崎千里 古墳群 (P95 図 46)	27,651 m ²	535 m ² (1.9%)		富山県農業技術センター畜産試験場 27,114 m ² (98.0%)		里道・水路 2 m ² (0.1%)



図41 王塚古墳 土地所有区分図 (1:600)

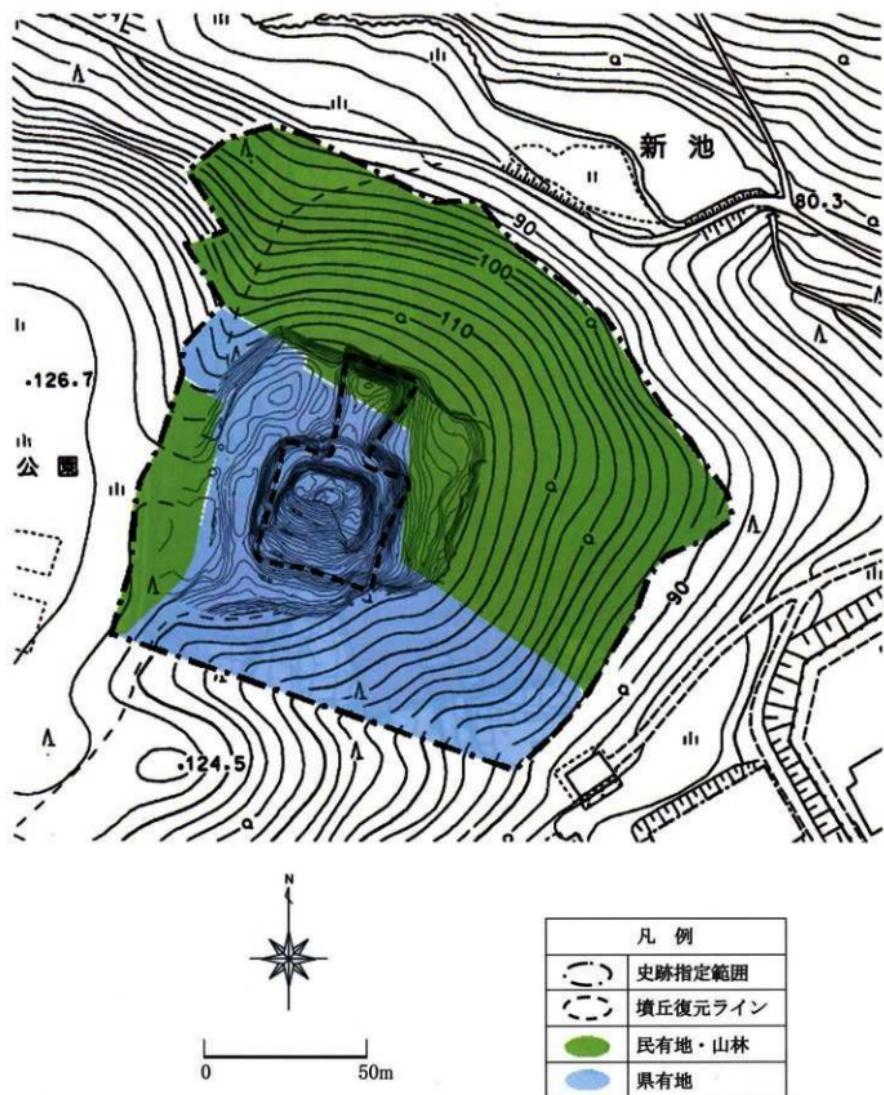
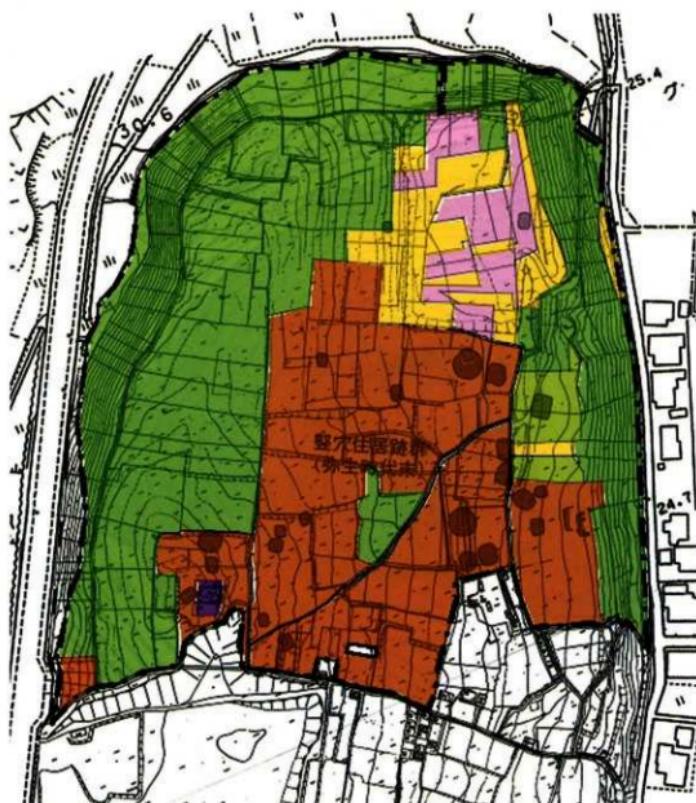


図42 勅使塚古墳 土地所有区分図 (1:1,500)



凡例	
○	史跡指定範囲
●	竪穴住居確認部分
■	民有地・山林
●	民有地・畑
●	民有地・原野
●	民有地・雜種地
●	寺社地・墓地
●	市有地

図43 千坊山遺跡 土地所有区分図 (1:2,000)

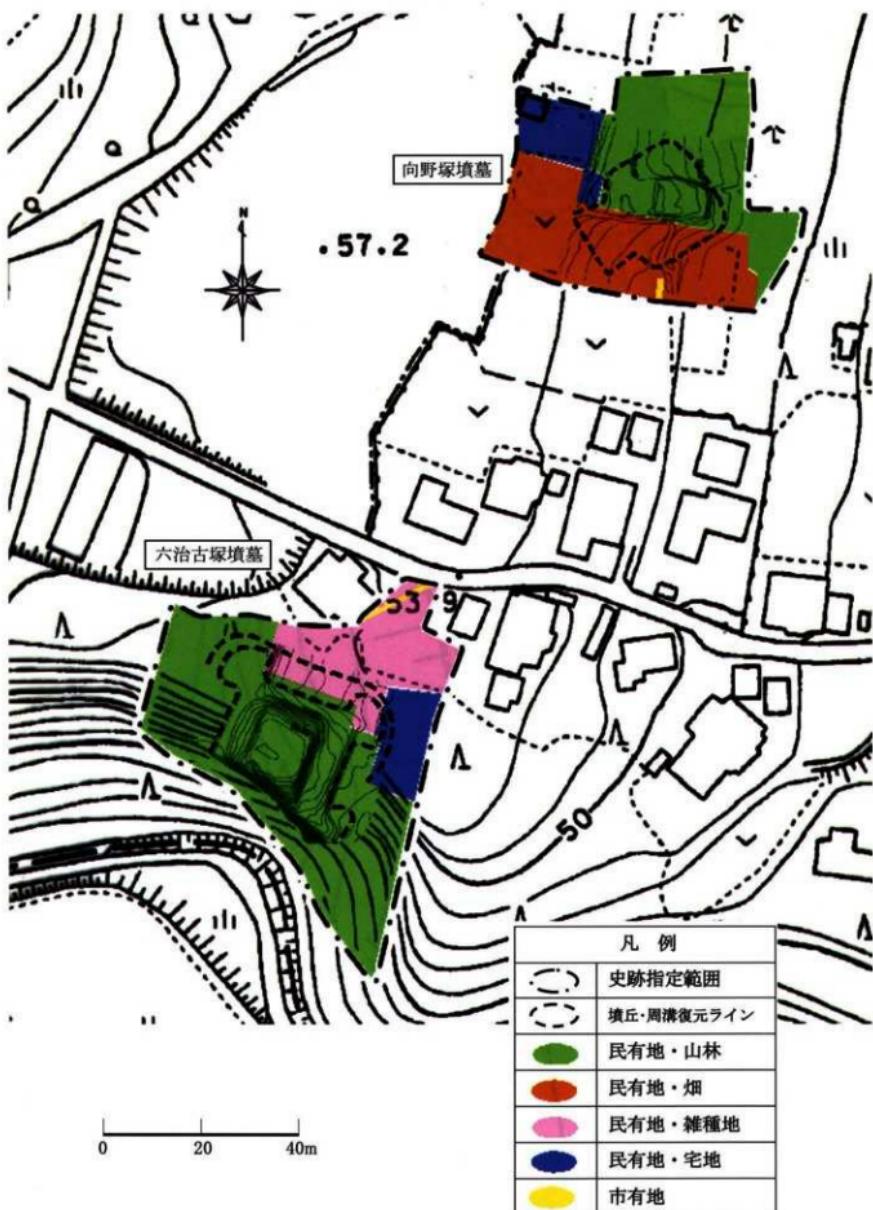


図44 六治古塚墳墓・向野塚墳墓 土地所有区分図 (1:1,000)

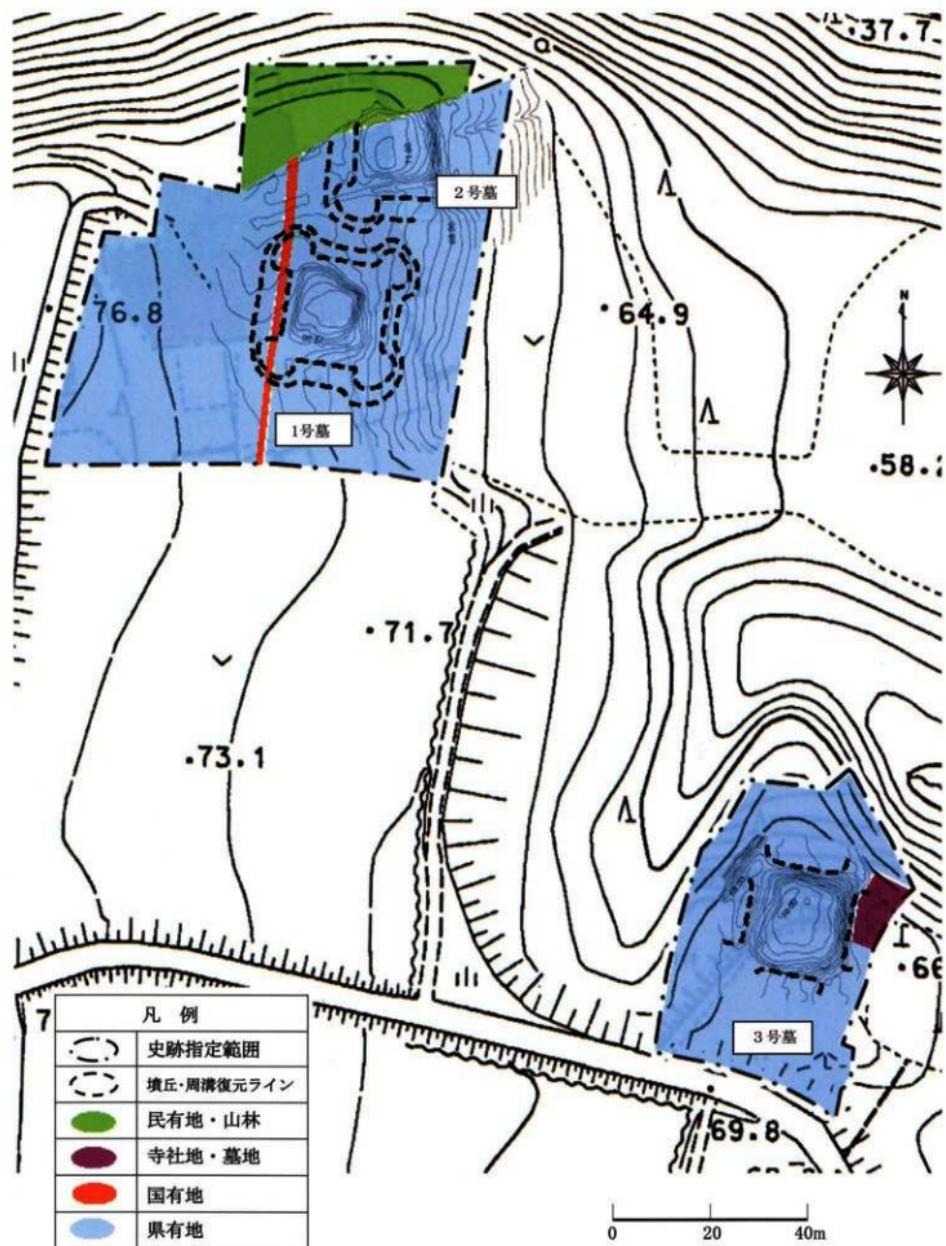


図45 富崎墳墓群 土地所有区分図 (1:1,000)

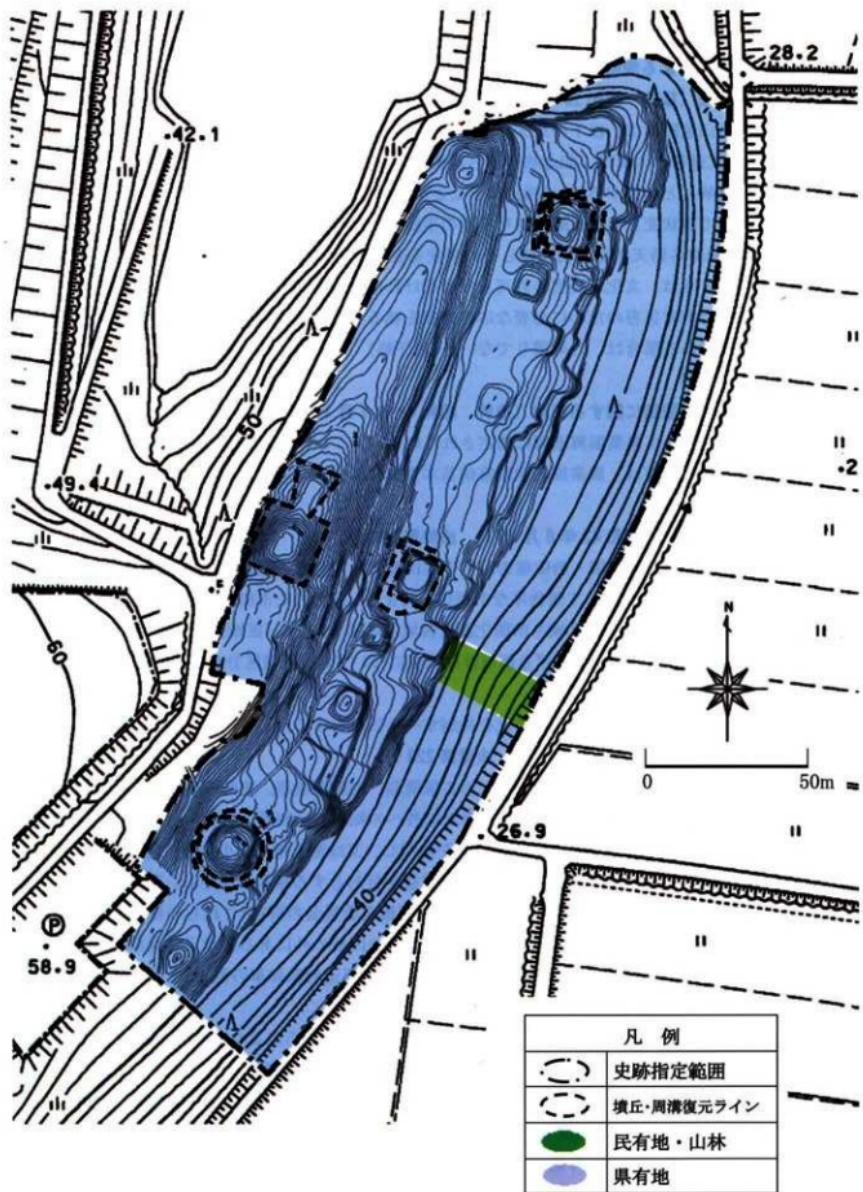


図46 富崎千里古墳群 土地所有区分図 (1:1,500)

(3) 史跡にかかる法的規制

ア. 文化財保護法による規制

(7) 文化財保護法（抜粋 昭和 25 年 5 月 30 日 法律第 214 号）

- a. 王塚・千坊山遺跡群は、以下の条文に基づき、史跡に指定されている。

第 109 条 文部科学大臣は、記念物のうち重要なものを史跡、名勝又は天然記念物(以下「史跡名勝天然記念物」と総称する。)に指定することができる。(以下略)

- b. 史跡において現状変更を行う際、許可申請の手続きが必要である。

第 125 条 史跡名勝天然記念物に因るその現状を変更し、又はその保存に影響を及ぼす行為をしようとするときは、文化庁長官の許可を受けなければならない。ただし、現状変更については維持の措置又は非常災害のために必要な応急措置を執る場合、保存に影響を及ぼす行為については影響の軽微である場合は、この限りでない。(以下略)

イ. その他の法令等

(7) 農業振興地域の整備に関する法律（抜粋 昭和 44 年 7 月 1 日 法律第 58 号）

- a. 史跡は周辺を含めて農業振興地域に指定されている。

第 6 条 都道府県知事は、農業振興地域整備基本方針に基づき、一定の地域を農業振興地域として指定するものとする。

(1) 都市計画法（抜粋 昭和 43 年 6 月 15 日 法律第 100 号）

- a. 市街化調整区域…王塚古墳・勅使塚古墳・千坊山遺跡・六治古塚墳墓・向野塚墳墓が該当する。

第 7 条 都市計画区域について無秩序な市街化を防止し、計画的な市街化を図るため必要があるときは、都市計画に、市街化区域と市街化調整区域との区分(以下「区域区分」という。)を定めることができる。ただし、次に掲げる都市計画区域については、区域区分を定めるものとする。(以下略)

第 7 条 3 項 市街化調整区域は、市街化を抑制すべき区域とする。

(1) 農地法（抜粋 昭和 27 年 7 月 15 日 法律第 229 号）

- a. 王塚古墳・勅使塚古墳・千坊山遺跡・六治古塚墳墓・向野塚墳墓・富崎墳墓群・富崎千里古墳群の登記地目が農地の場合、所有権移転、農地以外への転用には制限がある。

第 3 条 農地又は採草放牧地について所有権を移転し、又は地上権、永小作権、質権、使用貸借による権利、質借権若しくはその他の使用及び収益を目的とする権利を設定し、若しくは移転する場合には、政令で定めるところにより、当事者が農業委員会の許可(これらの権利を取得する者(政令で定める者を除く。)がその住所のある市町村の区域の外にある農地又は採草放牧地について権利を取得する場合その他政令で定める場合には、都道府県知事の許可)を受けなければならぬ。(以下略)

第 4 条 農地を農地以外のものにする者は、政令で定めるところにより、都道府県知事の許可(その者が同一の事業の目的に供するため四ヘクタールを超える農地を農地以外のものにする場合(農村地城工業等導入促進法(昭和四十六年法律第百十二号)その他の地域の開発又は整備に関する法律で政令で定めるもの(以下「地域整備法」という。)の定めるところに従って農地を農地以外のものにする場合で政令で定める要件に該当するものを除く。)には、農林水産大臣の許可)を受けなければならない。(以下略)

第 5 条 農地を農地以外のものにするため又は採草放牧地を採草放牧地以外のもの(農地を除く。次項において同じ。)にするため、これらの土地について第三条第一項本文に掲げる権利を設定

し、又は移転する場合には、政令で定めるところにより、当事者が都道府県知事の許可(これらの権利を取得する者が同一の事業の目的に供するため四ヘクタールを超える農地又はその農地と併せて採草放牧地について権利を取得する場合(地域整備法の定めるところに従つてこれらの権利を取得する場合で政令で定める要件に該当するものを除く。)には、農林水産大臣の許可)を受けなければならない。(以下略)

(エ) 森林法(抜粋 昭和 26 年 6 月 26 日法律第 249 号)

- a. 保安林…富崎墳墓群 3 号墓の一部が指定。樹木の伐採や地形の改変の際、規制を受ける。

第 25 条 農林水産大臣は、次の各号(指定しようとする森林が民有林である場合にあっては、第一号から第三号まで)に掲げる目的を達成するため必要があるときは、森林(民有林にあっては、重要流域(二以上の都府県の区域にわたる流域その他の国士保全上又は国民経済上特に重要な流域で農林水産大臣が指定するものをいう。以下同じ。)内に存するものに限る。)を保安林として指定することができる。ただし、海岸法第三条の規定により指定される海岸保全区域及び自然環境保全法(昭和四十七年法律第八十五号)第十四条第一項の規定により指定される原生自然環境保全地域については、指定することができない。

- … 水源のかん養
- 一 土砂の流出の防備
- 三 土砂の崩壊の防備
- 四 飛砂の防備
- 五 風害、水害、潮害、干害、雪害又は霧害の防備
- 六 なだれ又は落石の危険の防止
- 七 火災の防備
- 八 魚つき
- 九 航行の目標の保存
- 十 公衆の保健
- 十一・名所又は旧跡の風致の保存

(イ) 史跡指定地は都市公園法、都市緑地法、自然公園法、急傾斜の崩壊による災害の防止に関する法律で指定される地域には該当しない。

ウ. 富山市条例・規則

(フ) 富山市婦中ふるさと自然公園条例(抜粋 平成 17 年 4 月 1 日制定、条例第 218 号)

- a. 公園区域に該当する遺跡…王塚古墳、軒使塚古墳

第 1 条 この条例は、合併前の婦中町の優れた自然の風景地を保護するとともに、その利用の増進を図り、もって市民の保健及び休養に資することを目的とする。

第 12 条 ふるさと自然公園の区域内において次に掲げる行為をしようとする者は、あらかじめ市長に、当該行為の種類、場所及び行為の内容について届け出なければならない(以下略)。

(イ) 富山市婦中ふるさと自然公園の区域の指定(平成 17 年 4 月 1 日制定、告示第 12 号)

(4) 史跡周辺の環境(P101 図 47)

ア. 周辺のおもな文化財、文化施設等(※距離は直線距離)

史跡の分布は、羽根・長沢・新町エリアと富崎・千里エリアに分かれ。整備・活用にあたっては、各エリア内の文化施設や観光資源との連携によって、複合的な活用を検討していくことが重要である。

また、史跡と密接な関係にある未指定の遺跡として、鏡坂墳墓群や杉谷古墳群などがある。今後、

史跡を構成する遺跡を核としながら、相互に関連する遺跡も視野に入れた活用が望まれる。

なお、既に整備されている史跡（北代縄文広場、安田城跡歴史の広場）や各展示施設（婦中埋蔵文化財資料館、富山市考古資料館、富山市郷土博物館など）を含めた富山市全体としての各文化施設とのネットワーク化を検討する。

(7) 羽根・長沢・新町エリア

a. 富山市婦中ふるさと自然公園（王塚古墳・勒使塚古墳・五ツ塚古墳群・各願寺）

富山市婦中町羽根に所在し、婦中総合行政センター農林商工課が所管している。園内は、散策路が整備されており、王塚古墳や勒使塚古墳、五ツ塚古墳群（円墳群）、ふるさと創生館（休憩・展望施設）、各願寺などが周遊できる（約3km、見学所要時間：約2時間）。園内には芝生広場や遊具広場、菖蒲園、散策路、トイレ、駐車場などが整備されている。

また、各願寺は701年創建と伝わる古刹で、毎年4月半ばに「曲水の宴」が開催されている。

b. 鏡坂墳墓群

富山市婦中町外輪野に所在し、羽根・長沢・新町エリアと富崎エリアの中間地点に位置する。2基の四隅突出型埴丘墓群があり、六治古塚墳墓や富崎墳墓群と同じ婦負の地域共同体を構成していた集団の墓域として、史跡王塚・千坊山遺跡群とは密接な関係にある。

c. 富山市婦中埋蔵文化財資料館

富山市婦中町笹倉に所在し、千坊山遺跡の東方約2.5kmに位置する。史跡王塚・千坊山遺跡群関連の出土品の展示している。また、市内の代表的な弥生～古墳時代の遺跡の企画展を年2～3回開催している。富山地方鉄道の路線バスが通るが本数は限られている（富山駅発富山簡易保養センター行 平日5本、土・日・祝日3本）。

d. とやま古洞の森・自然活用村

富山市三熊に所在し、王塚古墳の西方約1.5kmに位置する。野鳥の観察、農業体験、バーベキュー、温泉などが楽しめる。

e. 富山市科学博物館付属 富山市天文台

富山市三熊に所在し、王塚古墳の南西約1.5kmに位置する。国内有数の口径1.0mの反射望遠鏡を備えている。星空の部屋や天文展示コーナー、野鳥観察コーナーがある。天文展示コーナーでは、隕石に触れることができる。

(8) 富崎・千里エリア

a. 富山県農業技術センター畜産試験場（丘の夢牧場）

富山市婦中町富崎、千里に所在する。北東端に「富崎墳墓群」、北西端に「富崎赤坂遺跡」「離山砦遺跡」、南東端に「富崎千里古墳群」がある。ミニ動物園など一部の施設は一般公開され、毎年10月にビーフフェアが開催されている。基本的には関係者以外立入禁止となっている。

b. 富崎城跡

富山市婦中町富崎に所在し、富崎墳墓群の西側に接する山城である。戦国時代の神保氏の有力支城のひとつとして重要な役割を果たした。現在、曲輪や土堀、堀などがよく残っている。

c. 本覚寺

富山市婦中町富崎に所在し、富崎墳墓群の東方約100mに位置する。国認定重要美術品の仏像1体（銅像楊柳観音像）がある。

d. 常楽寺とウラジロガシ群生林（県指定自然環境保全地域）

富山市婦中町千里に所在し、富崎千里古墳群の南西約300mに位置する。常楽寺は702年創建と

伝えており、国指定重要文化財の仏像2体（木造十一面觀音立像、木造聖觀音立像）がある。毎年4月半ばに御開扉される。

また、本寺の背後の丘陵は、「千里源藏谷中世古墓群」と「ゴダイ塚」のふたつの遺跡がある。前者では、五輪塔などの石造物が約150点確認されており、後者では、円墳（？）2基、塚7基などが存在する。

さらに周辺は、富山県の自然環境保全地域に指定されているウラジロガシの群生林がある。

e. 富山県自然博物園ねいの里

富山市婦中町吉住に所在し、富崎千里古墳群の西方約3.5kmに位置する。自然・野鳥の観察などが楽しめる。

(i) 奥羽山丘陵南部エリ亞

a. 杉谷古墳群

富山市杉谷に所在し、千坊山遺跡の北東約3kmに位置する。杉谷4号墳（四隅突出型墳丘墓）を含む古墳群である。富山大学杉谷キャンパスの敷地内にあり、散策路もある。婦負の地域共同体を構成していた集団の墓域として、史跡王塚・千坊山遺跡群と密接な関係にある。

b. 古沢塚山古墳

富山市古沢に所在し、千坊山遺跡の北東約4kmに位置する。全長40.95mの前方後円墳である。墳丘の形などから、5世紀前半に築かれたと推定されている。

c. 富山市安田城跡歴史の広場・安田城跡資料館

富山市婦中町安田に所在し、千坊山遺跡の北東約4kmに位置する。史跡安田城跡を復元整備した戦国時代の平城で、平成5年5月13日にオープンした。広場内には郭や堀が復元されている。また、本城跡の出土品などを展示した安田城跡資料館（ガイダンス施設）も併設されている。

d. 桶谷南遺跡

富山市桶谷に所在し、千坊山遺跡の北方約3.5kmに位置する。奈良時代の瓦や土器を焼いた窯跡が2基など確認されている。約270点にも及ぶ軒丸瓦や古代仏教関連遺物などが出土している。

越中国の窯業生産体制や仏教文化の浸透を解明する上で重要な遺跡である。富山市指定文化財。

e. 境野新遺跡

富山市境野新に所在し、千坊山遺跡の北方約2.5kmに位置する。古墳時代中期の竪穴住居が2基確認されている。現在は公有化され（富山市）、保存整備されている。

f. 金草第一古窯

富山市金屋に所在し、千坊山遺跡の北東約5kmに位置する。飛鳥時代後半の須恵器窯で、県指定史跡である。

g. 白鳥城跡

富山市吉作に所在し、千坊山遺跡の北東約6.5kmに位置する。空堀、土壘、敷石跡、礎石などが確認され、中世十師器、越前、中国製染付碗などが出土した。また、本丸の中世層の下から弥生時代後期末の竪穴状造構や環濠が確認され、高地性集落と推定されている。

h. 富山市ファミリーパーク

富山市古沢に所在し、千坊山遺跡の北東約4.5kmに位置する。緑豊かな里山の中で動物とふれあうことができる。園内は、動物ゾーン、自然ゾーン、自然体験センターなどにわかれている。

(j) 奥羽山丘陵北部エリ亞

a. 富山市北代縄文広場・北代縄文館

富山市北代に所在し、千坊山遺跡の北東約8.5kmに位置する。縄文時代中期の集落である史跡北代遺跡を復元整備した。体験学習も可能な北代縄文館(ガイダンス施設)が併設されている。

b. 富山市民俗民芸村・考古資料館

富山市安養坊に所在し、千坊山遺跡の北東約8kmに位置する。民芸館・民芸合掌館・陶芸館・民俗資料館・光葉資料館・考古資料館・喜牛人記念美術館・茶室円山庵・とやま上人形工房がある。考古資料館では、旧石器から平安時代までの富山市域の出土品が展示されている。

c. 富山県埋蔵文化財センター

富山市茶屋町に所在し、千坊山遺跡の北東約7.5kmに位置する。展示施設あり。

(d) 神通川沿岸エリア

a. 鵜坂神社

富山市婦中町鵜坂に所在し、千坊山遺跡の東方約6kmに位置する。社記によると大彦命の勧請により創建されたと伝わる。婦負郡式内社7座のうちのひとつである。近くに大伴家持の歌碑がある。

b. 富山市郷土博物館(富山城)

富山市本丸に所在し、千坊山遺跡の北東約9kmに位置する。城址公園内にあり、平成17年11月、中世以来の富山城の歴史を紹介する博物館としてリニューアルオープンした。建物は国の登録有形文化財に登録されている。

c. 富山県中央植物園

富山市婦中町上巒田に所在し、千坊山遺跡の東方約5kmに位置する。約25ヘクタールの敷地に国内外5000種以上の植物が展示されている。

イ. 交通の現状

史跡は延長約3kmの範囲に点在しており、効率的に見学するには車での移動が便利である。また、徒歩での散策は、千坊山遺跡一六治古塚墳墓一向野塚墳墓一王塚古墳一勅使塚古墳は、約2.4kmで、約2時間、富崎墳墓群一富崎千里古墳群は、約2kmで、約1時間半となる。

動線をスムーズにつなぐように、個々の史跡における案内板の工夫や進入路、駐車場などについて検討する。

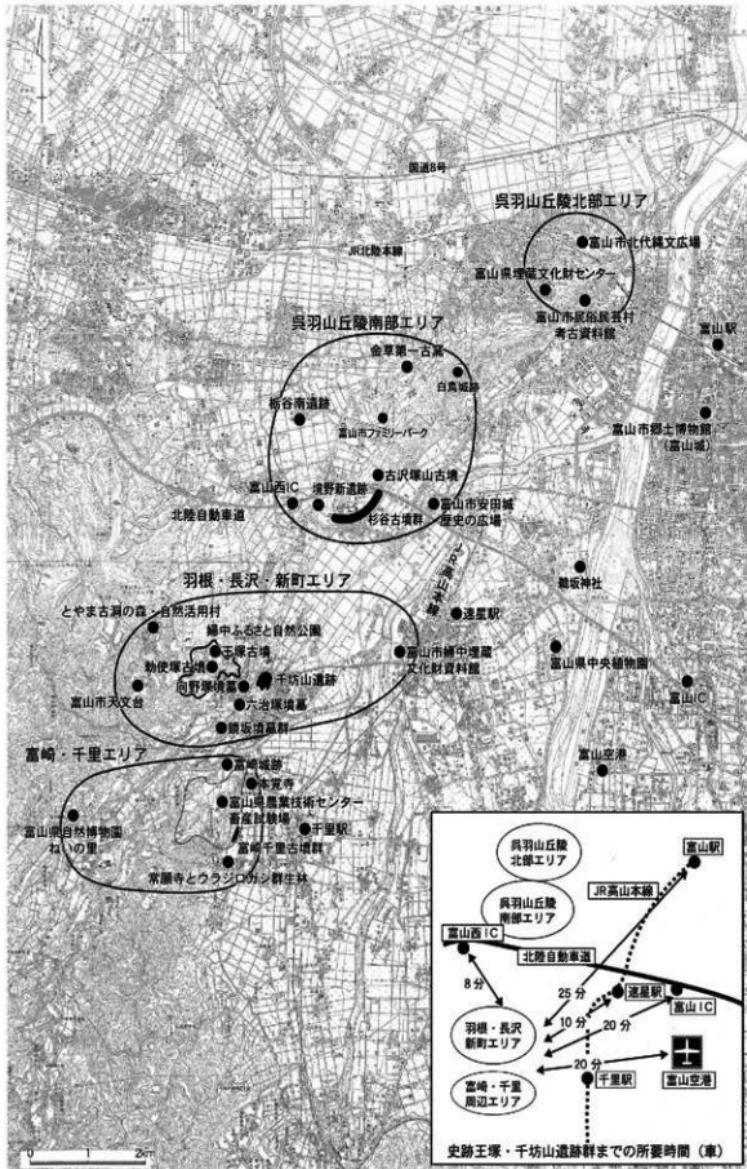
(f) 羽根・長沢・新町エリア

千坊山遺跡は国道359号線に接し、ここから六治古塚墳墓・向野塚墳墓へは約300mと近い。王塚古墳・勅使塚古墳のある婦中ふるさと自然公園へは、国道359号線から分岐する市道がある。

このエリアへは、車で北陸自動車道富山西インターから約8分、JR富山駅から約25分、JR高山本線連星駅から約10分、富山空港から約20分である。富山地方鉄道の路線バスもあるが本数は限られる(ふるさと自然公園へは、富山駅前発 富山簡易保養センター行終点下車[富山駅から約36分]、千坊山遺跡・六治古塚墳墓・向野塚墳墓へは、富山駅前発 富山病院行終点下車[富山駅から約33分])。

(g) 富崎・千里エリア

羽根・長沢・新町エリアから富崎エリアまでは、国道359号線から国道472号線を通って移動ができる(約1.5km、車で約5分)。富崎墳墓群・富崎千里古墳群のある富崎丘陵へは、畜産試験場の管理道路を使用しないと進入できない。このエリアへはJR高山本線千里駅より車で約5分である。





王塚古墳 現状（北西から）



王塚古墳現況 後方部現状（東から）

写真4 史跡の現状写真（1）



王塚古墳 後方部損壊状況（南西から）



王塚古墳 前方部損壊状況（北から）

写真5 史跡の現状写真（2）



王塚古墳 指定地西側平成元年の桜植樹（北から）



王塚古墳 前方部歩道



王塚古墳 コンクリート基礎（後方部墳頂・東から）



王塚古墳 前方部標柱など（北西から）



王塚古墳 コンクリート柱とフェンス



王塚古墳 境界杭

写真 6 史跡の現状写真（3）



勅使塚古墳 現状（北西から）



勅使塚古墳 後方部墳丘損壊状況（南西から）

写真7 史跡の現状写真（4）



勅使塚古墳 平成10年度試掘確認調査時の埋め戻し土囊（後方部墳頂・東から）



勅使塚古墳 くびれ部損壊状況（北西から）

写真7 史跡の現状写真（4）



勅使塚古墳 前方部前端現状（西から）



勅使塚古墳 後方部ベンチと土叢（南から）

写真9 史跡の現状写真（6）



千坊山遺跡の景観（南から）



千坊山遺跡 指定地内墓地（西から）

写真10 史跡の現状写真（7）